

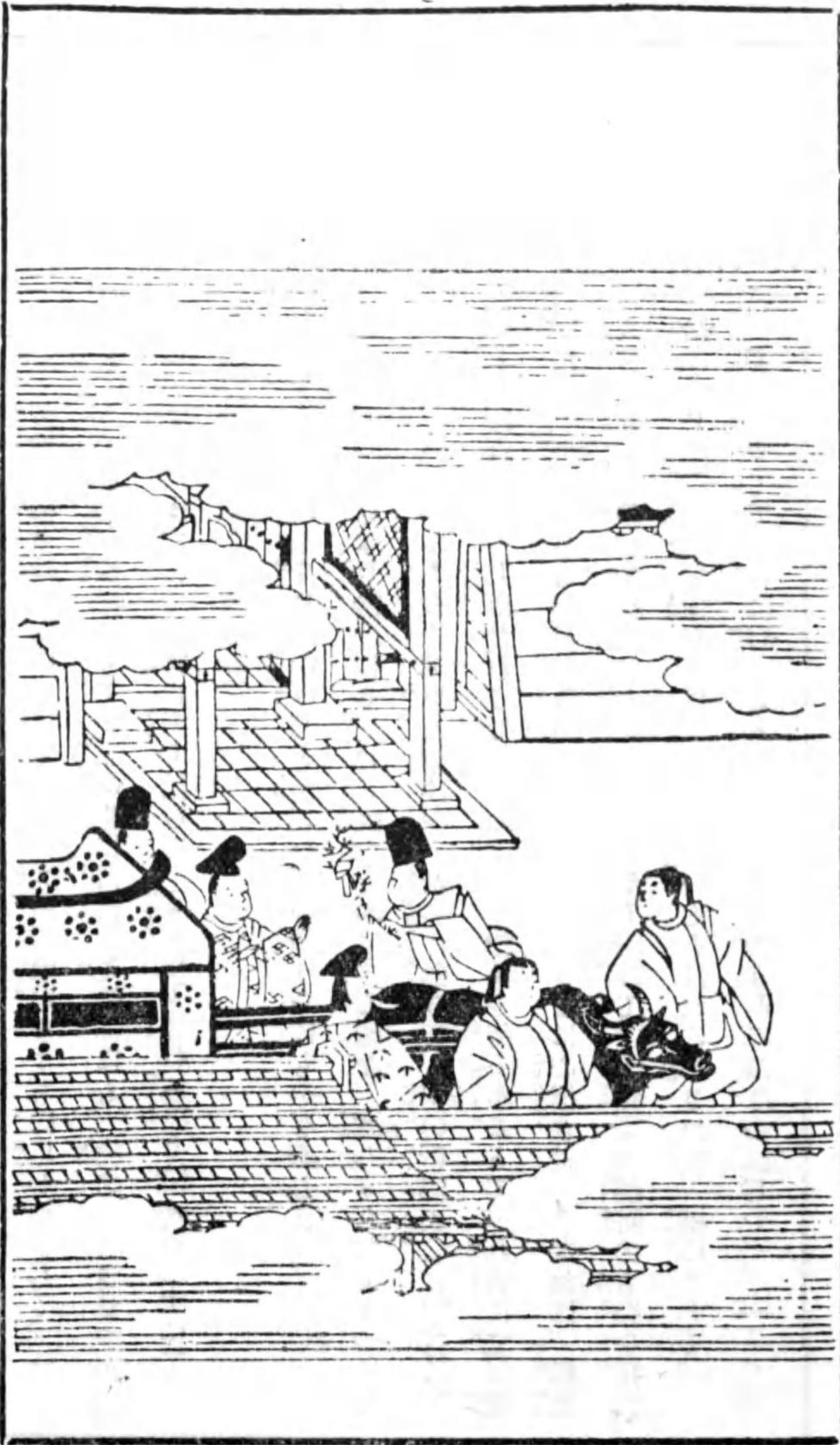
(一) 飽かぬ別のなき様に  
さばき給へ

(二) 御返事  
(三) 齊宮の別當

(四) 國つ神がさばくなら  
ば、第一に君が從來のよ  
い加減の許を匡さる可  
らず  
(五) 齊宮御息所の暇乞  
内の有様  
(六) 見つともなき  
(七) 齊宮は年よりませて  
居るならんと氣にかゝる  
(八) 通幣ならぬ故障のあ  
る女を思ひ込むのが癖で  
(九) 源の心、見れば見ら  
れた齊宮の幼年時代を見  
ざりしは残念なり  
(一〇) 齊宮に又逢ふ事も  
あらん  
(一一) 御息所が付添ひ行  
く故、伊勢下の行装の見  
事なる也

八洲もる國つ御神もこよろあらば飽かぬわかれの中をことわれ  
思ひ給ふるに、飽かぬ心地し侍るかな。  
とあり。いと騒がしきほどなれど、御かへりあり。宮の御をば、女別當して書か  
せ給へり。

齊國つ神そらにことわる中ならばなほざりてことをまづやたどさむ  
大將は、御有様ゆかしうて、内裏にも参らまほしうおほせど、打棄てられて見送  
らむも、人わろき心地し給へば、思しとまりて、徒然にながめ居給へり。宮の御  
返りのおとなしくしきを、ほゑみて見居給へり。御年の程よりはをかしようもお  
はずべきかなと、たどならず。かやうに例に違へる煩はしさに、かならず心かよ  
る御癖にて、いとよう見奉りつべかりし、いはけなき御程を、見ずなりぬるこ  
そ妬けれ、世の中さだめなければ、對面する様もありなむかしなど思す。心憎く  
よしある御けはひなれば、物見車多かる日なり。申の時に、内裏に参り給ふ。御





(一) 御息所の感懐、我父の我々皇后にもせん積なりしに引かへて

(二) 故皇太子

(三) 昔を思ひ出さじと我懐すれども悲自ら堪へず

(四) 立派につくり立てたる様、すごい程である

(五) 訣別の儀式、帝欄を齋宮の額に挿し、京を顧る事勿れと勅ある也

(六) 飾りたる車  
(七) 飾の爲に車の外に垂れたる女の衣の

(八) 心強く今は我を振捨て行きても後には後悔して悲むこと無からんや、御息所に贈れる也

息所、御輿に乗り給へるにつけても、父大臣の限なきすぢに思し心ざして、いつき奉り給ひし有様かはりて、末の世に内裏を見給ふにも、物のみ盡きせずあはれに思さる。十六にて故宮に参り給ひて、二十にて後れ奉り給ふ。三十にてぞ、今日また九重を見給ひける。

御息所そのかみを今日はかけじと忍ぶれど心のうちにもものぞ悲しき

齋宮は十四にぞなり給ひける。いと美しくおはする様を、麗しうしたてまつり給へるぞ、いとゆよしきまで見え給ふを、帝御心動きて、別の御櫛奉り給ふほど、いとあはれにて、しほたれさせ給ひぬ。出で給ふを待ち奉るとて、八省に立て續けたる、出車どもの袖口色あひも、目慣れぬさまに心憎きけしきなれば、殿上人どもも、私のわかれ惜む多かり。暗う出で給ひて、二條より洞院の大路を折れ給ふほど、二條院の前なれば、大將の君いとあはれに思されて、櫛にさして、源ふりすてて今日は行くとも鈴鹿川八十瀬のなみに袖はぬれじや

(一) 相坂の園

(二) 伊勢に下りて後我が悲むや愁まざるやを遙に心配して呉れる者は誰もあるまじ  
(三) さつと書きたるが却て見事なるを見て  
(四) 源の心

(五) 御息所の行方

(六) 兼の方  
(七) 御息所の伊勢に去りたるも畢竟は我が仕向りの懸かりし故にて人のせいで無しと自ら咎めて  
(八) 旅中にある御息所は

桐壺帝重病

九 朱雀に預みて

(一〇) 我存命中に甦らず

と聞え給へれど、いと聞う物さわがしき程なれば、またの日、關のあなたよりぞ、御返ある。

御息所、鈴鹿川八十瀬の浪にぬれくす伊勢まで誰か思ひおこせむ

ことをぞぎて書き給へるしも、御手いとよしくしくなまめきたるに、哀なる氣を少し添へ給へらましかば、と思す。霧いたう降りて、たどならぬ朝ほらけに、うち眺めてひとりごちおはす。

源行くかたをながめもやらむこの秋は逢坂山をきりなへだてそ

西の對にも渡り給はで、人やりならず、物淋しけに眺め暮し給ふ。まして旅の空は、いかに御心づくしなる事多かりけむ。

院の御惱、神無月になりては、いと重くおはします。世の中に惜み聞えぬ人なし。内裏にも思し歎きて行幸あり。弱き御心地にも、春宮の御事を、かへすく聞えさせ給ひて、次には大將の御事、侍りつる世にかはらず、大小の事を隔てず、



- (一) 源を
- (二) 源は若輩なれど國政を取らせても差支なしと思ふ
- (三) 源は
- (四) 桐壺巻の源を相人に見せし感參
- (五) 此の趣意を通して
- (六) 斯く一端を述ぶるも氣がひける
- (七) 決して違背すまじき由を
- (八) 朱雀の
- (九) 桐壺が
- (一〇) 逢うて却て愁を増したる事
- (一一) 帝と一緒に見舞はんと
- (一二) 冷泉今年五歳
- (一三) 桐壺聽しさが一杯
- (一四) 冷泉が
- (一五) 藤壺
- (一六) 桐壺が
- (一七) 桐壺が冷泉に

何事も御後見とおほせ。齡の程よりは、世をまつりごたむにも、をさく、憚あるまじうなむ見給ふる。必す世中保つべき相ある人なり。然るによりて、煩はしさに、皇子にもなさず、たゞ人にて、おほやけの御後見をせさせむと、思ひ給へしなり。その心違へさせ給ふな」と、哀なる御遺言ども多かりけれど、女のまねぶべき事にしあらねば、この片端だにかたはらいたし。帝も、いと悲しと思して、更に違へ聞えさすまじき由を、返すく聞えさせ給ふ。御容貌もいと清らに、ねびまさらせ給へるを、嬉しくたのもしく見奉らせ給ふ。限あれば急ぎ還らせ給ふにも、なかくなる事多くなむ。春宮も、一度にと思召しけれど、物さわがしきにより、日をかへて渡らせ給へり。御年の程よりは、おとなび美しき御様にて、戀しと思ひ聞えさせ給ひけるつもりに、何心もなく嬉しと思して、見奉り給ふ御氣色いとあはれなり。中宮は涙に沈み給へるを、見奉らせ給ふにも、さまざま御心亂れて思しめさる。よろづの事を聞え知らせ給へど、いと物はかなき御程な





- (一) 桐壺が
- (二) 源も座に在りしなる
- (三) 冷泉の後見

(四) 桐壺が

- (四) 桐壺帝崩御
- (五) 弘徽殿
- (六) 藤原なる内に
- (七) 格別の憐れなく
- (八) 桐壺は隠居せられしといふ名のみで、政務は在位中と同様なりしに
- (九) 崩御になりて見れば朱雀は若年也、嚴酷なる後見役の右大臣の儘にされては堪らぬと
- (一〇) 藤原源氏
- (一一) 供養し
- (一二) 喪服に、源の儘

れば、うしろめたく悲しう見奉らせ給ふ。大將にも、おほやけに仕う奉り給ふべき御心づかひ、この宮の御後見し給ふべきことを、返すく宣はす。夜更けてぞ歸らせ給ふ。残る人なくつかう奉りてのよしる様、行幸に劣る差別なし。飽かぬ程にて還らせ給ふを、いみじう思召す。

大后も参り給はむとするを、中宮のかく添ひおはするに御心置かれて、思しやすらふ程に、おどろくしき様にもおはしまさで、崩れさせ給ひぬ。足を空に思ひ感ふ人多かり。御位を去らせ給ふといふばかりにこそあれ、世の政をしづめさせ給へることも、わが御世の同じ事にておはしまいつるを、帝はいと若うおはします、祖父大臣、いと急にさがなうおはして、その御まよになりなむ世を、如何ならむと、上達部殿上人皆思ひなけく。中宮大將殿などは、まして勝れて物も思しわかれず、後々の御わざなど、孝じ仕う奉り給ふさまも、そこらの御子たちの御中にすぐれ給へるを、理ながらいとあはれに、世の人も見奉る。藤の御衣に

(一) 凶事に逢ふ

- (二) 源が
- (三) 出家の望

- (四) 世間總體の年の暮の心細さに加へて別離の悲哀は、藤壺の心は晴間なし
- (五) 藤壺が
- (六) 是から世は弘徽殿の心の儘なれば、つらき事のあるときは覺悟の前なれど其よりも
- (七) 桐壺在世の時の事の思ひ出さるるに
- (八) 此儘に居る事もなから
- (九) 藤壺
- (一〇) 藤壺の同胞
- (一一) 八出入なくなりて
- (一二) 源が藤壺を訪ひて
- (一三) 五葉の松

やつれ給へるにつけても、限なく清らに心苦しげなり。去年今年とうちつとき、かかることを見給ふに、世もいとあぢきなう思はるれば、かよる序にも、まづ思立たるよことはあれど、また様々の御羈絆おほかり。御四十九日までは、女御御息所たち、みな院に集ひ給へりつるを、過ぎぬれば、散りぬにまかせて給ふ。十月の廿日なれば、大方の世の中とぢむる空の氣色につけても、まして晴るよ世なき中宮の御心のうちなり。大后の御心をも知り給へれば、心に任せ給へらむ世のはしたなく住み憂からむを思すよりも、馴れ聞え給へる年頃の御有様を思ひ出で聞え給はぬ時の間なきに、斯くてもおはしますまじう、皆外々へと出で給ふ程悲しき事かぎりなし。宮は、三條の宮に渡り給ふ。御迎に、兵部卿の宮参り給へり。雪うち散り風烈しうて、院の内やうく人目かれゆきてしめやかなるに、大將殿ごなたに参り給ひて、ふるき御物語きこえ給ふ。御前の五葉の雪にしをれて、下葉枯れたるを見給ひて、



- (一) 桐壺を松に比し、妃たちを下葉に比したり
- (二) つまらぬ歌なれども

(三) 桐壺帝の面影

- (四) 思ふ通りを詠みたるが、餘り幼稚な歌なり
- (五) 訪ふ人の段々少くなり行く哉
- (六) 藤壺三條宮に移る儀式、別に格式を落したるならねど、氣のせいにか哀にて
- (七) 三條の舊邸
- (八) 藤壺院に在る、朝顔院に在る
- (九) 藤壺の任官式
- (十) 藤壺の任官式、朱世時代になりて、桐壺の門前市をなしたり
- (十一) 今、源の勢衰へたりと見て、訪ひ来る人稀なる人もなき故、宿直者の夜具包の特運はる事

兵部卿陰ひろみたのみし松や枯れにけむ下葉散りゆく年のくれかな  
 何ばかりのことにもあらぬに、折から物あはれにて、大將の御袖いたう濡れぬ。池の隙なう氷れるに、

源さえわたる池の鏡のさやけきに見なれしかけを見ぬぞかなしき  
 と思すまよに、あまり若々しうぞあるや。王命婦

年暮れて岩井の水もこぼりとぞ見しひとかけのあせもゆくかな

其ついでにいと多かれど、さのみ書き續くべきことかは。渡らせ給ふ儀式かはら

ねど、思ひなしにあはれにて、ふるき宮は、かへりて旅の心地し給ふにも、御里

住絶えたる年月のほど、思しめぐらさるべし。

年かへりぬれど、世の中今めかしきことなく静なり。まして大將殿は、物憂くて

籠り居給へり。除目の頃など、院の御時をば更にもいはず、年頃劣る差別なくて、

御門のわたり、所なく立ち込みたりし馬車うすらぎて、さぶらひに宿直物の袋を

- (一) 是からは斯様に失意の生活をすのかと
- (二) 源が寂寞の感に堪へぬ
- (三) 藤月夜
- (四) 前侍が桐壺の寝に眠して引續き出たると
- (五) 重く待遇され
- (六) 女御更衣等たちの
- (七) 弘徽殿
- (八) 藤月夜、かんの君は内侍のかみの君の略
- (九) 藤月夜、夜來來、奥まりたる登花殿に引込み居たり、弘徽殿に移りて花やかたり
- (十) 思はず源と逢ひし事
- (十一) 源と藤と手紙を
- (十二) 前侍にならぬ中と
- (十三) 源の心、現はれたらば大變
- (十四) 斯うなるぞ却て
- (十五) 桐壺在世中は其に懼りもせしが、今は弘徽殿が憚る所なく
- (十六) 容貌なく
- (十七) 色々無念なりし事の復讐をせんと思へど
- (十八) 源方に取て
- (十九) 斯る日には逢ひつねぬので、人交をする氣ならず

さをさ見えす。親しき家司どもばかり、殊に急ぐ事無けにてあるを見給ふにも、今よりは斯くこそはと思ひやられて、ものすさまじくなむ。御匣笥殿は、二月に尙侍になり給ひぬ。院の御思ひに、やがて尼になり給へる代なりけり。やむごとなくもてなして、人柄もいと善くおはすれば、あまた参り集り給ふ中にも、すぐれて時めき給ふ。后は、里がちにおはしまいて、参り給ふ時の御局には梅壺をしたらば、弘徽殿にはかんの君住み給ふ。登花殿の埋れたりつるに、晴れなくしうなりて、女房なども數知らず集り参りて、今めかしう花やぎ給へど、御心のうちは、思の外なりし事どもを忘れ難う思ひ歎き給ふ。いと忍びて通はし給ふことはなほ同じさまなるべし。物の聞えもあらば如何ならむと思しなから、例の御癖なれば、今しも御志まさるべかめり。院のおはしましたる世こそ憚り給ひつれ、后は御心いちはやくて、かたぐし思しつめたる事どもを報せむと思すべかめり、事に觸れてはしたなき事のみ出で來れば、斯かるべき事とは思しよかど、見知り



- (一) 皇上を朱雀が望みしを振切つて源に嫁せし
- (二) 根に持ちて
- (三) 左大臣右大臣の交情
- (四) 中よからず
- (五) 左大臣の心の健なりしに
- (六) 右大臣が
- (七) 左大臣が
- (八) 左大臣邸へ
- (九) 侍女等にも却て細に目をかけ
- (一〇) 左大臣が源を大切にする事
- (一一) 桐壺の寵甚しき爲源の暇無けなりしも今は暇になり
- (一二) 方々の女の許
- (一三) 興味なくなりて
- (一四) 紫上
- (一五) 紫と父兵部卿等と自由に音信す

給はぬ世のうさに、立ちまふべくも思されず。左大臣も、すさまじき心地し給ひて、ことに内裏にも参り給はず。故姫君を、引き除きてこの大將の君に聞えつげ給ひし御心を、后は思しおきて、よろしうも思ひ聞え給はず。大臣の御中も、もとよりそばくしうおはするに、故院の御世には、わが儘におはせしを、時移りて、したり顔におはするを、味氣なしと思したるも、理なり。大將は、ありしに變らず渡り通ひ給ひて、侍ひし人々をも、なか／＼に細に思しおきて、若君をかしづき思ひ聞え給へる事限りなければ、哀にありがたき御心と、いとどいたづき聞え給ふ事ども同じ様なり。限なき御覺の、あまり物騒しきまで、暇なけに見え給ひしを、通ひ給ひし所々も、かた／＼に絶え給ふ事どもあり、輕々しき御忍歩行も、あいなう思しなりて、殊にし給はねば、いとどのどやかに、今しもあらまほしき御有様なり。西の對の姫君の御幸を、世の人もめで聞ゆ。少納言なども、人知れず、故尼上の御祈のしるしと見奉る。父親王も思ふさまに聞えかはし給ふ。

- (一) 兵部卿の今の妻の娘共は、親が氣をもめども餘り仕合よくもなければ
- (二) 繼子の幸運なるをいふ
- (三) 加茂齋院桐壺第三女
- (四) 齋院は大抵内親王也
- (五) 内親王
- (六) 朝顔を思ひ切らざりしに
- (七) 朝顔が異つた方面に向いて仕舞つたから
- (八) 朝顔の侍女
- (九) 朝顔への
- (一〇) 勢力の無くなりし事
- (一一) 源が
- (一二) つまらぬ事
- (一三) 彼女へも此女へもと心配せり
- (一四) 源氏竊に朧月に夜逢ふ
- (一五) 源を大切に思へど
- (一六) 源毛なる
- (一七) 弘徽殿右大臣の爲に任せて政事も自分の儘にならず
- (一八) 覆面倒ではあれどはれぬ事は無し
- (一九) 五大明王を祈る式

嫡腹のかぎりなくと思すは、はか／＼しうもえあらぬにねたげな事多くて、繼母の北の方は、安からずおほすべし。昔物語に、殊更に作り出でたるやうなる御有様なり。齋院は御服にて、下り居給ひにしかば、朝顔の姫君は、かはりに居給ひにき。加茂のいつきには、孫王の居給ふ例多くあらざりけれど、さるべき女御子やおはせざりけむ。大將の君、年月経れど、なほ御心離れ給はざりつるを、斯う筋異になり給ひぬれば、口惜しとおほす。中將に音づれ給ふ事も同じことにて、御文などは絶えざるべし。昔に變る御有様などをば、殊に何とも思したらず、かやうのはかなし事どもを、紛るゝ事なきまよに、此方後方と思し惱めり。帝は、院の御遺言違へず、哀におほしたれど、若うおはしますうちにも、御心なよびたる方に過ぎて、強き所おはしまさぬなるべし。母后祖父大臣とり／＼にし給ふことは、え背き給はず、世の政御心になはぬやうなり。煩はしさのみ増れど、かんの君は、人知れぬ御心し通へば、わりなくとも覺束なくはあらず。



(一) 朱雀が  
 (二) 源に逢ふ  
 (三) 初めて逢ひし時に似せり  
 (四) 圓月夜の侍女  
 (五) 源を  
 (六) 見つかりはせぬかと  
 (七) 源の美貌は  
 (八) 女が疎に思ふ苦なし  
 (九) 曾目には乏しいが

(一〇) 直ぐ側で近衛の武官が宿直の名乗をする  
 (一一) 源の外にも此邊に隠れ居る近衛武官のありと見ゆるを、意地悪き傍人が其隠所を其と交代すべき人に教へて此處へよこしたるならんと  
 (一二) 午前四時頃  
 (一三) 寅一つとは夜明けも明くと報じたる也、明くは何方の意にとりても恐しと也  
 (一四) 心細げにて

壇の御修法のはじめにて、猶みおはします隙を伺ひて、例の夢のやうに聞え給ふ。かの昔おほえたる細殿の局に、中納言の君まぎらはして入れ奉りたり。人目も繁きころなれば、常よりも端近なるを、そら恐ろしう覺ゆ。朝夕に見奉る人だに、飽かぬ御様なれば、まして珍らしき程にのみある御對面の、いかでかは疎ならむ。女の御様も、實にぞめでたき御盛なる。おもりかなる方はいかどあらむ、をかしうなまめき若びたる心地して、見まほしき御けはひなり。程なく明けゆくにやと覺ゆるに、唯ごとにしも、「宿直申し侍ふ」とこわづくるなり。又この邊にくろへたる近衛司ぞあるべき。腹穢かたへの教へおこするぞかしと、大將は聞き給ふ。をかしきものから煩はし。此處彼處尋ねありきて、武官「寅ひとつ」と申すなり。女君、心からかたぐ袖をぬらすかなあくとをしふる聲につけてもと宣ふ様、はかなだちていとをかし。

(一) 胸の痛むも時なく君を慰むて歎きつゝ一生を送るが我が運命か  
 (二) 驚して人に知れぬ様にするのが却て水際立つてよく分る其風體で  
 (三) 朱雀の女御  
 (四) 葵上の同胞とは別人  
 (五) 頭中將が批難するに違なし  
 (六) 源氏宿に藤壺に逢ふ  
 (七) 取てもつけぬ程つれなき藤壺の體深さを  
 (八) 我が勝手につけては  
 (九) 藤壺が  
 (一〇) 藤壺の力になる人も無ければ  
 (一一) 源が今でも戀をやめぬのにと胸をついて  
 (一二) 桐壺が源との中を知らずに仕舞ひしを思ひてさへ空怖しきに  
 (一三) 密通の噂があらば

源歎きつゝ我世はかくて過せとやむねのあくべき時ぞともなくしづ心なくて出で給ひぬ。夜深き曉月夜のえもいはず霧り渡れるに、いと痛うやつれてふるまひなし給へるしも、似る物なき御有様にて、承香殿の御兄の頭中將、藤壺より出でて、月の少しく隈ある立部のもとに立てりけるを、知らで過ぎ給ひけむこそいとほしけれ。もどき聞ゆるやうもありなむかし。かやうの事につけても、もてはなれつれなき人の御心を、且はめでたしと思ひ聞え給ふものから、わが心のひく方にては、なほつらう心憂しと覺え給ふ折多かり。内裏に参り給はむことは、初々しく所狭く思しなりて、春宮を見奉り給はぬを、覺束なく覺え給ふ。又たのもしき人も物し給はねば、たゞこの大將の君をぞ、よろづに頼み聞え給へるに、なほこの憎き御心の止まぬに、ともすれば御胸をつぶし給ひつゝ、聊も氣色を御覺じ知らずなりにしを思ふだにいと怖ろしきに、今更に又さる事の聞えありて、我身はさるものにて、春宮の御爲に必ず善からぬ事出



- (一) 源に
- (二) 精々注意して
- (三) 源の注意深き思入を侍女等も知らざりし故
- (四) 藤壺の感
- (五) 眞似もならぬ様なやいことを
- (六) 手強くはね付けて
- (七) 前後の分別もなく正氣も無くなりたれば
- (八) 藤壺の方に留りたる也
- (九) 出入りする
- (一〇) 氣が氣でなく
- (一一) 壁にて四方を圍みたる、室物置寢室などに充つ
- (一二) 人に悟られぬ藤壺の衣箱を隠し置く侍女等も甚だ氣遣なり
- (一三) のぼせて
- (一四) 中宮大夫
- (一五) 源の爰に隠れ居る事を藤壺は知らず

で來なむと思すに、いと怖ろしければ、御祈をさへせさせ給ひて、このこと思ひ止ませ奉らむと、思し至らぬことなく遁れ給ふを、如何なる折にかありけむ、あさましうて近づき参り給へり。心深くたばかり給ひけむことを、知る人なかりければ、夢のやうにぞありける。まねぶべきやうもなく聞え續け給へど、宮いとこよなくもて離れ聞え給ひて、はてくは御胸を痛う惱み給へば、近う侍ひつる命婦、辨などぞ、あさましう見奉り扱ふ。男は、憂しつらしと思ひ聞え給ふこと限なきに、來しかた行くさき、かきくらす心地して、現心も失せにければ、明けはてにけれど、出で給はずなりぬ。御惱に驚きて、人々近う参りて繁うまがへば、我にもあらで、塗籠に押し入れられておはす。御衣ども隠し持たる人の心地なども、いとむつかし。宮は、物をいとわびしと思しけるに、御氣あがりて、なほ惱ましうせさせ給ふ。兵部卿宮、宮の大夫など参りて、僧召せなどさわぐを、大將いとわびしう聞きおはす。辛うじて暮れゆく程にぞ、おこたり給へる。かく籠り居

- (一) 藤壺に氣をもませじとてわざと知らせず
- (二) 藤壺が
- (三) 氣分が善きならんとて兵部卿宮も歸り
- (四) 藤壺はいつも人を御に多く待ちせねば
- (五) 源を歸さん
- (六) 源が居れば藤壺が今夜も上氣すべし
- (七) 源が
- (八) 藤壺を屏風の隙より覗く
- (九) 壽命が盡きしならん
- (一〇) 藤壺が手を着けず
- (一一) 京上

給ひつらむとは思しもかけず、人々も又御心惑はさじとて、斯くなむとも申さぬなるべし。晝の御座に膝行出でておはします。よろしう思さるよなめりとて、宮もまかんで給ひなどして、御前人すくなになりぬ。例も氣近くならさせ給ふ人少ければ、此處彼處の物の後などにぞ侍ふ。命婦の君などは、「如何にたばかりていだし奉らむ。今宵さへ御氣あがらせ給はむ、いとほしう」などうちさよめきあつかふ。君は、塗籠の戸の細目に開きたるを、やをら押し開けて、御屏風の間に傳ひ入り給ひぬ。珍らしく嬉しきにも、涙はおちて見奉り給ふ。藤壺「なほいと苦しうこそあれ。世や盡きぬらむ」とて、外の方を見出し給へる傍目、言ひ知らずなまめかしう見ゆ。御菓物をだにとて参りするたり。箱の蓋などにも、懐しき様にあれど、見入れ給はず。世の中をいたう思し惱める氣色にて、のどかに眺め入り給へる、いみじうらうたけなり。簪、頭つき、御髪のかよりたるさま、限なきにははしさなど、たどかの對の姫君に違ふ所なし。年頃少し思ひ忘れ給へりつる



(一) 驚く程業に似て居る  
 (二) 晴らし所、藤壺の懸しき時は紫を見さへすればよしと思ひて  
 (三) 業と別なる人とは思はれぬに  
 (四) 思ひ込んだ故でもあらうか  
 (五) 藤壺の方が  
 (六) 夢中になりて  
 (七) 藤壺が厭はしく思ひて  
 (八) 此方に向いてても居ればよいに  
 (九) 源が  
 (一〇) 股ぎあきて  
 (一一) 藤壺が  
 (一二) 面の捕たる衣の裾と共に思寄らず藤壺の髪が捕られてありしかば  
 (一三) 逃れぬ懸縁と觀念して  
 (一四) 平生嗜める心亂れて正氣でなく  
 (一五) 藤壺が眞底けしからぬ所行と思ひて  
 (一六) 源が  
 (一七) 藤壺の心動く事もあるべし

を、あさましきまで覺え給へるかな、と見給ふまよに、少し物思のはるけ所ある心地し給ふ。氣高う恥かしけなる様なども、更に他人と思ひわき難きを、なほ限なく、昔より思ひしめ聞えてし心の思ひなしにや、様ことにいみじうねびまさり給ひにけるかなと、類なく覺え給ふに、御心惑ひして、やをら、御帳の中にかゝづらひ入りて、御衣の襖を引きならし給ふ。けはひしるく、さと匂ひたるに、あさましうむくつけう思されて、やがてひれふし給へり。見だに向き給へかしと、心やましうつらくて、引寄せ給へるに、御衣をすべし置きて、膝行退き給ふに、心にもあらず、御髪の取り添へられたりければ、いと心憂く、宿世の程思し知られて、いみじとおほしたり。男も、こよら世をもてしづめ給ふ御心皆亂れて、うつし様にもあらず、よろづの事を泣くく恨み聞え給へど、まことに心づきなしとおほして、御答も聞え給はず。たゞ、藤壺「心地のいと惱しきを、斯からぬ折もあらば聞えてむ」と宣へど、盡せぬ御心の程を言ひ續け給ふ。流石にいみじと聞き給





(一) 源に肌を許す事は  
 (二) 源に心はありながら  
 (三) 無理に手籠にするのも勿體なく  
 (四) 源が心に恥かしき  
 (五) 此の如く時々物語して憂き晴しが出来るならば、其に満足して其以上の欲望は持たず  
 (六) 抽断をさせる  
 (七) 一寸した事に付ても斯る心深き人同士の間では  
 (八) 況や斯迄深き情婦の纏綿したる事故哀類なし  
 (九) 王命婦と辨とて源に退去を迫り  
 (一〇) 半死の狀態  
 (一一) 死にたけれど、死なば又後世迄の罪になる恐あればそれもならず  
 (一二) 藤壺が  
 (一三) 何時迄も逢ひ難くば、我は生替り死替り常に嘆き著すべし  
 (一四) 我に盡きぬ恨を殘すも、畢竟君の心柄と知り給へ

ふしもまじるらむ。あらざりし事にはあらねど、改めていと口惜しう思さるれば、  
 (一) 懐かしきものから、いとよう宣ひ通れて、今宵も明けゆく。せめて随ひ聞えざら  
 (二) むもかたじけなく、心恥かしき御前はひなれば、又たど斯ばかりにても、時々いみ  
 (三) じき憂をだに晴け侍りぬべくば、何のおほけなき心も侍らじ」など、ためめ聞え給  
 (四) ふべし。斜なる事だに、かやうなる中らひは哀なることも添ふなるを、まして類  
 (五) なけなり。明けはつれば、二人していみじき事どもを聞え、宮は、半は亡きやうな  
 (六) る御氣色の心苦しければ、世中にありと聞し召されむもいと恥かしければ、や  
 (七) がて亡せ侍りなむも、又この世ならぬ罪となり侍りぬべきこと」など聞え給ふも  
 (八) むくつけきまでおほし入れり。  
 (九) 源「逢ふことのかたきを今日にかぎらずば今幾世をか歎きつよ經む  
 (一〇) 御羈絆にもこそ」と聞え給へば、さすがにうち歎き給ひて、  
 (一一) 藤壺ながき世のうらみを人にのこしてもかつは心をあたとしらなむ  
 (一二)

(一) 取附處なき  
 (二) 藤壺の思はくも  
 (三) 源氏藤壺の煩悶、藤壺冷泉を訪ふ  
 (四) 源の心、何を面目に再び藤壺に逢はれんや  
 (五) 藤壺に氣の毒と感ぜしめんとて  
 (六) 源が  
 (七) 人の手前恥かしく  
 (八) 世に經れば憂きことを増れ三吉野の岩のかけ道踏みならしてん  
 (九) 紫上  
 (一〇) 我を力にし居るを  
 (一一) 藤壺も上氣の後の容態よからず  
 (一二) 藤壺に  
 (一三) 藤壺に  
 (一四) 藤壺に  
 (一五) 源と氣まづくなるは東宮の爲氣の體なり  
 (一六) 源が  
 (一七) 短兵急に出家でもするかと  
 (一八) 藤壺の心  
 (一九) 只さへうるさき世  
 (二〇) 引敷殿が怪しからぬ事に言ひ居る我が中宮の位を辭せん

はかなく言ひなさせ給へる様の、いふよしなき心地すれど、人の思さむ所も我が  
 御爲も苦しければ、我にもあらで出で給ひぬ。  
 (一) いづこを面にかは又も見え奉らむ。いとほしと思し知るばかりと思して、御文  
 (二) も聞え給はず。うち絶えて内裏春宮にも参り給はず、籠りおはして、起き臥し  
 (三) みじかりける人の御心かなと、人わろく戀しう悲しきに、心魂も失せにけるに  
 (四) や、惱ましうさへおほさる。物心細く、何ぞや、世に經れば憂きこそまされと思し  
 (五) たつには、この女君のいとらうたけにて、哀にうち頼み聞え給へるを、振り捨て  
 (六) む事いと難し。宮も、その名残例にもおはします。斯うことさらめきて籠り居  
 (七) 音づれ給はぬを、命婦などはいとほしがり聞ゆ。宮も、春宮の御爲を思すには、  
 (八) 御心置き給はむこといとほしく、世を味氣なきものに思ひなり給はば、直道に思  
 (九) し立つこともやと、さすがに苦しう思さるべし。かゝる事絶えずば、いとどしき  
 (一〇) 世に、うき名さへ漏出でなむ、大后のあるまじきことに宜ふなる位をも去りなむ  
 (一一)



- (一) 藤壺の心、桐壺の寵隆なりし時を思へば世松の轉變歴然たり
- (二) 漢高祖の妾、本妻の后后に妬まれ、手足を斷たれ眼を抜かれ耳をふすべられ口きけぬ藥を吞まされ則中に置かる
- (三) 嫌て置置き難く
- (四) 出家と考付く
- (五) 常はつまらぬ事にも氣を付け世話をやくに
- (六) 普通の音間は相變らずなれど
- (七) 此間の事以來源は非常にくよして居ると
- (八) 冷泉
- (九) 藤壺を見て
- (一〇) 藤壺が
- (一一) 出家も出来にくもうなれど
- (一二) 内裏に出入するにも極り難く
- (一三) 冷泉
- (一四) 久しく御目にからぬ中に我の姿が嫌な風に變りたらば

と、やうくおほしなる。院の思し宣はせし様の、斜ならざりしを思し出づるにも、よろづの事ありしにもあらず變り行く世にこそあめれ、戚夫人の見けむ目の様にこそあらずとも、必ず人笑へなる事はありぬべき身にこそあめれなど、疎ましく過し難う思さるれば、背きなむことを思し取るに、春宮見奉らで面變せむこと哀に思さるれば、忍びやかにて参り給へり、大將の君は、さらぬ事だに思し寄らぬ事なく、仕う奉り給ふを、御心地惱ましきに託けて、御送にも参り給はず。おほかたの御訪は同じやうなれど、むけに思し屈しにけると、心知るどちはいとほしがり聞ゆ。宮はいみじう美しうおとなび給ひて、珍しう嬉しと思して、睦れきこえ給ふを、悲しと見奉り給ふにも、思し立つすぢはいと難けなれど、内裏わたりを見給ふにつけても、世の有様あはれにはかなく、移り變ることのみ多かり。大將の御心もいと煩はしくて、出で入り給ふにもはしたなく、事に觸れて苦しければ、宮の御爲にも危く、忌々しうよろづにつけて思しみだれて、藤壺御

- (一) 老侍女の名なるべし
- (二) 式部上りも
- (三) 帝后などの御寢室の次の間にて終夜加持する僧
- (四) 是より彌、間があるべし
- (五) 木氣になりて
- (六) 冷泉が
- (七) 側を向きたる
- (八) 九で源の顔を取つて附けた様なり
- (九) 冷泉を女にして
- (一〇) 斯く迄に源に似て居るのがつちと
- (一一) 似て居るのが玉の瑕の様に思はれるのも
- (一二) 人の口のうるさく
- (一三) 藤壺
- (一四) 藤壺の心の餘りの氣強さを、自分で分る様に思ひ知らせてやらんと

覺ぜで久しからむほどに、容貌の異様にてうたてけに變りて侍らば、いかど思さるべき」と聞え給へば、御顔をうちまもり給ひて、春宮式部が様にや。いかでか然はなり給はむ」と、笑みて宣ふ。いふかひなく哀にて、藤壺それは、老いて侍れば醜きぞ。然はあらで、髪はそれよりも短くて、黒き衣などを著て、夜居の僧のやうになり侍らむとすれば、見奉らむ事も、いと久しかるべきぞ」とて泣き給へば、まめだちて、春宮久しうおはせねば戀しきものを」とて、涙のおつれば、恥かしく思してさすがに背き給へる、御髪はゆらくと清らにて、まみの懐しけに匂ひ給へる様、おとなび給ふまよに、たゞかの御顔を脱ぎすべ給へり。御齒の少し朽ちて、口の内黒みて、笑み給へる薫美くしきは、女にて見奉らまほしう清らなり。いと斯うしも覺え給へるこそ心憂けれと、玉の瑕に思さるよも、世の煩はしさの、空恐ろしう覺え給ふなりけり。

大將の君は、宮をいと戀しう思ひ聞え給へど、あさましき御心の程を、時々思



- (一) 行きたさを保へて
- (二) 紫野
- (三) 桐遊更衣
- (四) 雲林院の噂中
- (五) 我が家
- (六) 宗教上の議論
- (七) 一天の戸をあしあけ方の月見れば憂き人しもぞ戀しかりける
- (八) 佛に奉る水
- (九) 花血を
- (一〇) 源の心、佛道の誓
- (一一) 我は彼等と違ひて
- (一二) もて餘す
- (一三) 觀無量壽經の句、佛を念ずる者をば漏さず救ひ取るの義
- (一四) 方我は出家が出来ぬ
- (一五) 紫上
- (一六) 珍らしく紫と隣居る日數置りて氣絶なれば

ひ知る様にも見せ奉らむと、念じつゝ過し給ふに、人わろくつれなく思はるれば、秋の野も見給ひがてら、雲林院にまうで給へり。故母御息所の御兄の律師の籠り給へる坊にて、法文など讀み、行ひせむと思して、一三日おはするに、哀なる事多かり。紅葉のやうく色づきわたり、秋の野のいとなまめきたるなど見給ひつゝ、故郷も忘れぬべくおほさる。法師ばらの才あるかぎり召し出でて、論議せさせて聞し召させ給ふ。所がらにいと世の中の常なさを思しあかしても、なほ「うき人しもぞ」と思し出でらるゝおしあけ方の月影に、法師ばらの闍伽奉るとて、からくと鳴しつゝ、菊の花、濃き薄き紅葉など、折り散したるもはかなけれど、この方の營は、この世も徒然ならず、後の世はた頼もしけなり。さも味氣なき身を持って惱むかななど、思し續け給ふ。律師のいと尊き聲にて、「念佛衆生攝取不捨」とうち述べて行ひ給へるがいと羨ましければ、なぞやと思しなるに、まづ姫君の心にかよりて、思ひ出でられ給ふぞ、いとわろき御心なるや。例

- (一) 出家が出来るかと思へ来ては見たれど
- (二) 宗教上の事につきて聞きかけたる
- (三) 鬘りを見合せ居るが其間の桐櫛子は如何に
- (四) あつき白紙
- (五) 四方の風は源に對する人々の戸感をいよなる
- (六) 紫上
- (七) 色變る浪子の如く羽振廻り成り行く君を力にする我は、そよとの風にも心を亂す
- (八) 直ぐ近慮の事故
- (九) 朝顔にも香信したり
- (一〇) 朝顔の侍女
- (一一) 朝顔故に斯る所まで迷出でたるを、御察し下さるまじ

ならぬ日數も、覺束なくのみ思はるれば、御文ばかりぞ繁う聞え給ふめる。源行き離れぬべしやと、試み侍る道なれど、徒然も慰めがたう、心ほそき増りてなむ。聞きさしたる事ありて、やすらひ侍るほどをいかに。など、陸奥紙に、うちとけ書き給へるさへぞめでたき。源あさぢふの露のやどりに君をおきて四方のあらしぞしづ心なきなど細やかなるに、女君もうち泣き給ひぬ、御かへし白き色紙に、紫風吹けばまづぞみだるゝ色かはる浅茅がつゆにかよるさよがにとのみあり。源御手はいとをかしうのみなり増るものかな」と獨言ちて、美しとほほゑみ給ふ。常に書きかはし給へば、我が御手にいとよく似て、今少しなまめかしく、女しき所書き添へ給へり。何事につけても、怪しうはあらず生ふし立てたりかしと思す。吹きかふ風も近き程にて、齋院にも聞え給ひけり。中將の君に源かく旅の空になむ物思ひにあくがれにけるを、思し知るにもあらじかし。



(一) 神に仕ふる君に對して懼るべきなれども、我は君と管領れ交したる昔を忘るゝ能はず  
 (二) いにしへのしづの宇だまき編返し昔を今になすよしもがな  
 (三) 昔を今になせばなざる物の標にくだらぬ物思に沈む  
 (四) 櫛にて透れる白布  
 (五) 齋院は物靜なる處故して長文なり  
 (六) 通一週の遊換に非ず  
 (七) 朝顔の返事は  
 (八) 昔の秋を思出すとは何を言はるぞ、我と君と昔何の關係ありしや  
 (九) 此世にて關係ありしとは思ひ寄らず  
 (一〇) 櫻  
 (一一) 草書  
 (一二) 容貌も年と共に美しくなりしならん、前に朝顔の事あるによりて朝顔といへり  
 (一三) 神に對して  
 (一四) 六條御息所を野宮に訪ひし事  
 (一五) 變に同様の物で六條も朝顔も神の懼の爲に情を遠げぬ事よと

など恨み給ひて、御前には、  
 面かけまくはかしこけれどもそのかみの秋おもほゆる木綿襦かな  
 昔を今にと思ひ給ふるもかひなく、とり返されむものやうに。  
 と馴々しげに、唐の淺緑の紙に、櫛に木綿つけなど、神々しうしなして參らせ給ふ。御かへり中將、  
 中將紛るゝことなくて、來しかたの事を思ひ給へ出づる徒然のまよには、思ひやり聞えさする事多く侍れど、かひなくのみなむ。  
 と少し心とどめて多かり。御前は、木綿のかたはしに  
 齊院、そのかみやいかどはありしゆふたすき心にかけて忍ぶらむゆる  
 近き世に」とぞある。御手細やかにはあらねど、らうくしう草などをかしうなりにけり。まして、朝顔もねびまさり給へらむかしと、思ひ遣るもたどならずおそろしや。あはれこの頃ぞかしと、野宮の哀なりしことと思し出でて、怪しう

(一) 朝顔が手に入るべき時分は逆て置きて  
 (二) 朝顔齋院  
 (三) 爲さるに忍びずして返事する様なり  
 (四) 隔なき  
 (五) 天台六十卷、玄義、文句、止觀、尺蠲、疏記、弘法、各十卷  
 (六) 源が  
 (七) 源の留留を我々の動行の功徳なりとして  
 (八) 紫上  
 (九) 布加物  
 (一〇) 「しはぶかひ人」の語にて、暖嗽する人、即ち老人の意なるべしといふ  
 (一一) 喪中なれば黒き襦袢を施したる也  
 (一二) よくも見えぬ

様の物と、神うらめしう思さるゝ御癖の見苦しきぞかし。わりなう思さば然もありぬべかりし年頃は、長閑に過し給ひて、今は悔しう思さるべかめめるも、あやしき御心なりや。院も、斯くなべてならぬ御心ばへを見知り聞え給へれば、たまさかなる御返などは、えしももてはなれ聞え給ふまじかめり。少しあいなき事なりかし。六十卷といふ文讀みたまひ、おほつかなき所々、解かせなどしておはしますを、山寺にはいみじき光行ひ出し奉れりと、佛の御面目ありと、あやしの法師ばらまで喜びあへり。しめやかにて、世中を思し續くるに、歸らむ事も物憂かりぬべけれど、人ひとりの御事思しやるが羈絆なれば、久しうもえおはしますで、寺にも御誦經嚴しうせさせ給ふ。あるべきかぎり上下の僧ども、その邊の山賤まで物賜び、尊き事のかぎりを盡して出で給ふ。見奉り送るとて、此面彼面に、あやしきしばふるひ人ども集り居て、涙をおとしつゝ見奉る。黒き御車の内にて、藤の御袂にやつれ給へれば、殊に見え給はねど、ほのかなる御有様を、世



④ 源氏紅葉を藤壺に贈る、藤壺宿下り  
 (一) 葉上  
 (二) 源の感じ  
 (三) 源の勢無くなりたる世の中是より如何なりゆくならんと  
 (四) 藤壺を思ふ源の心  
 (五) 前の葉の返歌  
 (六) 露が心ありて特別に潤く染めたる勢を無にし難く  
 (七) 藤壺への無地汰も餘り人目につく程なれば、何氣なく藤壺へ贈る  
 (八) 藤壺が東宮の見舞に  
 (九) 藤壺と東宮との間柄の様子  
 (一〇) 御前の勤行  
 (一一) 露を果さずして歸るも不意なるべしと  
 (一二) 見る人も無く散りぬる里山の紅葉は夜の露なりけり  
 (一三) よき機会に  
 (一四) 藤壺の  
 (一五) 小く結付たる手紙

になく思ひ聞ゆべかめり。  
 女君は、日頃の程に、ねびまさり給へる心地して、いといたうしつまり給ひて、  
 世の中いかどあらむと思へる氣色の、心苦しう哀に覺え給へば、あいなき心の  
 様々亂るゝや著からむ。「色かはる」とありしもうたう覺えて、常より殊に語ら  
 ひ聞え給ふ。山土産にもたせ給へりし紅葉、御前のに御覽じくらぶれば、殊に染  
 めましける露の心も見過しがたう、覺束なさま人わろきまで覺え給へば、たど大  
 方にて宮に參らせ給ふ。命婦の許に、  
 源入らせ給ひにけるを、珍らしき事と承るに、宮の間の事、覺束なくなり侍  
 りにければ、しづ心なく思ひ給へながら、行も勤めむと思ひ立ち侍りし日數  
 を、心ならずやとてなむ、日頃になり侍りにける。紅葉は、一人見侍るに錦  
 くらう思ひ給ふればなむ。折よくて御覽せさせ給へ。  
 などあり。實にいみじき枝どもなれば、御目とまるに、例の聊なるものありけ





(一) 藤壺の面色かはりて  
 (二) 藤壺の心  
 (三) 源の心、通常の用向  
 冷泉に關する事等に就て  
 け源を力にして生眞面目  
 なる返事をよこすのに  
 (四) 源文と名ると用心深  
 く何時も逃避る事よと  
 (五) 源が藤壺を  
 (六) 餘り無沙汰しては  
 (七) 藤壺が東宮より  
 (八) 朱雀の御前へ  
 (九) 臘月夜と源との交情  
 の今も絶えざるを朱雀が  
 聞及居り、其様子を見て  
 取る事もあれど  
 (一〇) 今始りたる事でも  
 なし、前からの事なれば

り 人々見奉るに、御顔の色もうつろひて、なほ斯かる心の絶え給はぬこそいと  
 疎ましけ あたり、思ひやり深うものし給ふ人の、ゆくりなく、かやうなる事  
 をりく交ぜ給ふを、人もあやしと見るらむかしと、心づきなう思されて、瓶に  
 さよせて、廂の柱のもとに押遣らせ給ひつ。大方の事ども 宮の御事に觸れたる  
 事などは、うち頼めるさまに、すぐよかなる御返ばかり聞えたまへるを (四) 人も心  
 かしこく、盡せずもと恨めしう見給へど、何事も後見聞えならひ給ひにたれば、人  
 あやしと見咎めもこそすれと思して、まかんで給ふべき日参り給へり。まづ内裏  
 の御方に参り給へれば、のどやかにおはします程にて、昔今の御物語聞え給ふ。  
 御容貌も 院にいとよう似奉り給ひて、今少しなまめかしき氣添ひて、なつかし  
 う和やかにぞおはします かたみにあはれと見奉り給ふ。かんの君の御事も、なほ  
 絶えぬさまに聞しめし、氣色御覽する折もあれど、何かは、今始めたる事ならば  
 (一〇) こそあらめ、あり初めにける事なれば、さも心交さむに 似けなかるまじき人の

(一) 朱雀が御に

(二) 源氏

(三) 冷泉の世話を頼む由  
 桐壺の御遺言ありしかば  
 (四) 我が外には冷泉の御  
 後見仕る人もなき御子故  
 (五) 冷泉の縁につれて藤  
 壺をも構はずには置けず  
 (六) 冷泉を朱雀の養子に  
 せよと桐壺遺言なりし故  
 (七) 大事には思へど  
 (八) 特別の待遇とは何  
 も出来ぬ  
 (九) 冷泉が  
 (一〇) 冷泉の賢なるは朱  
 雀自身の面目なり

間なりかしとぞ思しなして、咎めさせ給はざりける。よろづの御物語、文の道の  
 覺束なく思し召さるゝ事どもなど、問はせ給ひて、又すきくしき歌がたりなど  
 も 互に聞えかはさせ給ふ御序に、かの齋宮の下り給ひし日の事、容貌のをかし  
 うおはせしなど、語らせ給ふに、我もうち解けて、野宮のあはれなりし曙も、皆  
 聞え出で給ひてけり。二十日の月やうくさし出でて、をかしき程なるに、本遊  
 などもせまほしき程かなと宣はす。源中宮の今宵まかで給ふなる、訪らひにも  
 のし侍らむ。院の宣はせおこと侍りしかば、又後見仕う奉る人も侍らざめ  
 に、春宮の御ゆかり、いとほしう思ひ給へられ侍りて」と奏し給ふ。源春宮をば  
 今の皇子になしてなど、宣はせ置きしかば、取り分きて心ざしものすれど、殊に  
 (六) さし分きたる様にも、何事をかはとこそ。年のほどよりも、御手などのわざと  
 (七) かしこうこそ物し給ひけれ。何事にもはかなくしからぬ自らの面起しになむ」と  
 (八) 宣はすれば、源大方し給ふわざなど、いと敏く大人びたるさまに物し給へど、ま



- (一) 堅ひて居らず
- (二) 弘敷殿
- (三) 朱雀の女御
- (四) 源の退出により先皇が人拂する也
- (五) 史記都陽傳に「白虹貫日太子畏之」蓋太子丹刺殺をして秦王を刺さしめんと謀りし時白虹日を買けるを見て太子事の成らざるを怖れたる故事、源が朱雀に對して異心ある機にあてこすりて言へる也
- (六) 氣障なりと
- (七) 頭辨の如き人々
- (八) 角目だちて源を誘誘する事ある故
- (九) 源は平氣を疑ひ居る
- (一〇) 藤壺に
- (一一) 桐壺在世中は
- (一二) 禁中なれども
- (一三) 同じ禁中に在りながら、朱雀の御方は遙に隔れる雲上の如く思はるるは、間に如何なる響の隔をなすならん
- (一四) 源に

だいたかたなりになむ」と、その御有様など奏し給ひて、まかして給ふに、大宮の御兄の、藤大納言の子の頭の辨といふが、世にあひ花やかなる若人にて、思ふ事なきなるべし、妹の麗景殿の御方に行くに、大將の御先を忍びやかに追へば、しばし立ちとまりて、「白虹日を貫けり。太子懼ぢたり」と、いとゆるらかにうち誦じたるを、大將いとまばゆしと聞き給へど、咎むべきことかは、後の御氣色はいと怖ろしう煩はしげにのみ聞ゆるを、斯う親しき人々も、氣色だち言ふべかめる事どももあるに、煩はしう思されけれど、つれなうのみもてなし給へり。御前に侍ひて、今まで更かし侍りにける」と聞え給ふ。月の花やかなるに、昔かやうなる折は、御遊せさせ給ひて、今めかしうもてなさせ給ひしなど思し出づるに、同じ御垣の内ながら、變れること多く悲し。

藤壺ここのへに霧やへだつる雲の上の月をはるかにおもひやるかな  
と命婦して聞え傳へ給ふ。御けはひもほのかなれど、懐かしう聞ゆるに、つらさ

- (一) 月は昔の健の月なるに、昔と變りて我を隔てて逢はぬ君の心がつらし
- (二) 山櫻見に行く道を隔つれば賢も人の心なりけり
- (三) 藤壺
- (四) 冷泉に言聞かすれど
- (五) 冷泉は氣にも止めぬを、藤壺が氣にする
- (六) 冷泉は早寝なるを
- (七) 今夜は藤壺退出の時まで起き居むと
- (八) 藤壺の歸るを冷泉が
- (九) 藤壺が
- (一〇) 藤壺が
- (一一) 藤壺が
- (一二) 藤壺が
- (一三) 藤壺が
- (一四) 藤壺が
- (一五) 藤壺が
- (一六) 藤壺が
- (一七) 藤壺が
- (一八) 藤壺が
- (一九) 藤壺が
- (二〇) 藤壺が
- (二一) 藤壺が
- (二二) 藤壺が
- (二三) 藤壺が
- (二四) 藤壺が
- (二五) 藤壺が
- (二六) 藤壺が
- (二七) 藤壺が
- (二八) 藤壺が
- (二九) 藤壺が
- (三〇) 藤壺が
- (三一) 藤壺が
- (三二) 藤壺が
- (三三) 藤壺が
- (三四) 藤壺が
- (三五) 藤壺が
- (三六) 藤壺が
- (三七) 藤壺が
- (三八) 藤壺が
- (三九) 藤壺が
- (四〇) 藤壺が
- (四一) 藤壺が
- (四二) 藤壺が
- (四三) 藤壺が
- (四四) 藤壺が
- (四五) 藤壺が
- (四六) 藤壺が
- (四七) 藤壺が
- (四八) 藤壺が
- (四九) 藤壺が
- (五〇) 藤壺が
- (五一) 藤壺が
- (五二) 藤壺が
- (五三) 藤壺が
- (五四) 藤壺が
- (五五) 藤壺が
- (五六) 藤壺が
- (五七) 藤壺が
- (五八) 藤壺が
- (五九) 藤壺が
- (六〇) 藤壺が
- (六一) 藤壺が
- (六二) 藤壺が
- (六三) 藤壺が
- (六四) 藤壺が
- (六五) 藤壺が
- (六六) 藤壺が
- (六七) 藤壺が
- (六八) 藤壺が
- (六九) 藤壺が
- (七〇) 藤壺が
- (七一) 藤壺が
- (七二) 藤壺が
- (七三) 藤壺が
- (七四) 藤壺が
- (七五) 藤壺が
- (七六) 藤壺が
- (七七) 藤壺が
- (七八) 藤壺が
- (七九) 藤壺が
- (八〇) 藤壺が
- (八一) 藤壺が
- (八二) 藤壺が
- (八三) 藤壺が
- (八四) 藤壺が
- (八五) 藤壺が
- (八六) 藤壺が
- (八七) 藤壺が
- (八八) 藤壺が
- (八九) 藤壺が
- (九〇) 藤壺が
- (九一) 藤壺が
- (九二) 藤壺が
- (九三) 藤壺が
- (九四) 藤壺が
- (九五) 藤壺が
- (九六) 藤壺が
- (九七) 藤壺が
- (九八) 藤壺が
- (九九) 藤壺が
- (一〇〇) 藤壺が

も忘られて、まづ涙ぞおつる。

源月かけは見し世の秋にかはらぬを隔つる霧のつらくもあるかな  
霞も人のとか、昔も侍りける事にや」など聞え給ふ。宮は、春宮を飽かず思ひ聞え給ひて、よろづの事を聞えさせ給へど、深うもおほし入れたらぬを、いとうしろめたく思ひ聞え給ふ。例はいと疾く大殿籠るを、出で給ふまでは起きたらむ、と思すなるべし。恨めしげに思したれど、さすがにえ慕ひ聞え給はぬを、いとあはれと見奉り給ふ。

大將は、頭の辨の誦じつる事を思ふに、御心の鬼に、世の中煩はしう覺え給ひて、かんの君にも音づれ聞え給はで、久しうなりけり。初時雨いつしかと氣色だつに、如何おほしけむ、彼より、

木枯の吹くにつけつゝ待ちし間におほつかなきの頃も經にけり  
と聞え給へり。折もあはれに、あながちに忍び書き給ひつらむ御心ばへも憎から



(一)使に來たる者を暫時待たせて  
 (二)此手紙をよこしたるは誰ならん  
 (三)手紙をあけても御返事のなきに懲りて、此頃はがつかりして一向音信れざりしなり  
 (四)「歌ならぬ身のみ物憂くおもはえて待たるる迄にかりける哉」  
 (五)此頃の時雨を只秋故降る尋常の雨と思給よか  
 (六)君と我と同心なれば愁も忘るべし、詠めば長雨をかけたなり  
 (七)憂えず文言が細やかになれり  
 (八)朧月夜の如く源の來ぬを恨みて手紙を上こそ女他にも多けれども  
 (九)源が愛想よき返事はかりして  
 (一〇)藤壺  
 (一一)一週忌の法華  
 (一二)僧に法華經八卷を請せしむるを法華八講といふ、其用意  
 (一三)桐壺帝の祥月命日

ねば、御使とどめさせ給ひて、唐紙ども入れさせ給へる御厨子あけさせ給ひて、なべてならぬを選び出でつゝ、筆なども心ことに引きつくり給へる氣色艶なるを、御前なる人々、誰ばかりならむとつきじろふ。  
 源聞えさせてもかひなき物戀にこそ、無下にくづほれにけれ。身のみ物憂きはどにて、  
 (一)あひ見ずてしのぶるころの涙をもなべての秋のしぐれとや見る  
 (二)心の通ふとならば、如何にながめの空も物忘れし侍らむ。  
 (三)など、細やかになりけり。かやうに驚かし聞ゆる類多かめれど、情なからずうちかへりごち給ひて、御心には深う染まざるべし。  
 (四)中宮は院の御はての事にうちつゞき、御八講のいそぎを、様々に心づかひせさせ給ひけり。十一月の朔日ごろ、御國忌なるに、雪いたう降りたり。大將殿より宮に聞え給ふ。  
 (五)源わかれにしけふは來れども見し人にゆきあふ程をいつとたのまむ  
 (六)いづこにも、今日は物悲しう思さるよほどにて、御かへりあり。  
 (七)藤壺ながらふる程は憂けれどゆきめぐり今日はその世に逢ふ心地して  
 (八)殊につくろひてもあらぬ御書き様なれどあてに氣高きは、思ひなしなるべし。筋かはり今めかしうはあらねど、人には殊に書かせ給へり。今日はこの御事も思ひ消ちて、哀なる雪の雫に濡れく行ひ給ふ。  
 (九)十二月十餘日ばかり、中宮の御八講なり。いみじう尊し。日々に供養せさせ給ふ御經よりはじめ、玉の軸、羅の表紙、帙賣のかざりも、世になき様に整へさせ給へり。然らぬことの清らだに、尋常ならずおはしませば、まして理なり。佛の御かざり、花机のおほひなどまで、まことの極樂思ひやらる。初日は先帝の御料、次の日は母后の御ため、又の日は院の御料、五卷の日なれば、上達部なども、世のつよましさをえしも憚りたまはで、いとあまた参り給へり。今日の講師

(一)亡き桐壺帝  
 (二)行き一瞥  
 (三)我が今生き残るはつちけれど、今日再び桐壺在世の時立歸る心地するは甚し  
 (四)源の欲目  
 (五)一風異りたる當世風では無けれど  
 (六)藤壺に對する戀も捨て  
 (七)佛前の勳を  
 (八)藤壺法華八講を備し終の日に出家す  
 (九)八講は五日か七日の間を酒例とす  
 (一〇)經を包む物、竹にて編みたるすだれ  
 (一一)藤壺は何事にも嗜勝れたる人なれば  
 (一二)花を載する几  
 (一三)桐壺の父  
 (一四)桐壺帝の爲にする日は恰も第五卷を講ずる日に當れる也、新の行道とて特別の式あり  
 (一五)弘農殿方への遺慮

源わかれにしけふは來れども見し人にゆきあふ程をいつとたのまむ  
 (一)いづこにも、今日は物悲しう思さるよほどにて、御かへりあり。  
 (二)藤壺ながらふる程は憂けれどゆきめぐり今日はその世に逢ふ心地して  
 (三)殊につくろひてもあらぬ御書き様なれどあてに氣高きは、思ひなしなるべし。筋かはり今めかしうはあらねど、人には殊に書かせ給へり。今日はこの御事も思ひ消ちて、哀なる雪の雫に濡れく行ひ給ふ。  
 (四)十二月十餘日ばかり、中宮の御八講なり。いみじう尊し。日々に供養せさせ給ふ御經よりはじめ、玉の軸、羅の表紙、帙賣のかざりも、世になき様に整へさせ給へり。然らぬことの清らだに、尋常ならずおはしませば、まして理なり。佛の御かざり、花机のおほひなどまで、まことの極樂思ひやらる。初日は先帝の御料、次の日は母后の御ため、又の日は院の御料、五卷の日なれば、上達部なども、世のつよましさをえしも憚りたまはで、いとあまた参り給へり。今日の講師



- (一) 行道の歌「法華經を我侍し事は新機り葉摘み水汲み仕へてぞ得し」
- (二) 行道の列に入りて廻り歩く
- (三) 源の態度勝れたり
- (四) 同じ事を言ひて源を褒める機なれども
- (五) 最終日には
- (六) 終の願にして
- (七) 出家すべき程を
- (八) 兵部卿式の半頃座を立ちて震中に入り藤壺を諷めたる也
- (九) 藤壺堅く決心せる程を語りて
- (一〇) 式の
- (一一) 戒律
- (一二) 髪を短く切る
- (一三) 藤壺出家の事のみならず、大體の事柄も
- (一四) 藤壺の全盛時代

は、心殊にえらせ給へれば、薪(一)こる程よりうち初め、同じういふ言の葉も、いみじう尊し。御子たちも、様々の捧物さよけてめぐり給ふに、大將殿の御用意など、なほ似るものなし。常におなじ事のやうなれども、見奉るたびごとに、珍(二)しからむをば、如何はせむ。はての日は我が御事を結願にて、世を背き給ふよし(三)佛に申させ給ふに、皆人々驚き給ひぬ。兵部卿の宮、大將の御心も動きて、あさましと思す。親王は、なかばの程に立ちて入り給ひぬ。心強う思し立つさまを宣(四)ひて、はつる程に、山の座主召して、思む事受け給ふべきよし宣はす。御伯父の横川の僧都近う参り給ひて、御髪おろし給ふ程に、宮の内ゆすりて、忌々しう泣き満ちたり。何となき老い衰へたる人だに、今はと世を背くほどは、怪しうあはれなるわざを、まして、かねて御氣色にも出し給はざりつる事なれば、親王もいみじう泣き給ふ。参り給へる人々も、大方の事のさまも、哀に尊ければ、皆袖濡らしてぞ歸り給ひける。故院の御子達は、昔の御有様を思し出づるに、いとど哀(五)



賢木



- (一) 八講に列席したる儘
- (二) 源がなせ其程悲しむ
- (三) 藤壺の
- (四) 源が
- (五) 出家は年来の望なり
- (六) 愈出家したれば人々に盛がれて又覺悟がくづれそうな
- (七) 源が
- (八) 烈しく雪を吹きて
- (九) 奥床しき、黒方は調合したる香の名
- (一〇) 佛前に薫ちする香の煙が式場より通来る也
- (一一) 冷泉が「式部がやうにや」と問ひし時の事

に悲しう思されて、皆とぶらひ聞え給ふを、大將は立ちとまり給ひて、聞え出で給ふべき方もなく、昏れ惑ひて思さるれど、などか然しもと人見奉るべければ、親王など出で給ひぬる後にぞ、御前に参り給へる。やうく人静まりて、女房どもなど鼻うちかみつゝ、ところづくに群れ居たり。月は限なきに、雪の光りあひたる庭の有様も、昔の事思ひやらるゝに、いと堪へ難う思さるれど、いとよう思ししづめて、源「如何様に思立たせ給ひて、かう俄には」と聞え給ふ。藤壺「今始めて思ひ給ふことにもあらぬを、物騒しき様なりつれば、心亂れぬべく」なり、例の命婦して聞え給ふ。御簾の内のけはひ、そこら集ひ給ふ人の衣の音なひしめやかに振舞ひなして、うち身じろきつゝ、悲しけさの慰め難けに漏り聞ゆる氣色、理にいみじと聞き給ふ。風烈しう吹きふどきて、御簾の中のほひ、いと物深き黒方にしみて、名香の煙もほのかなり、大將の御にほひさへ薫りあひ、めでたう、極樂思ひやらるゝ夜の様なり。春宮の御使も参れり。宣ひし様思出で聞えさ

- (一) 藤壺がきつく成つて
- (二) 返事の文言を助言し
- (三) 居る丈の香残り
- (四) 君の御出家が誠に羨しく我も之に倣はんとすれども、子(冷泉)の事が迷の種になるを如何せん
- (五) 君が決心して出家せられたるは
- (六) 眞底から子の事も思ひ切つて世を離るゝことは覺束なし
- (七) 思ひなす御から又煩悩が起る
- (八) 此返事の一部分は、命婦などの氣をきかせて付加へたるならん
- (九) 源が
- (一〇) 二條院
- (一一) 源が紫の方へも行かず
- (一二) 源の心、藤壺を表面の冷泉の後盾となし置かんと桐壺の計畫をなすに
- (一三) 藤壺出家したれば
- (一四) 中宮の位を辭するならん

せ給ふにぞ、御心強さも堪へ難うて、御返も聞えさせやらせ給はねば、大將ぞ言くはへ聞えさせ給ひける。誰もく、あるかぎり心をさまらぬ程なれば、思す事どももうち出で給はず。  
 源「月のすむ雲井をかけてしたふともこの夜のやみになほや惑はむ」と思ひ給へらるゝこそ、かひなく、思立たせ給へる羨ましきは、限なう」とばかり聞え給ひて、人々近う侍へば、さまざま亂るゝ心の中をだに、え聞えあらはし給はず、いぶせし。  
 藤壺「大かたの憂きにつけては厭へどもいつかこの世を背きはつべきかつ濁りつゝ」など、かたへは御使の心しらひなるべし。哀のみ盡させねば、胸苦しうてまかで給ひぬ。殿にても、わが御方に一人うち臥し給ひて、御目もあはず、世の中厭はしう思さるゝにも、春宮の御事のみぞ心苦しき。母宮をだに、おほやけ様にと思しおきてしを、世のうきに堪へず、斯くなり給ひたれば、



(一) 自分迄出家せば冷泉が嘆便なからん  
 (二) 藤壺が尼の用ふる道具類を要するならん  
 (三) 藤壺のお相伴に尼になりたれば  
 (四) 源が慰に只舞ふ  
 (五) 此處に書き漏らせる  
 (六) 其歌を書き載せざるは物足らず  
 (七) 源が藤壺を訪問しても、藤壺今は尼なれば憐れも少く藤壺自身應答する事もあり  
 (八) 源の戀は昔に變らねども  
 (九) 尼になりたる今は  
 (一〇) 新年に源氏藤壺を訪ふ  
 (一一) 藤壺が昔を思ひ出て  
 (一二) うらさき年来の苦勞  
 (一三) 其體に置きて  
 (一四) 特別の佛勸を藤壺が  
 (一五) 新年ちしくもなく

の御位にもえおはせじ。われさへ見奉り捨ててばなど、思し明すこと限なし。今はかゝる方様の御調度どもをこそは、と思せば、年の内にと急がせ給ふ。命婦の君も御供になりければ、それも心深うとぶらひ給ふ。委しう言ひつとけむに事しき様なれば、漏してけるなめり。さるは、斯様の折こそ、をかしき歌など出で来るやうもあれ。さうぐしや、まゐり給ふも今はつとましき薄らぎて、御自ら聞え給ふ折もありけり。思ひしめてし事は、更に御心に離れねど、ましてあるまじき事なりかし。

年もかはりぬれば、内裏わたり花やかに、内宴踏歌など聞き給ふにも、物のみあはれにて、御行しめやかにし給ひつと、後の世の事をのみ思すに、頼もしく、むつかしかりし事は離れて思さる。常の御念誦堂をばさるものにて、特に建てられたる御堂の西の對の南にあたりて、少し離れたるに渡らせ給ひて、取りわきたる御行せさせ給ふ。大將まゐり給へり。改まるしるしもなく、宮の内のかに人

(一) そう思ひて見る故かも知れぬが  
 (二) 官司どもが聞いて居る  
 (三) 正月七日に白馬御會あり、廿一匹の白馬を内裏に引く式終りて後中殿宮へも遊覽す  
 (四) 昔と變らぬもので  
 (五) 藤壺には遊けて寄りつかず  
 (六) 朱雀の祖父右大臣の邸  
 (七) 當然の事なれど  
 (八) 藤壺が  
 (九) 他人の千人にも當るべき  
 (一〇) 源が  
 (一一) 源氏  
 (一二) 出家なれば也  
 (一三) 青黒色  
 (一四) 鼠色  
 (一五) 昔に聞く松が浦島今日ぞ見る宜も心ある  
 (一六) 長き海草を刈る聲  
 (一七) 見る我が心の姿  
 (一八) 佛壇が場所を取りたる

目まれにて、官司どもの親しきばかり、うち頸垂れて、見なしにやあらむ。屈し痛けに思へり。白馬ばかりぞ、猶ひさかへぬものにて、女房などの見ける。所秋う参り集ひ給ひし上達部なども、道を除ぎつとひき過ぎて、むかひの大殿に集ひ給ふを、斯かるべきことなれど、哀におほさるよに、千人にもかへつべき御様に、深く尋ね参り給へるを見るに、あいなく涙ぐまる。客人もいと物哀なる氣色に、うち見まはし給ひて、頼に物も宣はず。様かはれる御住居に、御簾の端御几帳も青鈍にて、ひまぐよりほの見えたる薄鈍。山梔子の袖口など、なかなかなまめかしう、奥ゆかしう思ひやられ給ふ。解け渡る池のうす氷。岸の柳の氣色ばかりは時を忘れぬなど、さまざまながめられ給ひて、源「うべも心ある」と、忍びやかにうち誦じ給へる。また無うなまめかし。

源ながめかるあまのすみかと思ふからにまづしほたるよ松が浦島  
 (一六)  
 ときこえ給へば、奥深うもあらず、皆佛に譲り聞え給へる御座所なれば、少し氣



(一)昔に變り果てたる我  
住居を尋ね給ふ御志悉し  
(二)藤壺方の人々の源を  
詳する詞  
(三)年と共に美しくなる  
(四)一人天下で  
(五)人情の分る答なしと  
(六)漫に氣の毒の感あり  
藤壺源氏左大臣等の  
失意  
(七)任官式  
(八)藤壺付の者は役に有  
付かざ  
(九)銘々の履歷から見て  
(一〇)たまはりの轉、年  
際とて、上皇皇后等に仕  
ふる人々に地方官の名義  
を付して其に相當せる俸  
祿を給する制ありし也  
(一一)昇位  
(一二)出家しても猶中宮  
にて、隨つて俸祿も元の  
如くなるべきに  
(一三)出家を口實にして  
待遇を變へたる

近き心地して、

藤壺ありし世のなごりだになき浦島に立ちよる浪のめづらしきかな  
(一)と宣ふもほの聞ゆれば、忍ぶれど、涙ほろ／＼とこほれ給ひぬ。世を思ひすまし  
たる尼君達の見らむもはしたなければ、言すくなにて出で給ひぬ。「さも類なく  
ねびまさり給ふかな。心もとなき所なく世に榮え、時に逢ひ給ひし時は、さるひ  
(二)とつものにて、何につけてか世を思し知らむと、推し量られ給ひしを、今はいと  
いたう思ししづめて、はかなき事につけても、物哀なる氣色さへ添はせ給へるは、  
あいなう心苦しうもあるかな」など、老いしらへる人々、うち泣きつよめで聞ゆ。  
(三)宮も思し出づる事多かり。  
司召の頃、この宮の人は賜はるべき官も得ず、大方の道理にても、宮の御たうば  
(四)りにても、必ずあるべき加階などをだにせずなどして、歎く類いと多かり。  
(五)ても、いつしかと御位を去り、御封などのとまるべきにもあらぬを、託けて變る

(一)藤壺は覺悟の前事  
なれど  
(二)便なきそらに

(三)冷泉が實は桐壺の子  
に非ざるを以て、神佛の  
加護も薄からんと危ぶむ  
なり  
(四)代りに我を罪して冷  
泉を免し給へと  
(五)源方の人々も藤壺付  
と同じく  
(六)源が  
(七)公私につけて昔に變  
りたる  
(八)朱雀の  
(九)長く國政を執らせよ  
と命ぜられし  
(一〇)辭職しては御遺言  
が無効になると  
(一一)強ひて繰返し辭退  
して  
(一二)弘徽殿方の一家  
(一三)重胤たる左大臣が

事多かり。皆かねて思し捨ててし世なれど、宮人どももよりどころなげに悲しと  
思へる氣色どもにつけてぞ、御心動く折々あれど、わが身を無きになしても春宮  
の御代を平らかにおはしまさば、とのみ思しつゝ、御行たゆみなく勤めさせ給  
ふ。人知れず危くゆゑしう思ひ聞え給ふ事しあれば、我にその罪をかるめて免し  
給へと、佛を念じ聞え給ふに、よろづを慰め給ふ。大將も、然見奉り給ひて、理  
とおほす。この殿の人どもも、又同じさまに辛きことのみあれば、世の中はした  
なく思されて籠りおはす。左大臣も、公私引きかへたる世の有様に、物憂く  
おほして、致仕の表奉り給ふを、帝は、故院の、やむごとなく重き御後見とお  
ほして、長き世のかためと聞え置き給ひし、御遺言を思し召すに、捨て難きもの  
に思ひ聞え給へるに、かひなき事、と度々用るさせ給はねど、せめてがへさひ申  
し給ひて、籠り居給ひぬ。今はいと一族のみ、かへす／＼榮え給ふ事限なし。  
(一)世のおもしと物し給へる大臣の、かく世を遁れ給へば、公も心ほそおほされ



- (一)しよげて
- (二)頭中將
- (三)右大臣の第四、頭中將の本妻
- (四)ほんの時々
- (五)頭中將が四の君をひどくあしちひたれば
- (六)右大臣が頭中將を
- (七)頭中將が昇任せざりしかども別に心にもかけず
- (八)源さへあの通り引籠り居る位のつまらぬ世の中なれば、我が不遇は當前とあきらめて
- (九)源へ
- (一〇)源と頭中將と
- (一一)源が
- (一二)佛事
- (一三)古人の詩の韻字をかくし置きて之をあてる遊
- (一四)憂さはらしして
- (一五)源に對する批難を

世の人(一)も心(二)ある限(三)は歎(四)きけり。御子(五)どもは、いづれともなく 人柄(六)めやすく世(七)に用(八)られて、心地(九)よけに物(一〇)し給(一一)ひしを、こよなうしづまりて、三位(一二)中將(一三)なども、世(一四)を思(一五)ひ沈(一六)める様(一七)こよなし。かの四(一八)の君(一九)をも、なほかれ(二〇)くに打ち通(二一)ひつよ、めざましうもてなされたれば、心(二二)解(二三)けたる御(二四)舞(二五)の中(二六)にも入(二七)れ給(二八)はず。思(二九)ひ知(三〇)れとにや、この度(三一)の司(三二)召(三三)にも漏(三四)れぬれど、いとしも思(三五)ひ入れ(三六)ず。大將(三七)殿(三八)斯(三九)うしづかにておはするに、世(四〇)ははかなきものと見(四一)えぬるを、まして理(四二)と思(四三)しなして、常(四四)に参(四五)り通(四六)ひ給(四七)ひつよ。學問(四八)をも遊(四九)をも諸(五〇)共(五一)にし給(五二)ふ。いにしへも物(五三)狂(五四)ほしきまで、挑(五五)み聞(五六)え給(五七)ひしを思(五八)し出(五九)でて、互(六〇)に今(六一)もはかなき事(六二)につけつよ、さすがに挑(六三)み給(六四)へり。春(六五)秋(六六)の御(六七)讀(六八)經(六九)をばさるものにて、臨(七〇)時(七一)にも、さまぐ尊(七二)き事(七三)どもをせさせ給(七四)ひなどして、又(七五)徒(七六)に暇(七七)ありけなる博士(七八)どもも召(七九)し集(八〇)めて、文(八一)作(八二)り韻(八三)ふたぎなどやうの、すさびわざどもをしなど心(八四)をやりて、宮(八五)仕(八六)をもをさくし給(八七)はず、御(八八)心(八九)に任(九〇)せてうら遊(九一)びておはするを、世(九二)の中(九三)には、煩(九四)はしき事(九五)どもやうく言(九六)ひ出(九七)づる人(九八)々(九九)ある

- (一) 願塞の遊、頭中將の負振舞
- (二) 詩集
- (三) 源へ
- (四) 面白きもの
- (五) 特に備したる譯にはあちねど
- (六) 入違ひに
- (七) 源が
- (八) 層上の人々の詞、源はどうして斯迄萬事完備せるならん
- (九) 斯く完全なるべき運命にて
- (一〇) 負けたる人よりする櫻籬
- (一一) 重箱に似たる食器
- (一二) 詩

夏(一)の雨(二)のどかに降(三)りて、徒(四)然(五)なる頃(六)、中將(七)、さるべき集(八)ども、數(九)多(一〇)もたせて参(一一)り給(一二)へり。殿(一三)にも、文(一四)殿(一五)あけさせ給(一六)ひて、まだ開(一七)かぬ御(一八)厨(一九)子(二〇)どもの、珍(二一)しき古(二二)集(二三)の故(二四)なからぬ、少(二五)し選(二六)り出(二七)でさせ給(二八)ひて、その道(二九)の人(三〇)々(三一)、わざとはあらねど數(三二)多(三三)召(三四)したり。殿(三五)上人(三六)も大學(三七)のもの、いと多(三八)う集(三九)ひて、左(四〇)右(四一)にこまどりに方(四二)分(四三)たせ給(四四)へり。賭(四五)物(四六)どもなど、いと二(四七)なくて挑(四八)みあへり。塞(四九)ぎもて行(五〇)くまよに、難(五一)き韻(五二)の文字(五三)どもいと多(五四)くて、おほえある博士(五五)どもなどの惑(五六)ふ所(五七)々(五八)を、時(五九)々(六〇)うち宣(六一)ふさま、いとこよなき御(六二)才(六三)の程(六四)なり。「いかで斯(六五)うしも足(六六)ひ給(六七)ひけむ。なほ然(六八)るべきにて、萬(六九)の事(七〇)人に勝(七一)れ給(七二)へるなりけり」と愛(七三)で聞(七四)ゆ。遂(七五)に右(七六)負(七七)けにけり。二(七八)日(七九)ばかりありて、中將(八〇)まけわざし給(八一)へり。事(八二)々(八三)しうはあらで、なまめきたる檜(八四)破(八五)子(八六)ども、賭(八七)物(八八)などさまざまにて、今日(八九)も例(九〇)の人(九一)々(九二)多(九三)く召(九四)して文(九五)など作(九六)らせ給(九七)ふ。階(九八)のもと(九九)の蕃(一〇〇)薇(一〇一)、氣(一〇二)色(一〇三)ばかり咲(一〇四)きて、春(一〇五)秋(一〇六)の花(一〇七)盛(一〇八)よりもしめやかにをかしう程(一〇九)なるに、うち解(一一〇)け遊(一一一)び



- (一) 宮中に出動する
- (二) 源が可愛がり
- (三) 本妻腹の二男
- (四) 今羽振よき右大臣の領なれば也
- (五) 才氣あり
- (六) 備馬樂の曲名
- (七) 源の
- (八) 高砂の句、「さゆりばは、さゆり花」の歌ならん、「ゆり花のさゆり花の今朝咲いたる初花にあはましものをさゆり花の」
- (九) 盃を源に奉る
- (一〇) 君の美貌は備馬樂に歌へる百合の初花にも劣らずと感心せり、「それがもがと」は高砂の句、其もがなの意
- (一一) 時に遇はずして我も衰へたり
- (一二) さよめきて
- (一三) 酒を多くに飲まぬを頭中將が見つけて

給ふ。中將の御子の、今年始めて殿上する。八つ九つばかりにて、聲いとおもしろく、笙の笛吹きなどするを、うつくしみ玩び給ふ。四の君腹の次郎なりけり。世の人の思へるよせ重くて、おほえ殊にかしづけり。心ばへもかどくしう、容貌もをかしくて、御遊の少し亂れゆく程に、「高砂」を出してうたふ、いとうつくし。大將の君、御衣ぬぎてかづけ給ふ。例よりはうちみだれ給へる御顔の句、似るものなく見ゆ。羅の直衣單衣を著給へるに、透き給へる肌つき、ましていみじう見ゆるを、年老いたる博士どもなど、遠く見奉りて涙、おとしつゝ居たり。「あはましものをさゆりばの」と歌ふとちめに、中將御土器まゐり給ふ。

(八) 中將それもがとけさひらけたる初花に劣らぬ君がにほひをぞ見る

(一〇) ほよゑみて取り給ふ。

源「時ならで今朝さく花は夏のあめにしをれにけらし句ふほどなく

(一二) 衰へにたる物を」とうちさうどきて、らうがはしく聞し召しなすを、咎め出でつ





(一)人々の詩歌も多かりし様なれど  
 (二)眞面目ならぬ  
 (三)たうるゝの義未詳  
 (四)書くはうるさければ  
 (五)源の身の上を  
 (六)源の心  
 (七)史記周公が伯禽を戒めたる詞、我文王子、武王弟、或王伯父、我於天下不賤矣、河自ら周公に比したる也  
 (八)源は成王に比すべき身原は伯父ならざして、實は父なれば也  
 (九)紫の父  
 (一〇)源方へ

つ強ひ聞え給ふ。多かめりし事どもも、かやうなる折のまほならぬ事数々に書きつくる。心なきわざとか、貫之が諫めたうるよ方にて、むつかしければとどめつ。皆この御事を譽めたる筋にのみ、倭のも唐のも作り續けたり。我御心地にもいたう思し驕りて、源「文王の子武王の弟」と、うち誦じ給へる。御名のりさへぞけにめでたき。成王の何とか宣はむとすらむ。そればかりや心もとなからむ。兵部卿宮も常に渡り給ひつゝ、御遊などもをかしうおはする宮なれば、今めかしき御あはひどもなり。

その頃かんの君まかど給へり。瘧病に久しう惱み給ひて、禁厭なども心やすくせむとてなりけり。修法など始めて、おこたり給ひぬれば、誰もく嬉しう思すに、例の珍らしき隙なるをと、聞えかはし給ひて、わりなき様にて夜なく、對面し給ふ。いと盛に、賑はしきはひし給へる人の、すこしうち惱みて、瘦々になり給へる程、いとをかしけなり。後の宮も一所におはする頃なれば、けはひいと

(一)無理な難路に尙難くなる源の跡なれば  
 (二)櫛子を悟る  
 (三)面倒故弘徽殿には知らせず  
 (四)右大臣も氣付かぬに  
 (五)源が逃端を失ひて  
 (六)朧月夜の  
 (七)源が  
 (八)事情を知れる侍女  
 (九)右大臣  
 (一〇)弘徽殿  
 (一一)源が  
 (一二)右大臣が朧月夜の方に  
 (一三)嚙驚くならんと察して居ながら  
 (一四)弘徽殿の弟  
 (一五)皇后宮亮  
 (一六)口早に輕卒なるを  
 (一七)左大臣の重々しきに比較して  
 (一八)作者の語、成程此場合藤中に入りて後言うて買ひたいものぢや

怖ろしけれど、かゝる事しも増る御癖なれば、いと忍びて度かさなり行けば、氣色見る人々もあるべかめれど、煩はしうて、宮には然なむとは啓せず。大臣はた思ひかけ給はぬに、雨俄におどろくしう降りて、神いたう鳴りさわぐ曉に、殿の君達、官司など立ちさわぎて、此方彼方の人目しけく、女房どもも懼ぢ惑ひて近う集ひまるるに、いとわりなく出で給はむ方なくて、明けはてぬ。御帳のめぐりにも、人々しけく竝居たれば、いと胸潰らはしく思さる。心知りの人二人ばかり、心を惑はす。神鳴りやみ、雨少し小歇みぬるほどに、大臣渡り給ひて、まづ宮の御方におはしけるを、村雨のまぎれにて、え知り給はぬに、輕らかにふとはひ入り給ひて、御簾引き上げ給ふまよに、右大臣「如何にぞ。いとうたてありつる夜の様、思ひやり聞えながら、参り來でなむ。中將、宮の亮など侍ひつや」など、宣ふけはひの舌疾にあはつけきを、大將は物のまぎれにも、左大臣の御有様ふと思しくらべられて、たとしへなくぞほゝゑまれ給ふ。實に入りはてても宜へ



- (一) 密夫を引入れある處へ父に來られて
- (二) 是なら止めさせたる所を延すのであつた
- (三) 薄雲に似たる色
- (四) 朧月夜の
- (五) 文字を書き散したる鳥獸
- (六) あれば
- (七) 變な物ぢや
- (八) 朧月夜も
- (九) 茫然として
- (一〇) 作者の評、斯る場合に、我子でも恥かしからんと察するが身分ある人の常なり
- (一一) 性急にして
- (一二) 熟慮もせず
- (一三) 無遠慮に
- (一四) 右大臣の態
- (一五) 氣がもめるけれど

かしの。かんの君いとわびしう思されて、やをら膝行り出で給ふに、面のいたう赤みたるを、なほ惱ましう思さるゝにやと見給ひて、右大臣など御氣色の例ならぬ。物怪などのむつかしきを、修法延べさすべかりけり」と宣ふに、薄二藍なる帯の御衣に纏はれて引き出でられたるを見つけ給ひて、怪しと思すに、又疊紙の手習などしたる、御几帳のもとに落ちたりけり。これは如何なる物どもぞと、御心驚かれて、右大臣「かれは誰がぞ。氣色異なるものの様かな。賜へ。それ取りて誰がぞと見侍らむ」と宣ふにぞ、うち見かへりて、我も見つけ給へる。紛はずべき方も無ければ、いかどは答へ聞え給はむ。我にもあらでおはするを、子ながらも恥かしと思すらむかしと、然ばかりの人は思し憚るべきぞかし。されどいと急に、のどめたる所おはせぬ大臣の、思しもまはさずなりて、疊紙を取り給ふまよに、几帳より見入れ給へるに、いと痛うなよびて、つよましからず添ひ臥したる男もあり。今ぞやをら顔引き隠して、とかく紛らはす。あさましう、目ざましう、心や

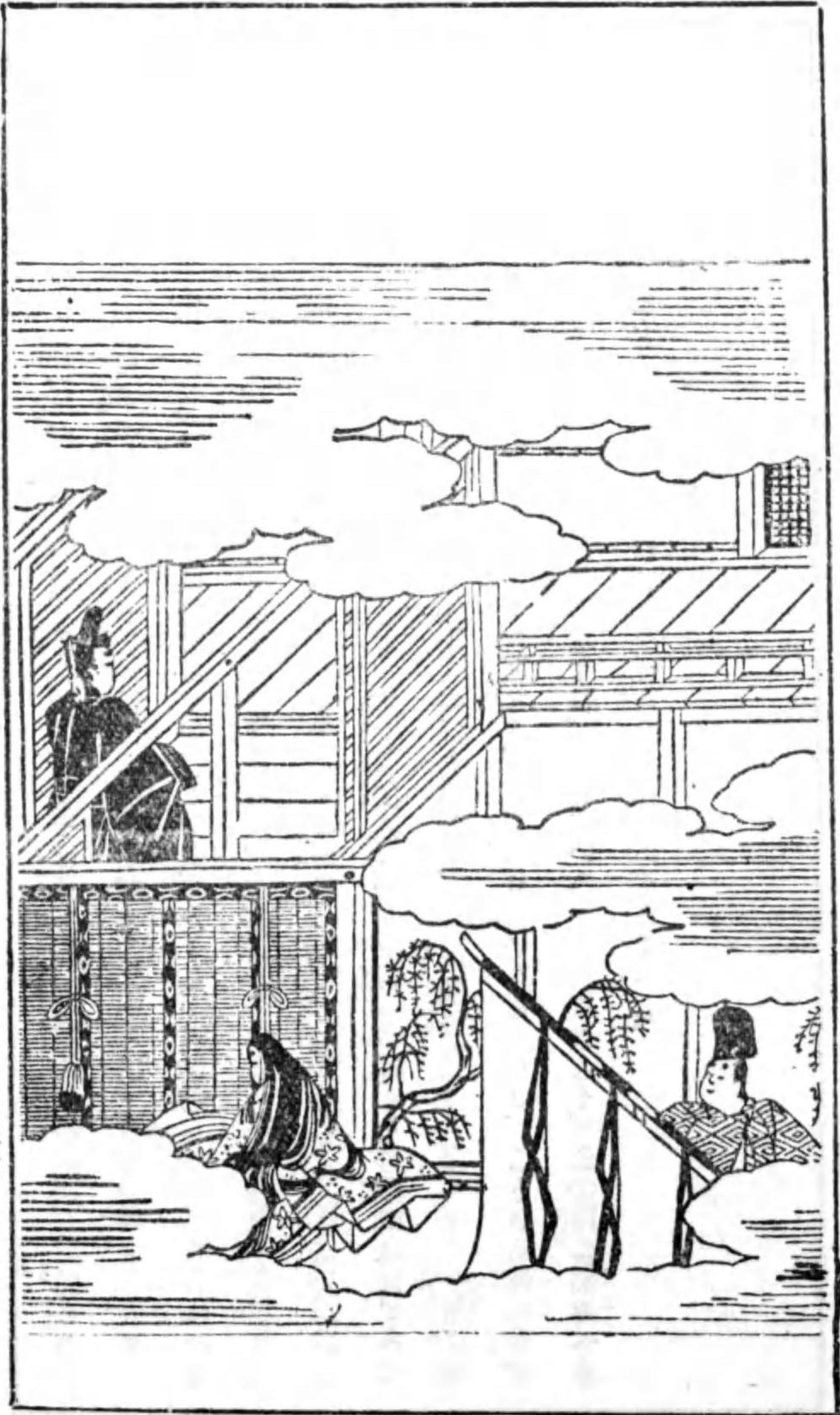
- (一) 源に面と向ひて見現す事は出来ぬ
- (二) 右大臣が
- (三) 前後を忘れて
- (四) 人に批難さるべき事
- (五) 右大臣は我儘にて物を我慢する事なき性質なる上
- (六) 何の猶豫あらん
- (七) プカ〜と
- (八) 斯へ
- (九) 前にも油断して、源が朧月夜に遇ふ事になりしかど
- (一〇) 源の顔に免じて其なら望にせんと言ひし時は、源が腫を愛せず不埒なる待遇をせしかば
- (一一) 約束事と謂めて
- (一二) 朱雀は源に遇じたる故を以て腫を棄てたと思ひて
- (一三) 腫を朱雀に
- (一四) れつきとしたる
- (一五) 腫を

ましけれど、直面にはいかでか顯し給はむ。目もくるゝ心地すれば、その疊紙をとりて、寢殿へ渡り給ひぬ。かんの君は、われかの心地して死ぬべく思さる。大將殿も、いとほしう、遂に用なき振舞の積りて、人のもどきを負はむとする事と思せど、女君の心苦しき御氣色を、とかく慰め聞え給へ。大臣は、思ひのまよに、籠めたる所おはせぬ本性に、いとど老の御ひがみさへ添ひにたれば、何事にかは滞り給はむ。ゆく〜と宮にも慰へ聞え給ふ。右大臣「斯う〜の事なむ侍るを、この疊紙は右大臣の御手なり。昔も心ゆるされてありそめにける事なれど、人柄によろづの罪を免して、然ても見むといひ侍りし折は、心もとどめず、めざましけにもてなされにしかば、安からず思ひ給へしかど、然るべきにこそはとて、穢れたりとも、思し棄つまじきをたのみにて、かく本意の如く奉りながら、猶その憚ありて、うけばりたる女御なども言はせ侍らぬをだに、飽かず口惜しう思ひ給ふるに、又斯かることさへ侍りければ、更にいと心憂くなむ思ひなり侍



(一)好色は男の常なれど  
 (二)朝顔はしきそぶりある  
 (三)人の噂を聞きては  
 (四)源が上も左様の事は爲ま  
 (五)世の爲にも源自身は爲に  
 (六)源が思ひ事なかりき  
 (七)源は當時の人物とし  
 (八)憎くてたまらぬ  
 (九)不快なる  
 (一〇)朱雀は帝なれども  
 (一一)左大臣  
 (一二)一人娘  
 (一三)兄なる春宮牛  
 (一四)取つて置きにして  
 (一五)源に取せ  
 (一六)無遠慮に源が横取  
 (一七)不埒とも思はず  
 (一八)源が御仕にならざり  
 (一九)源が可愛そら故  
 (二〇)憎き源への類當に

りぬる。男の例とはいひながら、大將もいとけしからぬ御心なりけり。齋院をも  
 なほ聞え犯しつゝ、忍びに御文通はしなどして、氣色あることなど、人の語り侍  
 りしをも、世の爲のみにもあらず、我が爲にもよかるまじき事なれば、よもさる  
 思ひやりなきわざし出でられじとなむ、時の有職と、天の下を靡し給へる様殊な  
 めれば、大將の御心を、疑ひ侍らざりつゝ、宣ふに、宮はいとどしき御心なれ  
 ば、いとものしき御氣色にて、弘徽殿、帝と聞ゆれど、昔より皆人思ひおとし聞えて、  
 致仕の大員も、又なくかしづくひとつむすめを、兄の坊にておはするには、奉ら  
 で、弟の源氏にて、幼きが、元服の添臥にとりわき、又この君をも宮仕にと志  
 して侍りに、をこがましかかりし有様なりしを、誰もくあやしと思したりし、  
 皆かの御方にこそ御心よせ侍るめりしを、その本意違ふ様にてこそは、かくても  
 侍り給ふめれど、いとほしさに、いかでさる方にて、人に劣らぬ様にもてなし  
 聞えむ、さばかりねたけなりし人の見る所もあり、などこそは思ひ侍りつれど、強





- (一) 藤は己が好む源に歸けるなりん
- (二) 源の仕方が朱雀方に不安の念を興ふるは
- (三) 源は冷泉崩れ故
- (四) 露骨に
- (五) 話さねばよかりし
- (六) 此位の手をしても大丈夫と藤が付上りての所
- (七) 私か藤を購買して無効ならは我其咎を受けん
- (八) 弘徽殿と藤と
- (九) 懼らず
- (一〇) 源が我を侮る也と
- (一一) 私微殿が
- (一二) 源を説くべき方便をめぐらすに

ひて我が心の入る方に、靡き給ふにこそは侍らめ。齋院の御事はまして然もあらむ、何事につけても、公の御方に後やすからず見ゆるは、春宮の御世心よせの異なる人なれば、理になむあめると、すぐくしう宣ひ續くるに、流石にいとほしう、など聞えつる事ぞと思さるれば、右大臣さばれ、しばし此事漏し侍らじ。内裏にも奏せさせ給ふな。かくのごと罪侍りとも、思し棄つまじきをたのみにて、あまえて侍るなるべし。内々に制し宣はむに、聞き侍らずば、その罪にはたどみづからあたり侍らむなど、聞えなほし給へど、殊に御氣色もなほらず、かく一所におはして隙もなきに、つよむ所なう、さて入り物せらるらむは、ことさら輕め弄せらるよにこそは、と思しなすに、いとどいみじう目ざましく、この序に然るべき事ども構へ出でむに、よき便なりと思しめぐらすべし。

花散里

源氏 源氏花散里を訪はんとして、途に昔馴染の女を尋ぬ。 麗景殿女御花散里姉妹の閑居。

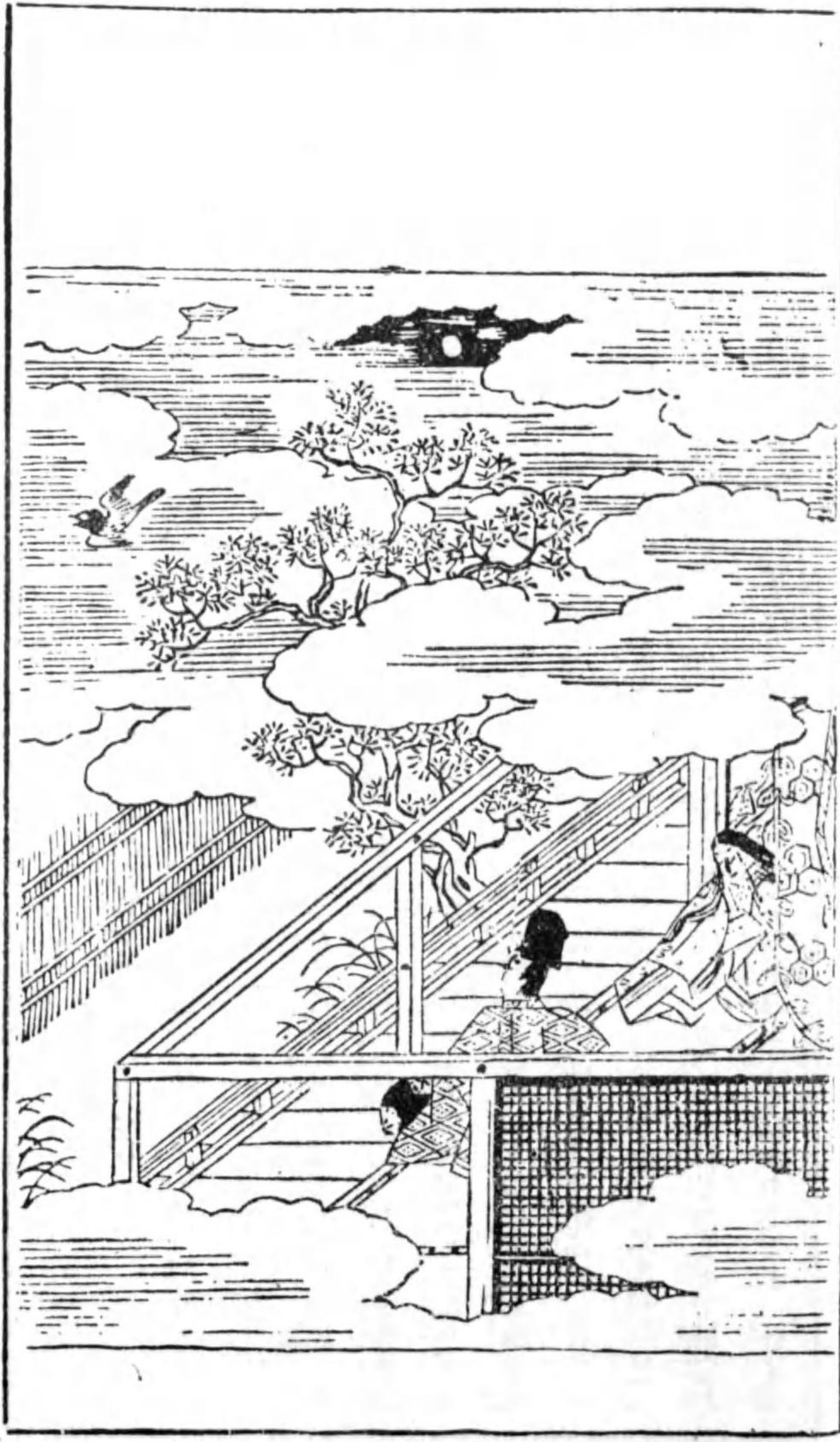
- 源氏花散里を訪はんとして昔馴染の女を尋ぬ
- (一) 戀故の心がちなる心
- (二) 桐壺崩後、世間の不知意なる事
- (三) 源が
- (四) 流石に思切得ぬ麗景
- (五) 麗景殿女御、桐壺帝の妃
- (六) 子もなく
- (七) 源に保護されて
- (八) 麗景殿の妹、花散里と名づく
- (九) 假初に源に逢ひし
- (一〇) 源の性分
- (一一) 重くも待過せぬ
- (一二) 花散里に氣を添みぬかせるをも

人知れぬ御心づからの物思はしさは、いつと無きことなめれど、かく大方の世につけてさへ、煩はしう思し亂るゝ事のみまされば、物心ほそく、世の中なべて厭はしう思しならるゝに、流石なる事多かり。麗景殿と聞えしは、宮たちもおはせず、院隠れさせ給ひて後、いよく哀なる御有様を、たゞこの大將殿の御心にもてかくされて、過し給ふなるべし。御妹の三の君、内裏わたりにて、はかなくほのめき給ひし名残、例の御心なれば、さすがに忘れもはて給はず、わざとももてなし給はぬに、人の御心のみ盡しはて給ふべかめるをも、この頃残るこ



(一) 源が  
(二) 哀を感じずる材料となりて花散が思ひ出さるるに  
(三) 源が花散方へ  
(四) 氣取りたる家に  
(五) 東琴に調子を合せて  
(六) 車より乗り出して  
(七) 加茂祭には突と撞とを冠などに著くれば也  
(八) 心動く  
(九) 源の心、久しく打絶えれば突然の訪問を變に思ふならん、氣がひけるけれど  
(一〇) 過ぎ得ずして躊躇す  
(一一) 此宿を訪へと勤むる如くなれば  
(一二) 昔親みし人の門を通りて舊情な想ひ起し、懐へかねて訪問するぞ  
(一三) 居る人々の聲は惟光が聲で聞かれる聲なりしかば  
(一四) 甘く持掛けて  
(一五) 聲に思へる様なり

となく思し亂るゝ世の哀のくさはひには、思ひ出で給ふに、忍びがたくて、五月雨の空、珍しう晴れたる雲間に渡り給ふ。何ばかりの御装なく、うちやつして、御前なども殊に無く、忍び給へり。中川の程おはし過ぐるに、さよやかなる家の木立など由ばめるに、よく鳴る琴を、あづまに調べてかき合せ、賑はよしく弾きならずなり。御耳とまりて、門近なる所なれば、少しさし出でて見入れ給へば、大なる桂の木の追風に、祭の頃思し出でられて、そこはかとなくけはひをかきき、たゞ一目見給ひし宿なりと、思ひ出で給ふに、たゞならず、程程にけるを、おほめかしくやとつとましかれど、過ぎがてにやすらひ給ふ。折しも郭公鳴きてわたる。催し聞えがほなれば、御車推し返させ給ひて、例の惟光を入れ給ふ。  
(一) 源をちかへりえぞ忍ばれぬほとよぎすはの語らひし宿のかきねに  
(二) 寢殿とおほしき屋の、西のつまに人々居たり。さきぐも聞きし聲なりければ、聲づくり氣色とりて、御消息聞ゆ。若やかなる氣色どもあまたして、おほめくな



花散里



- (一) 源の御出とは聞きたれども、今頃どうして御出ありしやと覺束なし
- (二) わざと庭ふれをす
- (三) 花散りし庭の梢も繁りあひて植ゑし垣根も得こそ見わかぬも門違なりしかも知れぬ
- (四) 女の心中竊に
- (五) 源の心、今は他に男もあるべければ、彼の如く用心して頼に我を迎へぬも尤なり
- (六) 流石憎くもなし
- (七) 太宰大貳の娘、五節の舞殿を勤めし女、五節は十一月宮中にて行はるる女樂
- (八) 女故に源の心は
- (九) 一旦馴染みし女
- (一〇) 豐登殿女御の花散里姉妹の閑居
- (一一) 目的の所、花散里の方
- (一二) 姉の麗や殿
- (一三) 年はとりたれど
- (一四) 桐帝の御寵愛

女郭公かたらふ聲はそれながらあなおほつかな五月雨のそら  
 殊更にたどると見れば、惟光よし／＼植ゑし垣根も」とて出づるを、人知れぬ心  
 には、妬うもあはれにも思ひけり。然もつゝむべきことぞかし、理にもあれば、  
 さすがなり。かやゝの際に、筑紫の五節が、らうたけなりしはやと、まづ思し出  
 づ。如何なるにつけても、御心の暇なく苦しけなり。年月を経ても、なほ斯様に、  
 見しあたりの情は、過し給はぬにしも、なか／＼數多の人の物思ひぐさなり。  
 さてかの本意の所は、思しやりつるも著く、人目なく静かにておはする有様を見  
 給ふも、いと哀なり。まづ女御の御方にて、昔の御物語など聞え給ふに、夜更け  
 にけり。二十日の月さし出づる程に、いとど木高きかへども木間う見えわたりて、  
 近き橘のかをり懐しく匂ひて、女御の御けはひ、ねびにたれどあくまで用意あ  
 りあてにらうたけなり。勝れて花やかなる御おほえこそなかりしかど、曉まじ

- (一) 桐帝が
- (二) 色々々思されて
- (三) 路寄りしたる中川の
- (四) 垣根に鳴きたる同じ
- (五) 郭公にや
- (六) いにしへの事語らへ
- (七) 時鳥如何に知りてか古
- (八) 聲のする
- (九) 故桐帝の由縁懐かし
- (一〇) されば我は今日此處へ訪ね
- (一一) 参れり
- (一二) 差向き此處へ來べき
- (一三) てあつた
- (一四) 忘れ難き事の數増す
- (一五) 人は誰も
- (一六) ばつ／＼話して聞か
- (一七) ずべき相手
- (一八) 君は
- (一九) 女御の感、時勢の
- (二〇) 變は今更言はずとも事
- (二一) なれど
- (二二) 源が
- (二三) 相手が源なる故か
- (二四) 橘の花あればこそ
- (二五) 君にも訪はるくなれ、花
- (二六) 散里を橘に比したるは
- (二七) 何と言ふても
- (二八) 源の心中に他の女
- (二九) と比較せらる
- (三〇) 花散里の部屋

う懐しきかたには、思したりしものをなど、思ひ出で聞え給ふにつけても、昔の  
 事かきつらね思されて、うち泣き給ふ。郭公、ありつる垣根のにや、同じ聲にう  
 ち鳴く。慕ひ來にけるよと思さるよほど、艶なりかし。「如何に知りてか」など、  
 忍びやかにうち誦し給ふ。  
 源の香をなつかしみほとよぎす花ちる里をたづねてぞとふ  
 いにしへの忘れ難う思ひ給へらるよなぐさめには、まづ参り侍りぬべかりけり。こ  
 よなくこそ、紛るよ事も、數そふ事も侍りけれ。大方の世に隨ふものなれば、昔  
 がたりもかきくづすべき人少うなり行くを、ましていかに、徒然も紛るよれとな  
 く思さるらむ」と聞え給ふに、いと更なる世なれど、物をいと哀と思しつどけた  
 る御氣色の淺からぬも、人の御様からにや、多く哀ぞ添ひにける。  
 女御「人めなく荒れたる宿はたちばなの花こそ軒のつまとなりけれ  
 とばかり宣へるも、さはいへど人にはいと殊なりけりと、思しくらべらる。西面



- (一) わざとらしからず
- (二) 源が
- (三) 顔を出し
- (四) 餘り顔のなき源のあしらひ方なれば
- (五) 腹に無い事を言ひ居るにもあらず
- (六) 源の相手になる女は、皆勝れて居る故か、十人十色夫々に取得があるを源が妬むる故か、源はどの女にも過情を以て對する
- (七) 面白からず思ふ女は心變りするもあれば、源は是が淨世の常態よと觀じて居る
- (八) 中川の宿の女も

には、わざとなく忍びやかにうち振舞ひ給ひてのぞき給へるも珍らしきに添へて、  
 (一) よにめなれぬ御さまなれば、つらさも忘れぬべし、何やかやと、例の懐かしく語らひ給ふも、  
 (二) 思さぬ事にはあらざるべし。假にも見給ふ限は、おしなべての際にはあらねばにや、  
 (三) 様々につけて、いふかひなしと思さるよはなければにや、憎けなく、われも人も情をかはしつゝ、  
 (四) 過し給ふなりけり。それをあいなしと思ふ人は、  
 (五) とにかくにかはるも、理の世のさがと思ひなし給ふありつる垣根も、さやうにて有様變りにたるあたりなりけり。

須磨

● 源氏須磨に退去せんとす。左大臣の愁嘆、中納言源氏の情人の愁嘆、紫上と別を惜むて暇乞す。花散里の許、暇乞に行き、種め後事を整理す。臘月夜へ文にて暇乞す。出發、藤壺へ暇乞に行き、桐壺帝の墓に詣り、冷泉へ文にて暇乞す。其返事、臘月夜再朱雀帝に罷せらる。邸宅の整理、京の所々への文、其返事、臘月夜再朱雀帝に罷せらる。朱雀帝のいやみ、須磨の閑居、月夜の愁緒、太宰下京の途中、船より源氏に消息す。娘の五所(源氏の情人)歌を贈る。都の人々源氏を戀ふ。須磨の寂しき生活、明石の入道娘を源氏に奉らんとす。反對意見を持つる妻、氣位高き御、頭中將源氏の謫居を訪ふ。三月上旬の月、源氏海に駛す。激しき浪風、怪妻。

- 源氏須磨に退去せんとす
- (一) 源の心
- (二) 閑居する方が斯くいやな世間に立交るには増ならんと
- (三) 源の心
- (四) 明け放しなる

世の中いと煩はしく、はしたなき事のみ増れば、せめて知らず顔に有經ても、これより勝る事もやと思しなりぬ。  
 (一) かの須磨は、昔こそ人の住處などもありけれ、今は、いと里ばなれ心すこくて、海士の家だに稀になんど聞き給へど、人しゆくひ



- (一) 須磨に住まんと思へば
- (二) 見つともなく
- (三) 捨去らんと覺悟して見ると
- (四) 業上
- (五) 必ず復廻り逢ふべしと思ひ居てさ
- (六) 今須磨に退くとすれば、何時歸るといふ期限けなし
- (七) 我戀は行衛も知らず果もなし逢ふを限と思ふばかり
- (八) わからぬ世に
- (九) 今度の別れが即ち水の別れになるかも知れぬと
- (一〇) 源が甚だ悲しく
- (一一) 業も伴ひ行かんかと
- (一二) 源の心
- (一三) 斯る處へ斯る人を連れ行くも不似合に
- (一四) 又自分にも却て心配の種なるべしなどと
- (一五) 如何程つらき旅ても一籍にさへ行ければ
- (一六) 志を示して

たよけたらむ住居は、いと本意なかるべし、さりとて都を遠ざからむも、故里覺束なかるべきを、人わろくぞおほし亂るよ。萬の事、來しかた行くすゑ思ひ續け給ふに、悲しき事いと様々なり。憂きものと思ひ捨てつる世も、今はと住み離れなむ事を思すには、いと捨て難き事多かる中にも、姫君の旦暮にそへて思ひ歎き給へる様の心苦しきは、何事にも勝れて哀なるを、行きめぐりても復逢ひ見む事を必ずと思さむにてだに、なほ一二日のほど、餘所々に明し暮す折々に、覺束なきものに覺え、女君も心細うのみ思ひ給へるを、幾年その程と限ある道にもあらず、逢ふをかぎり隔たり行かむも定なき世に、やがて別るべき門出にもやと、いみじう覺え給へば、忍びて諸共にもやと、思し寄るをりあれど、さる心細からむ海面の、波風より外に立ち交る人もなからむに、斯くらうたき御様にて、引き具し給へらむもいとつきなく、わが心にもなかく、物思ひのつまなるべきをなど、思し返すを、女君は、「いみじからむ道にも、後れ聞えずだにあらば」とお

- (一) 花散の心細き生活も只源の保護によりて續き行く事なれば
- (二) 花散が源の退居を
- (三) 源が一すても手をかきしどもは
- (四) 源を尋ねたらばどんな吻をされるか知れぬと
- (五) 源の心
- (六) 藤原が源を
- (七) 藤原との中に到底只氣ばかりもめる縁ぢやわいと
- (八) 出發期を知らせず
- (九) 仰山な眼乞の文では無く
- (一〇) 作者自身が

もむけて、恨めしけにおほいたり。かの花散里にも、おはし通ふ事こそ稀なれ、心ほそく哀なる御有様を、この御蔭に隠れて物し給へば、いみじう歎き思したる様いと理なり。等閑にても、ほのかに見奉り通ひ給ひしところぐ、人知れぬ心を碎き給ふ人多かりける。入道の宮よりも、物の聞えや又如何とりなされむとわが御爲つよましけれど、忍びつよ御訪常にあり。昔かやうに相思し、哀をも見せ給はましかばと、うち思ひ出で給ふに、さも様々に、心をのみ盡すべかりける人の御契かなと、つらう思ひ聞え給ふ。三月廿日餘の程になむ、都離れ給ひける。人に、今としも知らせ給はず、唯いと近う仕う奉り馴れたるかぎり、七八人ばかり御供にて、いとかすかにて出で立ち給ふ。然るべき所々に、御文ばかりわざとならずうち忍び給ひしにも、哀と忍ばるばかり書き盡し給へるは、見所もありぬべかりしかど、その折の心地のまぎれに、はかしくも聞き置かずなりにけり。



源氏左大臣邸へ暇乞  
 二三日かねて、大殿に、世に隠れて渡り給へり。網代車のうち寝られたるにて、女車のやうにて隠ろへ入り給ふもいと哀に、夢とのみおほゆ。御方いと淋しげに、荒れたる心地して、若君の御乳母ども、昔侍ひし人の中に、まかで散らぬ限、かく渡り給へるを珍らしがり聞えて、参り上り集ひて、見奉るにつけても、殊に物深からぬ若き人々さへ、世の常なき思ひ知られて、涙にくれたり。若君はいと美しうて、ざれ走りおはしたり。通しき程に忘れぬこそ哀なれ」とて、膝に居る給へる御氣色、忍びがたけなり。大臣此方に渡り給ひて、對面し給へり。左大臣徒然に籠らせ給へらむ程、何と侍らぬ昔物語も、参り来て聞えさせむと思ひ給ふれど、身の病重きにより、公にも仕う奉らず、位をも返し奉りて侍るに、私様には腰のべてなど、物の聞えひがくしかるべきを、今は世の中憚るべき身にも侍らねど、いちはやき世のいと怖ろしう侍るなり。かゝる御事を見給ふるにつけて、命長きは心憂く思ひ給へらるゝ世の末にも侍るかな。天の下を逆様になし

- (一) 源氏左大臣邸へ暇乞
- (二) 出發の二三日前
- (三) 葵上の屋間
- (四) 夕霧
- (五) 思慮深からぬ
- (六) 長く逢はぬのに
- (七) 悲しさ
- (八) 左大臣
- (九) 取留めもなき
- (一〇) 葵上して申上けん
- (一一) 膝手に付ては、屈める腰を延して出歩くに悪く噂されそうなれば
- (一二) 存教なき
- (一三) 源退去の事

ても、思ひ給へ寄らざりし御有様を見給ふれば、萬いと味氣なくなむ」と聞え給ひて、いたうしほたれ給ふ。眞とある事もかゝる事も、前の世の報にこそ侍るなれば、言ひもて行けば、たゞ自らの意になむ侍る。さして斯く官爵を取らねず、あさはかなる事にかゝらひてだに、公のかしこまりなる人の、現さまにて世の中にあり經るは、咎重きわざに、他の國にもし侍るなるを、遠く放ち遣すべき定なども侍るなるは、さま異なる罪に當るべきにこそ侍るなれ。濁なき心に任せてつれなく過し侍らむも、いと憚多く、これより大なる恥に墮まぬさきに、世を遁れなむと思ふ給へ立ちぬるなど、細やかに聞え給ふ。昔の御物語、院の御事思し宣はせし御心ばへなど聞え出で給ひて、御直衣の袖もえ引放ち給はぬに、君もえ心強くももてなし給はず。若君の何心なく紛れありきて、これかれに馴れ聞え給ふを、いみじと思したり。左大臣「過ぎ侍りにし人を、世に思ふ給へ忘るゝ世なくのみ、今に悲ひ侍るを、この御事になむ、若し侍る世ならましかば、いか様に

- (一) 斯る事あるんとは
- (二) 何事も
- (三) つまり不幸は自分の憚忌の結果なり
- (四) 自分が取られたる如く
- (五) 悔の咎を受けたる者
- (六) 朝廷の咎を蒙りたる人が嘗の如く世に在るは外國にても重料とするに
- (七) 自分に付ては還流の評議あるは特別の罰を蒙る譯なるべければ
- (八) 心の潔白を遺みて平氣で居るもの
- (九) 左大臣が
- (一〇) 桐壺の遺志
- (一一) 源もはるりとする
- (一二) 源が
- (一三) 葵上
- (一四) 源退去の事につきてのみは彼の早死を却て幸に思ふ

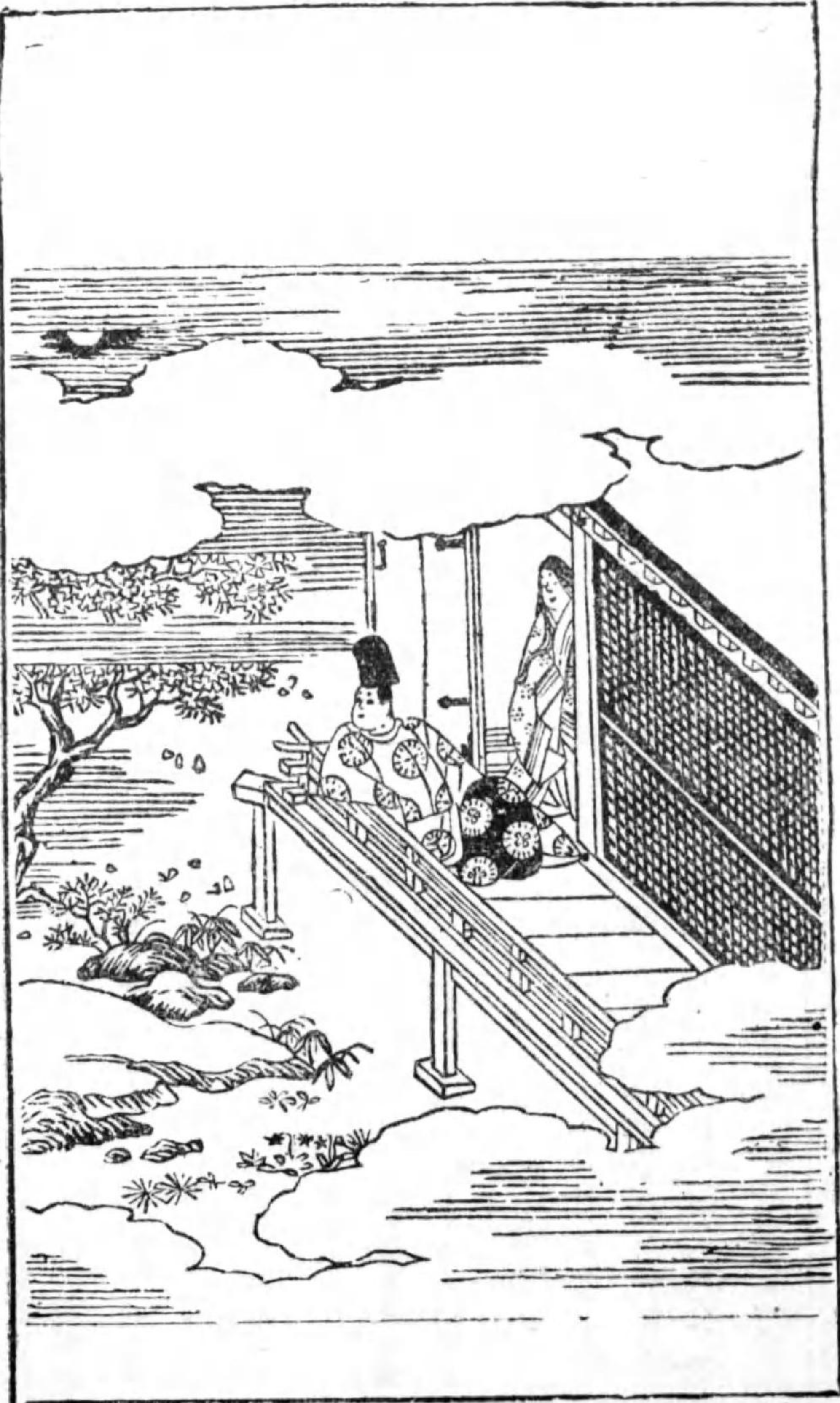


(一) 葵が短命にて  
 (二) 夕霧が老祖父母の手許にて有ちて  
 (三) 源に親まぬ月日の長く置くべきかと

(四) 必しも眞に罪ありて罰せられたるに非ず  
 (五) 前世の因果にて冤を被る事外國にも例あり  
 (六) 其も罪名がありて始めて罰せられたる也  
 (七) 源には罪名も無けれはどうか考へても解せぬ  
 (八) 頭中將  
 (九) 侍女ども  
 (一〇) 彼の侍女より殊に源の愛せる  
 (一一) 口には出せず

(一二) 中納言君と

思ひき歎侍らまし、よくぞ短くて、かよる夢を見ずなりにけると、思ひ給へ慰め侍る。幼くものし給ふが、かく齡過ぎぬる中に留まり給ひて、なづさひ聞えぬ月日や隔たり給はむと、思ひ給ふるをなむ、萬の事よりも悲しう侍る。いにしへの人も、眞に犯あるにてしも、かよる事に當らざりけり。なほ然るべきにて、人のみかどにもかよる類多く侍りけり。されど、言出づる節ありてこそさる事も侍りけれ。とざまかうさまに、思ひ給へよらむ方なくなむなど、多くの御物語聞え給ふ。三位中將も参り逢ひ給ひて、御酒などまゐり給ふに、衣更けぬれば、とまり給ひて、人々御前に侍はせ給ひて、物語などせさせたまふ。人よりは勝にこよなう忍び思す中納言の君、いへばえに悲しう思へる様を、人知れずあはれと思す。人皆静まりぬるに、取りわきて語らひ給ふ。これにより留り給へるなるべし。明けぬれば、夜深う出で給ふに、有明の月いとをかしう、花の木どもやうく盛過ぎで、僅なる木陰の、いとおもしろき庭に薄く霧り渡りたる、そこはかたなく霞み





あひて、秋の夜の哀に多くたちまさされり。隅の間の勾欄におしかよりて、とばかり眺め給ふ。中納言の君見奉り送らむとにや、妻戸押し開けて居たり。又また對面あらむ事こそ、思へばいと難けれ。かよりける世を知らで、心安くもありぬべかりし月頃を、さしも急がで隔てけるよ」など宣へば、物も聞えず泣く。若君の御乳母の宰相の君して、宮の御前より御消息きこえ給へり。

(一) 斯うなる事とは知らず、氣樂に逢はれる時分は左邊はんともせざりし

(二) 口もきかず

(三) 葵の母大宮

(四) 御目にかかりて申上げたけれど

(五) 葵存生中と變りたる

(六) 夕霧の目さむる迄暫時待たずに出給ふか

(七) 退去を思ひ立ちたるも、隣國く烟を見て葵の葬の當時を追懐せん爲なり

(八) 何時も斯くつらき物でもあるまじ、此味を知り居る人もそこに居るものぢや

と聞え給へれば、うち泣き給ひて

源鳥部山もえしけぶりもまがふやとあまの鹽やく浦見にぞゆく

御かへしともなくうち誦じ給ひて、暁の別は、斯うのみやは心づくしなる。思ひ知り給へる人もあらむかし」と宣へば、宰相いつとなく、別といふ文字こそうた

と聞え給へれば、うち泣き給ひて

たなき程は、暫しもやすらはせ給はで。

う出でさせ給ふなるも、様變りたる心地のみし侍るかな。心苦しき人のいぎ

と聞え給へれば、うち泣き給ひて

て侍るなる中にも、今朝は猶類あるまじう思ひ給へらるゝ程かな」と、鼻聲にて、實に淺からず思へり。

源 聞えさせまほしき事も、かへすく思ふ給へながら、たどむすほほれ侍る程推し量らせ給へ。いぎたなき人は、見給へむにつけても、なかく、うき世遁れ難う思ひ給へられぬべければ、心強く思ふ給へなして、急ぎまかして侍り。

と聞え給ふ。出で給ふほどを、人々のぞきて見奉る。入方の月いと明きに、いとどなまめかしう清らにて、物を思いたる様、虎狼だにも泣きぬべし。ましていはけなくおはせし程より見奉りそめてし人々なれば、たとしへなき御有様をいみじと思ふ。まことやかの御かへし。

大宮 なき人のわかれやいと隔たらむ煙となりし雲井ならでは

取りそへて哀のみつきせず、出で給ひぬる名残、ゆよしきまで泣きあへり。

(一) 大宮へ源の返事

(二) 臺に閉ぢられて口に出ぬ様を

(三) 顔を見ると却て煩惱の種なるべければ

(四) 源の幼時より

(五) 大宮の

(六) 葵が烟となりし都の空を離れては、葵との隔は彌々甚しからん



- 紫上と別を惜む
- (一) 二條院に源が
- (二) 伺候者の詰所
- (三) 私宅へ訣別に行きし間と見えて
- (四) 親しからざる人は
- (五) 食卓 外來の の用ひし物なるべし
- (六) 昔の疊は薄くて用ゑる時に敷く物故、用なれば片附けおく也
- (七) 珍居る間さへ如此
- (八) 留守にならば
- (九) 戸締もせず
- (一〇) 紫が
- (一一) 源の心、我退去の後久しくならば彼等も居たりまらず散り行くべし
- (一二) 夜更けたれば宿れり
- (一三) いつものとんでもなき浮氣沙汰と思ひしか
- (一四) 出發前丈で其方の御を離れと思へども
- (一五) 引込んで許も居られず

殿におはしたれば、わが御方の人々も、まどろまさりける氣色にて、處々に群れ居て、あさましとのみ世を思へる氣色なり。侍には、親しう仕う奉るかぎり、御供に參るべき心まうけて、私のわかれ惜むほどにや、人目もなし。さらぬ人け訪ひ參るも重きとがめあり、煩はしき事まされば、所狭く集ひし馬車のかたもなく寂しきに、世は憂きものなりけりと思し知らる。臺盤なども傍は塵ばみて、ところくひきかへしたり。見るほどだに斯かり、まして如何に荒れゆかむと思す。西の對に渡り給へれば、御格子も參らで眺め明し給ひけれ。寶子などに若き童へ、ところくひに臥して、今ぞ起きさわぐ。宿直姿どもをかしうて出で入るを見給ふにも心細う、年月経ばかよる人々も、えしも在りはてでや行き散らむなど、さしもあるまじき事さへ。御目のみとまりけり。眞昨夜は云々して夜更けにしかばなむ。例の思はずなる様にや思しなしつる。かくて侍る程だに御目かれずと思ふを、かく世を離るゝ際には、心苦しきことの自ら多かりけるを。ひた

- (一) 人に薄情不と厭はれて終るも嫌なれば
- (二) 源の退去以外に飛てもない事とは何を言はん
- (三) 源が見ての感
- (四) 以下源が理ぞかしと感したる其注釋、紫上父とは元來疎遠にて源をのみ力にし來れるに
- (五) 近來は世間を懼りて兵部卿が尙寄付かず見舞にも來ぬが外聞悪く
- (六) 源が父に知られなればよかつたと紫の愚痴
- (七) 兵部卿官の今の姿
- (八) 紫の俄出世のさまを見よ
- (九) 思ふ人には極つて別れる人哉、紫が昔母祖母に分れ今夫に分るゝを云
- (一〇) 紫からも無沙汰
- (一一) 外には力になる人なく
- (一二) 出中の住居
- (一三) 今伴ひ行きては不似合にて人聞悪し
- (一四) お上に對し憚む人
- (一五) 我身に
- (一六) 免れぬ因果で

やごもりにてやは。常なき世に、人にも情なきものと、心おかれはてむも、いとほしうてなむ」と聞え給へば、紫かよる世を見るより外に、思はずなることは、何事にか」とばかり宣ひて、いみじと思し入りたる様、人より殊なるを、理ぞかし、父親王はいと疎にて、もとより思しつきにけるに、まして世の聞えを煩はしがりて、音づれ聞え給はず、御訪にだに渡り給はぬを、人の見るらむ事も恥かしく、なかなか知られ奉らでやみなました。繼母の北の方などの一世に俄なりし幸福のあわたしき。あなゆよしや、思ふ人々、かたぐにつけて別れ給ふ人かな」と宣ひけるを、さる便ありて漏り聞き給ふにも、いみじう心憂ければ、これよりも絶えて音づれ聞え給はず。又たのもしき人もな、實にぞ哀なる御有様なる。眞なほ世に免され難うて年月を経ば、殿の中にも迎へ奉らむ。たゞ今は人聞のいとつきなかるべきなり。公に畏り聞ゆる人は、明なる月日の影をだに見ず、安らかに身を振舞ふことも、いと罪重かなり。過なけれど、さるべきにこそかよ



(一)配所へ女を連れ行く  
 (二)無暗に物騒な今の世なれば、女を連れ行く杯の事あらば一層面倒なるべし  
 (三)源の第太宰帥  
 (四)頭中將  
 (五)官符を取られたれば源今は無位也、無位の人には紋様なき衣を著る也  
 (六)目一杯に評べて  
 (七)身は離れても常に君の御にあり鏡の中に留めおく我影は残りて君と添ひ居るべし  
 (八)源の感、今まで見た多くの女の中で

る事もあめれと思ふに、まして思ふ人具するは、例なきことなる。ひたおもむきに物ぐるほしき世にて、立ちまさる事もありなむなど聞え知らせ給ふ、日たくるまで大殿籠れり。帥宮、三位中將などおはしたり。對面し給はむとて、御直衣など奉る。源「位なき人は」とて、無救の御直衣、なか／＼いと懐かしきを著給ひて打ち窶れ給へる、いとめでたし。御髪かき給ふとて、鏡臺に寄り給へるに、面瘦せ給へるかけの、我ながらいとあてに清らなれば、源「こよなうこそ衰へにけれ。この影のやうにや瘦せて侍る。哀なるわさかな」と宣へば、女君、涙をひとめうけて見おこせ給へる、いと忍びがたし。  
 源身はかくてさすらへぬとも君があたり去らぬ鏡のかけははなれじ  
 ときこえ給へば、  
 繁わかれてもかけだにとまるものならば鏡を見てもなぐさめてまし  
 言ふともなくて、柱がくれに居隠れて、涙を紛はし給へる様、なほこよら見る中

(一)帥宮  
 (二)花散里への暇乞  
 (三)源の心  
 (四)源にたより来る  
 (五)花散里  
 (六)源景殿  
 (七)我を人がましく思召して  
 (八)源を力にして  
 (九)源退去の後は  
 (一〇)花散里に  
 (一一)源が暇乞に来ぬな  
 (一二)源の  
 (一三)花散里が

に類なかりけりと、思し知らるゝ人の御有様なり。親王は、哀なる御物語聞え給ひて、暮るゝ程に還り給ひぬ。  
 花散里の心ほそけに思して、常に聞え給ふも理にて、かの人も今一度見すばつらしとや思はむと思せば、その夜はまた出で給ふものから、いと物憂くて、いたう更しておはしたれば、女御、「かくかすまへ給ひて、立ち寄せ給へる事」と、喜び聞え給ふ様、書きつゞけむもうるさし。いとみじう心ほそき御有様、たゞこの御かけに隠れて過い給へる年月、いとど荒れまさらむ程思しやられて、殿の中いと幽なり。月おほろにさし出でて、池廣く山木深きわたり、心ほそけに見ゆるにも、住み離れたらむ巖の中思しやらる。西面には、斯うしもわたり給はずやと、うち屈して思しけるに、あはれ添へたる月影の、なまめかしうしめやかなるに、うち振舞ひ給へるにほび、似るものなくて、いと忍びやかに入り給へば、少し膝行り出て、やがて月を見ておはす。又こよに御物語のほどに、明方近うなりにけ



- (一) 再びは出来まじと思へば、無事なりし時に繁雲はざりしが残念にて
- (二) 心の安まる折なし
- (三) 世間を憶りて
- (四) 役身が入る月に比較されて
- (五) 湯紫の衣に映じて
- (六) 「よひにあひて思物よ明の我袖に宿る月さへぬる顔なる」
- (七) 我敷ならぬ身に源の御光は留めもきて常に見たし
- (八) 花散が甚だ悲しと
- (九) 我冤罪は遂に響るべければ 左様に歎くこと勿れ
- (一〇) 「行先を知らぬ涙の悲しきは只目の前に落つるなりけり」
- (一一) 心を卑怯にする
- (一二) 夜明前

り。運「短の夜のほどや。斯ばかりの對面も又はえしもやと思ふこそ、ことなしにて過しつる年頃もくやしう 來しかた行くさきの例になりぬべき身にて、何となく心のどまる世なくこそありけれ」と、過ぎにし方の事ども宣ひて 鶏もしばく鳴けば、世につよみて急ぎ出で給ふ。例の月の入りはつる程、よそへられてあはれなり。女君の濃き御衣にうつりて 實に「ぬる顔」なれば、  
 花散月影のやどれる袖はせばくともとめても見ばやあかぬひかりを  
 いみじと思ひたるが、心苦しければ、かつは慰め聞え給ふ。  
 運「行きめぐりつひにすむべき月影のしばしくもらむ空ながめそ  
 思へばはかなしや。たゞ、知らぬ涙のみこそ、心おくらすものなれ」など宣ひて、  
 明ぐれのほどに出で給ひぬ。  
 よろづの事どもしたよめさせ給ふ。親しう仕う奉り、世になびかぬ限の人々、殿の事とり行ふべき上下定め置かせ給ふ。御供に隨ひ聞ゆるかぎりは、また擇り出

- (一) 須磨にてつかふべき道具
- (二) 無くてならぬ物のみ
- (三) 飾も無く簡潔にて
- (四) 事々しき道具
- (五) 引次ぐ
- (六) 地所家屋などの證書
- (七) 紫へ
- (八) 建てたたる倉
- (九) 役に立つ女と見込みたれば
- (一〇) 家令どもを少納言に加へて
- (一一) 心得方を紫、少納言等に言ひ置く
- (一二) 源付の侍女
- (一三) 二人とも源の妾
- (一四) 可愛がられぬ迄も
- (一五) 源退去の後は何につけてか心を慰めん
- (一六) 都に
- (一七) 紫方に
- (一八) 紫方へ
- (一九) 娛樂的の品を頒つは勿論、實用の物迄にも及ぶ
- (二〇) 臘月夜

で給へり。かの山里の御住處の具は、えさらすととり使ひ給ふべきものども 殊更に装もなくことそぎて、又然るべき書ども文集など入れたる箱、さては琴一つぞ持たせ給ふ。所せき御調度、花やかなる御装など、更に具し給はず。あやしの山賤めきてもてなし給ふ。侍ふ人々よりはじめ、よろづの事、皆西の對に聞えわたり給ふ。領じ給ふ御庄、御牧より初めて、さるべき所々の券など、皆奉りおき給ふ。それより外の御倉町、納殿などいふことまで、少納言を、はかくしきものに見置き給へれば、親しき家司ども具して、しろしめすべき様ども宣ひあづく。わが御方の中務、中將などやうの人々、つれなき御もてなしながら、見奉る程こそ慰めつれ、何事につけてかと思へども、運命ありてこの世に又歸るやうもあらむを、待ちつけむと思はむ人は、こなたに侍へ」と宣ひて、上下皆參上らせ給ひて、然るべき物ども、品々くばらせ給ふ。若君の御乳母達、花散里などに、をかしき様のはさるものにて、まめくしき筋に思し寄らぬことなし。尙侍



(一) 無理に音信す  
 (二) 彌々立退かんと決心する際

(三) 君を懸ひて遠ふことを得ず空しく歌に沈みしことが今度流風の身となるべき基をなせり、み(水筋)に身をきかせたり、實に通じたる事は無き様に詠めるが、源の用心深き所なりと舊注にいへり  
 (四) 使の持ち行く途中  
 (五) 涙が  
 (六) 此後の逢瀬を待たずして我身は歎き死にすべし、水泡に身をきかせたり  
 (七) 源の心、今一度圖に逢はずに行く事  
 (八) 女が弘徽殿の妹なる事を思へば快からぬ事多  
 (九) 強ひて逢ひたしとも  
 (一〇) 出發の前夜、藤原、桐壺帝の墓、冷泉への暇乞

の御許に、わりなくして聞え給ふ。

源訪はせ給はぬも理に思ひ給へながら、今はと世を思ふ給へはつるほどの憂さもつらさも、類なきことにこそ侍りけれ。

逢瀬なきなみだの河に沈みしや流るよみをのはじめなりけむ

と思ひ給へ出づるのみなむ、罪遁れ難う侍りける。

道の程も危ければ、こまかには聞え給はず。女といみじう覺え給ひて、忍び給

へど、御袖より餘るも所せくなむ。

圓月なみだ河うかぶ水泡も消えぬべし流れて後の瀬をもまたずて

泣くく亂れ書き給へる御手いとをかしけなり。今一たび對面なくてやとおほす

はなほ口惜しけれど、おほし返して、憂しと思しなすゆかり多くて、おほろけ

ならず忍び給へば、いとあながちにも聞え給はずなりぬ。

明日とての暮には、院の御墓拜み奉り給ふとて、北山へまうで給ふ。曉かけて月





- (一) 藤原の座近き
- (二) 藤原自身對話
- (三) 藤原が心配する
- (四) 藤原の
- (五) 藤原の
- (六) 源の心、昔の恨も言ひたけれ
- (七) 今更難な事を言ふと藤原が思ふべし
- (八) 胸にこたへる一條、藤原と密通の事
- (九) 我身はどうなりても冷泉の帝位さへ動かねば満足なり
- (一〇) 桐壺の陵
- (一一) 桐壺言ありや
- (一二) 桐壺は崩御源は退去といふ悲しき目に遇ひては、折角世を通れし効も無く此世の悲に歎き暮らす無く泣くをかけた

出づる頃なれば、まづ入道の宮に参うで給ふ。近き御座の前に御座よりりて、御身づから聞えさせ給ふ。春宮の御事を、いみじく後めたきものに思ひ聞え給ふ。互に心深きどちの御物語は、萬の哀増りけむかし。懐しうめでたき御けはひの昔に變らぬに、つらかりし御心ばへもかすめ聞えさせまほしけれど、今更にうたてと思さるべし、わが御心にも、なかく今一際亂れまさりぬべければ、念じかへしてたゞ、馬かく思ひかけぬ罪に當り侍るも、思ひ給へあはする事の一ふしになむ、空恐ろしう侍る。惜しけなき身は亡きになしても、宮の御世だに事なくおはしまさばや」とのみ聞え給ふぞ、理なるや。宮も、皆思し知らるゝ事にしあれば、御心のみ動きて聞えやり給はず。大將、よろづの事かき集め思しつとけて泣き給へる氣色、いと盡せすなまめきたり。馬御山に参り侍るを、御言傳や」と聞え給ふに、頼に物も聞え給はず。わりなくためらひ給ふ御氣色なり。

藤原見しはなくあるは悲しき世の果を背きしかひもなくくぞふる

- (一) 兩人共心頭に群がる感想を言ひ願はし得ず
- (二) 父の死別に悲は誰きたりと思ひしに
- (三) 言ふ迄もなき事なれども、以前 行装とは秘別の相違
- (四) 伊豫介の弟息子
- (五) 當然從五位下に叙せらるべき期限も過ぎしに
- (六) 免官せられて、殿上出動の官吏は日給簡といふ札に姓名を記され、免官になれば其札を除かる
- (七) 通り懸りにあれぞと見やる時
- (八) 加茂祭當時の事が馬より下りて源の馬の口をとる
- (九) 加茂の神も恨めしく思はる
- (一〇) 源の心、彼の情察すべし、祭當時は人に勝れて華麗なる隨身なり
- (一一) 暇乞

いみじき御心惑ひどもに、思し集むる事ども、えぞつとけさせ給はぬ。別れしに悲しきことはつきにしをまたぞこの世の憂さはまされる。月まち出でて出で給ふ。御供に唯五六人ばかり、下人もむつまじき限して、御馬にてぞおはする。更なる事なれど、ありし世の御ありきに異なり、皆いと悲しう思ふ中に、かの御禊の日、假の御隨身にて仕う奉りし、右近の尉の藏人、得べき爵位も程すぎつるを、終に御簡けづられて、官も取られてはしたなけれぬ。御供に参るうちなり。賀茂の下の御社を、かれと見渡すほど、ふと思ひ出でられて、下りて御馬の口をとる。

右近ひき連れて葵がざしよそのかみを思へばつらし賀茂のみづがきといふを、實にいかと思ふらむ、人より勝に花やかなりしものを、と思すも心くろし。君も、御馬より下り給ひて、御社の方を拜み給ふとて、神にまかり申し給ふ。



- (一) 跡に發る名の清濁は、  
糺すといふ名をもてる賀  
茂の糺神社の神に任せて
- (二) 右近衛は物に感心す  
る青年で
- (三) 桐壺在世の時の  
無上の帝王でも
- (四) 無上の帝王でも
- (五) とかくの逆事を聞き  
得ざる故
- (六) 桐壺が彼程氣にかけ  
られし
- (七) 桐壺在世中の姿
- (八) 亡き父帝は何と思つ  
て見て居らるゝならん、  
父帝の傳と思つて見た月  
も隠れたり
- (九) 藤壺の代り
- (一〇) 王命婦に宛てて

頭うき世をば今ぞわかるよとどまらむ名をばたどすの神にまかせて  
 と宣ふさま、物めでする若き人にて、身にしみて哀にめでたしと見奉る。御山  
 に參うで給ひて、おはしましよ御有様、たゞ目の前のやうに思し出でらる。限な  
 きにても、世になくなりぬる人ぞ、言はむ方なく口惜しきわざなりける。よろづ  
 の事を泣くく申し給ひても、そのことわりを現にえ承り給はねば、さばかり  
 思し宣はせしさまくの御遺言は、何方か消え失せにけむと、いふかひなし。御  
 墓は道の草しげくなりて、分け入り給ふ程いとど露けきに、月も雲がくれて、森  
 の木立木深く心すごし。歸り出でむ方もなき心地して、拜み給ふに、ありし御面  
 影さやかに見え給へる。そぞろ寒きほどなり。  
 頭なきかけやいかで見らむよそへつと眺むる月も雲がくれぬる  
 明けはつる程にかへり給ひて、春宮にも御消息聞え給ふ。王命婦を御かはりとして  
 侍はせ給へば、その局にとて、

- (一) 今一度参上せぬが何  
より残念
- (二) 手紙を
- (三) 冷泉に
- (四) 眞面目になりて
- (五) 遠く離れたらば如何  
に感しき事ならん
- (六) あつけない御返事と
- (七) 命婦の心、つまらぬ  
戀をして源が心配せし
- (八) 藤壺も源も氣樂に世  
を送らるゝ身分なるに  
心がらて苦勞せしも命婦  
自身の所爲の後に後悔せ  
らる
- (九) 申上ぐるに詞なし
- (一〇) 冷泉には申上げた  
り

頭 今日なむ都離れ侍る。又參り侍らざるなりぬるらむ、あまたの憂にまさりて思  
 ひ給へられ侍る。よろづ推し量りて啓し給へ。  
 いつかまた春のみやこの花を見む時うしなへる山がつにして  
 櫻の散り過ぎたる枝につけ給へり、斯くなむと御覽せさすれば、幼き御心地にも、  
 まめだちておはします。命婦御かへしいかと物し侍らむ」と啓すれば、春宮暫し見  
 むだに戀しきものを、遠くはましていかに、といへかし」と宣はす。物はかなの御  
 かへりやと、あはれに見奉る。味氣なき事に御心をくだき給ひし昔の事、折々の  
 御有様、思ひ續けらるゝにも、物思ひなくて我も人も過し給ひつべかりける世を、  
 心と思し歎きけるを、くやしう、我心ひとつにかよらむ事のやうにぞ覺ゆる。御  
 返は、  
 命婦さらに聞えさせやり侍らず。御前には啓し侍らぬ。心細げに思し召したる  
 御氣色もいみじう。



- (一) 榮花の一時なるは今更路方なれど、今一度立歸られん事を切に祈る
- (二) 返事を出した跡でも
- (三) 弱り込んが源の有様
- (四) 源は覺えて居そうもなき下女頭
- (五) 從來何處に預りしに
- (六) 源の退六を竝大抵の事には思はぬ
- (七) 源が
- (八) 通らぬ
- (九) 源の御恩蒙らぬ者はなく
- (一〇) 恩を辨へぬに非ざれども
- (一一) 容赦なく右大臣方より迫害されるに恐れて
- (一二) 世間一帯に騒ぎて

なご、そこはかとなく、心の亂れけるなるべし。  
 命婦(一) 咲きて疾く散るは憂けれど行く春は花の都を立ちかへりみよ  
 時しあらば、

と聞えて、名残も哀なる物語をしつと、一宮のうち忍びて泣きあへり。一目も見奉れる人は、かく思しくづほれぬる御有様を、歎き惜み聞えぬ人なし。まして常に参り馴れたりしは、知り及び給ふまじき長女、御側人までも、ありがたき御願の下なりつるを、暫しにても、見奉らぬ程や經むと思ひ歎きたり。おほかたの世の人も、誰かはよろしく思ひ聞えむ。七つになり給ひしよりこのかた、帝の御前に夜晝侍ひ給ひて、奏し給ふ事のなりぬはなかりしかば、この御勞にかからぬ人なく、御徳を喜ばぬやはありし、やむごとなき上達部、辨官などの中にも多かり。それより下は數知らぬを、思ひ知らぬにはあらねど、さしあたりては、いちはやき世を思ひ憚りて、参り寄る人もなし。世のすりて惜み聞え、下には公(二)

- (一) 我が御甲斐なきが恥しき程
- (二) 須磨へ出發
- (三) 紫に對ひて云ふ
- (四) 別れたらば噂話よめき事が積つて居る様な心持がするならん
- (五) 胸の晴れぬ
- (六) 我が行つて仕舞ひたらば紫はどうなるであらう
- (七) 自分が心弱き様を見せは沈み居る紫が憂い恐を増す譯なれば、次の標に咏む
- (八) 生別といふ事のあるを知らず今迄命限りと君と契りし事よ

をそしり恨み奉れど、身を捨てて訪らひ参らむにも何のかひかは、と思ふにや。かゝる折は人わろく、恨めしき人多く、世の中は味氣なきものかなとのる、萬につけて思ふ。

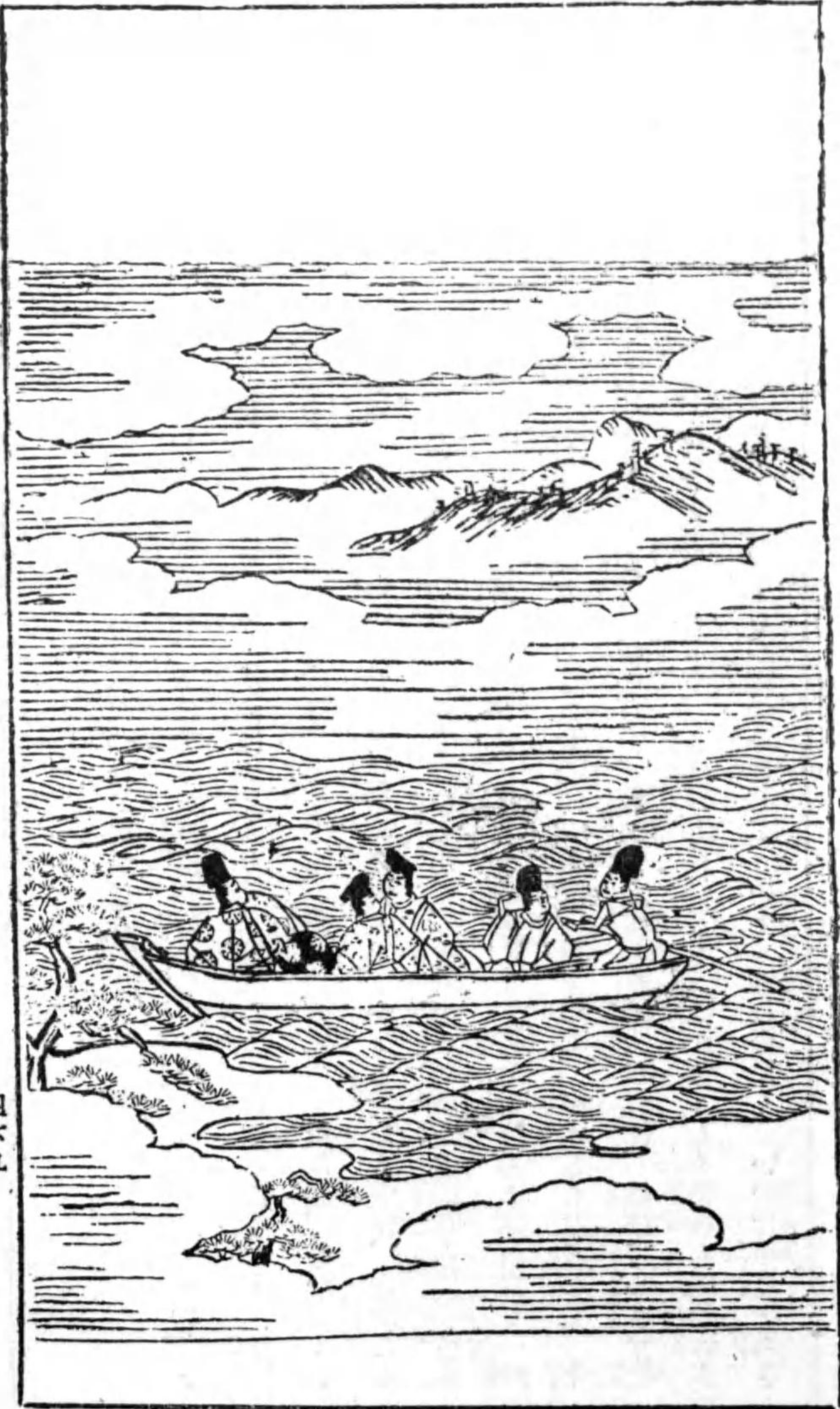
- (一) 須磨へ出發
- (二) 紫に對ひて云ふ
- (三) 別れたらば噂話よめき事が積つて居る様な心持がするならん
- (四) 胸の晴れぬ
- (五) 我が行つて仕舞ひたらば紫はどうなるであらう
- (六) 自分が心弱き様を見せは沈み居る紫が憂い恐を増す譯なれば、次の標に咏む
- (七) 生別といふ事のあるを知らず今迄命限りと君と契りし事よ

その日は女君に、御物語長閑に聞え暮し給ひて、例の夜深く出で給ふ。狩の御衣など、旅の御よそひいたく寢し給ひて、暁月出でにけりな。なほ少し出でて見だに送り給へかし。いかに聞ゆべき事多くつもりにけりとのみ覺えむとすらむ。一日二日たまさかに隔つる折だに、怪しういぶせき心地するものを」とて、御簾まき上げて、端の方に誘ひ聞え給へば、女君泣き沈み給へる。ためらひて膝行り出で給へる、月影に、いみじうをかしけにて居給へり。わが身斯くてはかなき世を別れなば、如何なる様にさすらへ給はむと、後めたく悲しけれど、思しいりたるがいとどしかるべければ、  
(八) 通いける世のわかれを知らず契りつと命を人にかぎりけるかな



(一) わざと一通の歌を吟めば  
 (二) 源の推測  
 (三) 見つともなかるべければ  
 (四) 須磨に著す、邸宅の紅燈籠  
 (五) 紫の顔が目先にもちつきて  
 (六) 午後四時頃  
 (七) 難波渡邊にある眞寶宮跡洛の時宿る所といふ  
 (八) 嵯峨王に放逐されし屈原は瀨邊を彷徨して終に汨羅に身を投げたるが我は其にも勝れる放浪の身となるべし  
 (九) 寄せてはかへる  
 (一〇) 「いとどしく過ぎ行く方の無しきに羨しくも歸る浪哉」  
 (一一) 雁り切つたる故事  
 (一二) 白氏文集、十一月、中長至夜、三千里外遠行人

はかなし」など、あさはかに聞えなし給へば、  
 兼情せしからぬ命いのちにかへて目の前のわかれをしはしとどめてしかな  
 けに然しかぞ思おもさるらむと、いと見捨みすて難たけれど、明けはてなばはしたなかるべきに  
 より、急いそぎ出いで給ひぬ。  
 道ちみちすがら面影おもかげにつとそひて、胸むねも塞ふさがりながら、御船みふねに乗り給ひぬ。日長ひながきころ  
 なれば、追風おひかぜさへ添そひて、まだ申まをの時ときばかりに、かの浦うらに著つき給ひぬ。かりそめ  
 の道ちみちにても、かよる旅たびをならひ給はぬ心地こころに、心細こころこさもをかしさも珍めづらかなり。(六)大  
 江殿えのどのと言いひける所ところは、いたく荒あれて、松まつばかりぞしるしなりける。  
 源唐國げんからくにに名なを残のこしける人ひとよりもゆくへ知られぬすまひをやせむ  
 渚なみに寄よる浪なみのかつかへるを見給ひて、「うらやましくも」と打ち誦よみじ給へる、さる世  
 の故事ことばなれども、珍めづらしく聞きなされ、悲かなしとのみ御供みまがらの人々ひとら思おもへり。うち願ねがみ  
 給へるに、來こし方かたの山やまは霞かすみはるかにて、まことに三千里さんせんりの外ほかの心地こころするに、權かの





(一) 涙を母路なれば權の  
 聖といひなせる也  
 (二) 故郷と同じ空か  
 (三) 以下須磨着後の事、  
 源の住むべき所は  
 (四) 行平須磨に流さるこ  
 時の歌「わくらばに聞ふ  
 人あらは須磨の浦に藻鹽  
 垂れつゝ侘ふと答へよ」

(五) 昔の物好  
 (六) 源の領地  
 (七) 普請の事など  
 (八) 源良清、父は播磨守  
 (九) 源に昵近の家令にて  
 (一〇) 庭を流るゝ水を深  
 くし  
 (一一) 夢の様なり  
 (一二) 播磨守も  
 (一三) かねて源邸に伺  
 候の人  
 (一四) 旅住居に似合はず  
 (一五) くさくして

雲も堪へがたし。  
 (一)

源ふる里を峯のかすみはへだつれどながむる空はおなじ雲井か  
 つらからぬもの無くなむ、おはすべき所は、行平の中納言の、藻鹽たれつゝ侘び  
 ける家居近き邊なりけり。海面はやゝ入りて、哀に心すごけなる山中なり。垣の  
 さまより初めて珍らかに見給ふ。茅屋ども、葦ふける廊めく屋など、をかしうし  
 つらひなしたり。所につけたる御住居、様變りて、かゝる折ならずは、をかしう  
 もありなましと、昔の御心のすさび思し出づ。近き處々の御庄の司召して、然る  
 べき事どもなど、良清の朝臣など、親しき家司にて、仰せ行ふもあはれなり。時  
 の間に、いと見所ありてしなさせ給ふ。水深う遣りなし、植木どもなどして、今  
 はとしづまり給ふ心地、現ならず。國の守も親しき殿人なれば、忍びて心寄せ仕  
 う奉る。かゝる旅所ともなく、人騒がしけれど、はかなくしく物をも宜ひ合す  
 べき人し無ければ、知らぬ國の心地して、いともれいたく、いかで年月を過さ  
 (二五)





●京の所々への文、其返事  
 (一)紫上  
 (二)夕露  
 (三)紫と腰遣との手紙  
 (四)涙にくれたり  
 (五)腰  
 (六)松島のあまは藤原、須磨の浦人は源  
 (七)歎きは何時もの事なれど、雨期は尙更過去未  
 來を思ひて心も昏み  
 (八)「君戀ふる涙落ち濡  
 ひ此川の汀まさりて思ふ  
 べしなり」  
 (九)圓月夜  
 (一〇)侍女の中納言への  
 私情の體裁にして、中に  
 封じこめて贈冠  
 (一一)我は斯くなりても  
 猶君を戀ひ居るが、此浦  
 の罪は何と思ふぞ、こりず  
 (君は何と思ふぞ)こりず  
 まゝ須磨、みるゝ涙  
 見る  
 (一二)左大臣にも夕露の  
 乳母にも  
 (一三)彼方でも此方でも

ましと思しやらる。  
 やうく事しづまり行くに、長雨の頃になりて、京の事ども思しやらるるに、戀  
 しき人多く、女君の思したりし様、春宮の御事、若君の何心もなく紛れ給ひしな  
 どをはじめ、此處彼處思ひやり聞え給ふ。京へ人出したて給ふ。二條院へ奉り  
 給ふと、入道の宮のとは、書きもやり給はず、くらされ給へり。宮には、  
 源松島のあまの宮屋もいかならむ須磨の浦人しほたるころ  
 (六)いつと侍らぬ中にも、來しかた行くさきかきくらし、汀まさりてなむ。  
 (七)尙侍の御許に、例の中納言の君の私事のやうにて、中なるに、  
 (九)涙つれくと、過ぎにし方の思ひ給へ出でらるるにつけても  
 こりすまの浦のみるめゆかしきを鹽焼く蟹や如何思はむ  
 (二)さまざま書き盡し給ふ言の葉、思ひやるべし。大殿にも、宰相の乳母にも、仕う  
 奉るべき事なども書きつかはす。京には、この御文、ところぐに見給ひつよ、御

(一)紫上は文を見ると其  
 儘  
 (二)もてあまして  
 (三)源が手馴したる  
 (四)紫が源を  
 (五)縁起悪く思ひて  
 (六)北山の僧都、紫の伯  
 父  
 (七)二樓の趣意にて、即  
 ち下にいへる趣意にて  
 (八)紫の  
 (九)源が  
 (一〇)僧都が氣の毒に思  
 ひて  
 (一一)夜具  
 (一二)紫が  
 (一三)源今無位無官なる  
 故縁なき衣笠を著る也  
 (一四)前の源の歌  
 (一五)歌の意味通り  
 (一六)以下作者の批評、  
 分別ある苦勞人でも此場  
 合は慈きに、況や父母の  
 如く育み立てられたる源  
 に別れたる若き紫の嘆く  
 は道理也  
 (一七)いつそ死したる人  
 ならば又謂めて忘るゝ事  
 も出来べけれど

心亂れ給ふ人々のみおほかり。二條院の君は、そのまよに起きもあがり給はず、盡  
 せぬさまに思し焦るれば、侍ふ人々もこしらへわびつよ、心細う思ひあへり。も  
 てならし給ひし御調度ども、彈き鳴し給ひし御琴、ぬぎ捨て給へる御衣の匂など  
 につけても、今はと世になくなりたらむ人の様にのみ思したれば、且はゆえしう  
 て、少納言は、僧都に御祈禱の事など聞ゆ。二かたに御修法などせさせ給ふ。且  
 はかく思し歎く御心を静め給ひて、慰め、又もとの如くに歸り給ふべき様になど、  
 (八)心苦しきまよに祈り申し給ふ。旅の御宿直物など、調じて奉りたまふ。縁の御  
 直衣指貫、様變りたる心地するもいみじきに、「さらぬ鏡」と宣ひし御面影の、實  
 (一〇)に身に添ひ給へるもかひなし。出で入り給ひし方、寄り居給ひし真木柱などを見  
 給ふにも、胸のみふたがりて、物をとかう思ひめぐらし、世にしほじみぬる齡の  
 人だにあり、まして馴れ睦び聞え、父母にもなりつよ扱ひ聞え、おぼし立てなら  
 はし給へれば、俄に引き別れて、戀しう思ひ聞え給へることわりなり。ひたすら  
 (二七)



(一) 夢が  
 (二) 藤壺も冷泉の事によ  
 りて源の退去を嘆くは勿  
 論 従来の關係を思へば  
 嘆の深きは其管也  
 (三) 外聞を憚る故  
 (四) 源に對して  
 (五) 源の情に心動いても  
 知らぬ顔して過し、木野  
 りを應答もせしが  
 (六) 彼程うるさい人の口  
 でも、密通一條許りは毛  
 程も言はずに濟みし程の  
 源の仕方  
 (七) 情の程に任せず人  
 目につかぬ様甘く隠せし  
 事よ  
 (八) 藤壺の  
 (九) 我は此頃只嘆きに沈  
 みて、満ちることを役に  
 して居る

世になくなりなむは、言はむ方なくて、いふかひなきにても、やうく忘草も生  
 ひやすらむ 聞く程は近けれど、いつまでと限ある御別にもあらぬを思すに、盡  
 きせよなむ。入道の宮にも、春宮の御事により、思し歎くさまいと更なり 御宿  
 世の程を思すには、いかど淺くは思されむ。年頃はたゞ物の聞えなどのつよまし  
 さに、少し情ある氣色見せば、それにつけて人の咎め出づる事もこそとのみ、ひ  
 とへに思し忍びつよ、哀をも多う御覽じすぐし、すくくしうもてなし給ひしを、  
 かばかりに憂き世の人言なれど、かけてもこの方には言ひ出づることなくて止  
 みぬるばかりの、人の御おもむけも、あながちなりし心の引く方に任せず、且は  
 めやすくもて隠しつるぞかしと、哀に戀しうも如何思し出でざらむ。御返も少し  
 こまやかにて、  
 藤壺 此頃はいと、  
 (九) しほたるよことをやくにて松島に年ふるあまもなけきをぞつむ

(一) 多くの人に忍ぶ極内  
 内の隠なれば胸の思の響  
 らし識なし、あまた一歌  
 妻、誓  
 (二) 言ふにも及ばぬ退去  
 の慰問などは省く  
 (三) 小き手紙が中納言の  
 手紙の中に封入しあり  
 (四) 胸の恋嘆の状を中納  
 言の手紙に述べたり  
 (五) 葉上  
 (六) どちらが多く濡れて  
 居るか  
 (七) 夜具などの色合こし  
 ちへ機  
 (八) 源の心、希望通り他  
 に心忙しき屈託もなく胸  
 に葉と共に暮すべきもの  
 を  
 (九) 葉を竊に呼ばんか、  
 (一〇) 夕暮の噂が京より  
 の手紙の中にあるを見て

かんの君の御かへりには、  
 藤壺 浦にたくあまたにつよむ戀なればくゆるけぶりよ行く方ぞなき  
 更なる事どもはえなむ。  
 (三) とばかり、いさよかにて、中納言の君の中にあり。思し歎くさまなど、いみじく  
 言ひたり。哀と思ひ聞え給ふふしくもあれば、うち泣かれ給ひぬ 姫君の御文  
 は、心殊に細やかなりし御返りなれば、あはれなる事多くて、  
 浦人のしほくむ袖にくらべ見よ波路へだつる夜のころもを  
 (七) 物の色し給へる様など、いと清らなり。何事もらうくじう物し給ふを、思ふさ  
 まにて、今は殊に心あわたしう、行きかよづらふ方もなく、しめやかにて在る  
 べきものを、と思すに、いみじう口惜しう、夜晝面影におほえて、堪へ難く思ひ  
 出でられ給へば、なほ忍びてや迎へましと思す。又うち返し、なぞや、斯くうき  
 世に罪をだに失はむと思せば、やがて御精進にて、明暮行ひておはす  
 (一〇) 大殿の若



(一) 源の心、自然逢ふ折  
 (二) 人の親の心は聞に  
 ちねども子を思ふ道に  
 感ひぬる哉、こまらへど  
 も源は子に感はぬのか  
 (三) つい書漏したりと作  
 者の詞  
 (四) 六條御息所へ  
 (五) 伊勢よりも思へば  
 手紙を持参せり  
 (六) 御息所の手紙の  
 (七) 自身が涙を見て居る  
 のかと思はる  
 (八) 御歸京も遠からじと  
 (九) 罪障多き我こそ再會  
 期し難かるべし、生靈に  
 なりし事をいへる歎  
 (一〇) 須磨にて湖れ居る  
 といふ君よ、伊勢に在り  
 て嘆に沈める我身を満み  
 給へ、うきめ一浮布、憂  
 目

君の御事などあるにも、いとど悲しけれど、自ら逢ひ見てむ、たのもしき人々  
 物し給へば、後めたうはあらず、と思しなざるよは、なかくこの道は感はれ給  
 はぬにやあらむ。  
 まことや、騒しかりし程のまぎれに漏してけり。かの伊勢の宮へも御使ありけり、  
 彼よりもふりはへ尋ね参れり。淺からぬ事ども書き給へり。言の葉筆つかひなど  
 (五) は、人より殊になまめかしう、いたり深く見えたり。  
 御息なほ現とは思ひ給へられぬ御住居を承るも、明けぬ夜の心、感ひかとなむ。  
 さりとも年月は隔て給はじと、思ひやり聞えさするにも、罪深き身のみこそ、  
 又聞えさせむことも遙なるべければ、  
 うきめかる伊勢をの海士を思ひやれもしほたるてふ須磨の浦にて  
 (二〇) よろづに思う給へみだるよ世の有様も、猶如何になりはつべきにか。  
 と  
 かり。

(一) どう考へてもつまら  
 ぬものは我身なり、かひ  
 一貝、效  
 (二) 源の心、御息所には  
 惚れて居たのに、生靈一  
 件で恨んだのが自分の失  
 錯で、其から女も持て餘  
 して別れたのである  
 (三) 源が御息所を  
 (四) 御息所の使まで懐か  
 しくして  
 (五) 逗留させて  
 (六) 様子のよめ  
 (七) 源に接近する事多く  
 (八) 御息所への  
 (九) どうせ都を立退く身  
 と知れて居たよ、あの時  
 一所に伊勢へ行つたもの  
 を  
 (一〇) 心細さに其様を事  
 を考へる  
 (一一) 斯かき憂目にあふ  
 よりは、伊勢の旅返つち  
 しと雖も御伴い、ばよか  
 りし

御息 伊勢島や潮干のかたにあさりてもいふかひなきは我身なりけり  
 物を哀と思しけるまよに、打置きく書き給へる、白き唐紙四五枚ばかりをまき  
 續けて、墨つきなど見どころあり。哀に思ひ聞えし人を、一節憂しと思ひ聞えさ  
 せし心あやまりに、この御息所も思ひうんじて別れ給ひにし、と思せば、今にい  
 とほしう辱きものに思ひ聞え給ふ。折からの御文、いとあはれなれば、御使さ  
 へむつまじうて、二三日居ゑさせ給ひて、彼處の物語などせさせて聞しめす。若  
 やかに、氣色ある侍の人なりけり。斯く哀なる御住居なれば、かやうの人も  
 おのづから物遠からで、ほの見奉る御さまかたちを、いみじうめでたしと涙落  
 しけり。御かへり書き給ふ言の葉思ひやるべし。  
 源 かく世を離るべき身と、思ひ給へらましかば、おなじうは慕ひ聞えましもの  
 (九) を、などなむ、徒然に心ほそき儘に、  
 (一〇) 伊勢人のなみの上漕く小船にもうきめはからで乗らましものを  
 (一一)



(一) 斯様全遺村に、くよよくして何時まで住む事やら、なげき一投木、歎すまゝ須磨、住  
 (二) 再會の期し難きこそ言うても盡きぬ悲なり  
 (三) 手紙をやり取りす  
 (四) 源への返事に様々の事を書きたる  
 (五) 源か  
 (六) 源退去の後には誰も保眼する者無ければ  
 (七) 花散方の土塙  
 (八) 條袴すべき由  
 (九) 朧月夜再び朱雀帝に罷せらる  
 (一〇) 朧月夜は、源の退去も朧月夜との會より事起りたる故外聞を取立て  
 (一一) 朧は父右大臣の秘御娘にて  
 (一二) 私微殿  
 (一三) 朧月夜は尙待にて定まりたる帝の御姿にも非が、一通りの公儀を動かさるる身分なればと、ふ事にて無罪になれり  
 (一四) 密通一條故に大監ぎにいられたれども、朧が放されて空内すと、朧は、若し朧の思き所を忘れてよい所丈を思ひて寵愛せらる

あまがつむなけきの中にしほたれていつまでもすまの浦と眺めむ  
 (一) 聞えさせむ事の、いつも侍らぬこそ、盡せぬ心地し侍れ。  
 (二) などぞありける。かやうに、何處にも覺束なからず聞えかはし給ふ。花散里も悲しと思しけるまよに、かき集め給ひける御心々見給ふに、をかしきも、目なれぬ心地して、いづれもうち見給ひつゝ慰め給ひ、かつは物思ひの催しぐさなめり  
 (三) 花散荒れまさる軒のしのぶをながめつゝしゆくも露のかよる袖かな  
 とあるを、けに葎より外の後見もなき様にておはすらむと思しやりて、長雨に築土ところぐ崩れてなど聞き給へば、京の家司の許に仰せつかはして、近き國々の御庄の者など催させて、仕う奉るべき由宣はす  
 (四) かの君は、人わらへにいみじう思しくづほるよを、大臣いとかなしうし給ふ君にて、切に宮にも申し、内裏にも奏し給ひければ、限ある女御御息所にもおはせず、公様の宮仕と思しなせり。又かの憎かりし故こそ、殿しきことも出で來し

(一) 朧が内裏へ  
 (二) 朧を朱雀のあれ程伺寵愛ありし情句の事なれ  
 (三) 朧を偏に引附けて  
 (四) 朱雀の  
 (五) 朧に源を忘れかねたる朧が心中自ら勿體なきことと思ふ  
 (六) 源の居らぬは寂し  
 (七) 源を手厚くせよとありし父帝の遺言  
 (八) 朧が悲自ら堪へず  
 (九) 若し我死なば君は何と思ふ  
 (一〇) 源に別れた程に悲しまぬならんと思へば妬し  
 (一一) 戀ひ死なん後は何せん生ける身の爲こそ君を見まくはりすれとはつまらぬ言草、二世三世を契るこそ本意なれ  
 (一二) 聞き居る朧が涙をこぼせば

か、赦され給ひて、参り給ふべきにつけても、なほ心にしみにしかたのみぞ哀におほえ給ひける。七月になりて参り給ふ。いみじかりし御思ひの名残なれば、人の謗も知し召されず、例のうへにつとさぶらはせ給ひて、萬にうらみ、且はあはれに契らせ給ふ。御さま容貌もいとなまめかしく清らなれど、思ひ出づる事のみ多かる心の中ぞかたじけなき。御遊のついでに、朱雀その人のなきこそいとさうさうしけれ。如何にまして然思ふ人多からむ。何事にも光なき心地するかな」と宣はせて、朱雀院の思し宣はせし御心を違へつるかな。罪得らむかし」とて涙ぐませ給ふに、え念じ給はず。朱雀世の中こそ、あるにつけても味氣なきものなりけれと思ひ知るまよに、久しく世にあらむものとなむ更に思はぬ。さもありなむに、いかどおほさるべき。近き程の別に、思ひおとされむこそねたけれ。生ける世には、けに善からぬ人の言ひ置きけむ」と、いと懐しき御様にて、物をまことにあはれと思し入りて宣はするにつけて、ほろくくとこほれ出づれば、朱雀さりや。



- (一) 我が爲の涙か涙の爲の涙か
- (二) 我に子なきは寂し
- (三) 冷泉を桐登の遺言通り立てたく思へど、もうすれば弘徽殿方て邪魔すべしと思へば
- (四) 朱雀の意向に背きて取計らふ人々
- (五) 須磨の閑居
- (六) 旅人の秋涼しくなりけり開吹き越ゆる須磨の浦風
- (七) 源が
- (八) 我が泣く音に浦波の音の通ひて聞ゆるは、我が戀人の方より来る風に吹かるればならん
- (九) 目さめて
- (一〇) 故郷が思ひ出されて無聊に

いづれに落つるにか」と宣はす。朱雀「今まで御子たちのなきこそさうしくしけれ。春宮を院の宣はせしさまに思へど、よからぬ事ども出でくめれば、心苦しうなど、世を御心の外にまつりごちなし給ふ人々のあるに、若き御心の強き所なき程にて、いとほしと思したる事も多かり。

須磨には、いとど心づくしの秋風に、海は少し遠けれど、行平の中納言の、關吹き越ゆるといひけむ浦波、夜々はけにいと近く聞えて、また無くあはれなるものは、かゝる所の秋なりけり。御前にいと人少にて、うち休みわたれるに、一人目をさまして、枕をそばだてて四方の嵐を聞き給ふに、波たどこともとに立ちくる心地して、涙落つとも覺えぬに、枕浮くばかりになりけり。琴を少し掻き鳴し給へるが、我ながらいと凄う聞ゆれば、弾きさし給ひて、

源「戀ひわびてなく音にまがふ浦波は思ふかたより風や吹くらむ」と語り給へるに、人々おどろきて、めでたう覺ゆるに、忍ばれてあいなう起き居

- (一) 源の心、彼等の心中如何ならん
- (二) 程につけつゝは「親兄弟の上」置きて讀むべし
- (三) 自分の爲に彼等が斯く流浪する上と
- (四) 甚だ氣の毒で
- (五) 自分がよき居る様子を見て彼等が

- (六) 都にばかり居る間は
- (七) 心も詞も及ばぬ
- (八) 無類に
- (九) 輪の名人と呼ばるる
- (一〇) 源の墨がきの畫を彩色させて見た
- (一一) 源の
- (一二) 従者どもが
- (一三) 側去らず
- (一四) 斯る邊鄙の場所故

つゝ、鼻を忍びやかにかみわたす。實にいかに思ふらむ。我身ひとつにより、親兄弟かたとき立ち離れがたく、程につけつゝ思ふらむ家を別れて、かく惑ひあへる、と思すに、いみじくて、いとかく思ひ沈むさまを、心細しと思ふらむと思せば、晝は何くれと戯事うち宣ひまぎらはし、徒然なるまゝに、いろくの紙をつぎつゝ、手習をし給ひ、珍しき様な唐の綾などに、さまざまの繪どもを畫きすさび給へる、屏風の面どもなど、いとめでたく見所あり。人々の語り聞えし海山の有様を、遙に思しやりしを、御目に近くては、けに及ばぬ磯のたよすまひ、になく書き集め給へり。従者「此頃の上手にすめる、千枝常則などを召して、作繪仕う奉らせばや」と、心もとながりあり。懐かしうめでたき御有様に、世の物思ひ忘れて、近う馴れ仕う奉るを嬉しきことにて、四五人ばかりぞつと侍ひける。前栽の花いろく咲き亂れ、おもしろき夕暮に、海見やらるゝ廊に出で給ひて、佇み給ふ御さまの、ゆゑしう清らなるに、所からはましてこの世のものとも見え給







- (一) 和らかなる下着
- (二) 薄紫に明黄の裏つけたる衣を源が着て
- (三) 色直し
- (四) しづかに經を
- (五) 聲世に類なし
- (六) 舟の形容
- (七) 列をなして

はず、白き綾のなよやかなる、紫苑色など奉りて、こまやかなる御直衣、帯しどけなく打亂れ給へる御さまにて、「釋迦牟尼佛弟子」と名のりて、ゆるよかによみ給へる。また世に知らずきこゆ。沖より舟どもの諸ひのよしりて漕ぎ行くなども聞ゆ。ほのかに、たゞ小さき鳥の浮べると見やらるよも、心細けなるに、雁の連ねて鳴く聲、楫の音にまがへるを、うちながめ給ひて、御涙のこぼるよをかき拂ひ給へる御手つき、黒木の御數珠に榮え給へるは、故郷の女戀しき人々のこよち、みな慰みにけり。

- (八) 我が戀上人の仲間かして
- (九) 雁は昔の友に非ざれども、雁の音を聞けば懐舊の情に堪へぬ
- (一〇) 惟光
- (一一) 心がらて旅にさまよひて鳴く雁を餘所事に思ひしが、今身の上と思ひ知れり

頭はつかりはこひしき人のつらなれや旅のそら飛ぶ聲のかなしきと宣へば、良濟(八)かきつらねむかしのことぞ思ほゆる雁はそのよの友ならねども(九)民部大輔(一〇)心からとこ世を捨ててなく雁をくもの餘所にもおもひけるかな(一一)

- (二) 伊豫介の弟息子
- (三) 我は旅雁の如き身なれど友ある故に愁を慰められて過す
- (四) 連にはぐれては居られたものに非ず
- (五) 父伊豫介が常陸介に轉任せしにも同伴せず
- (六) 腹では色々の愁あるべけれども、わざと得意げに平氣を装ひ居る
- (七) 頭が
- (八) 方々の女どもが
- (九) 白氏文集「三五夜中新月色、二千里外古人心」
- (一〇) 「九重に霧や隔つる雲の上の月を遙に思ひやる哉」柳の卷にあり
- (一一) 侍臣が
- (一二) にて戀人に逢ふ聲は遠けれども、月を眺め留る間は心慰めらるる
- (一三) 藤原が「霧や隔つる」の歌よみし當夜
- (一四) 朱雀
- (一五) 桐壺

前の右近丞

「常世出でて旅の空なるかりがねも列におくれぬほどぞなぐさむ友まどはしては如何に侍らまし」といふ。親の常陸になりて下りしにも誘はれで、参れるなりけり。したには思ひ碎くべかめれど、ほこりかにもてなして、つれなきさまにしありく。(五)

月のいと花やかにさし出でたるに、今宵は十五夜なりけりと思し出でて、殿上の御遊戀しく、ところぐ眺め給ふらむかしと、思ひやり給ふにつけても、月の顔のみまもられ給ふ。「二千里外古人心」と誦じ給へる。例の涙もとどめられず、入道の宮の、「霧や隔つる」と宣はせしほど、いはむ方なく戀しく、折々の事思ひ出で給ふに、よよと泣かれ給ふ。「夜更け侍りぬ」と聞ゆれど、なほ入り給はず。

見る程ぞしばしなぐさむめぐりあはむ月の都ははるかなれどもその夜、上のいとなつかしう昔物語などし給ひし御様の、院に似奉り給へり(二二)(二三)(二四)(二五)



(一) 菅公の詩の句  
 (二) 朱雀より賜はりし事ありし也  
 (三) 御衣を御にして昔を思へば、つらくも又懐しくもありて悲に堪へぬ  
 (四) 大宰大貳船中より源氏に消息す  
 (五) 大宰大貳、花散里等に見えたる五節のや  
 (六) 筑前より上京  
 (七) 一族多く  
 (八) 無暗に淨氣なる  
 (九) 暫て源に逢ひし夕  
 (一〇) 素通りしてしまふと  
 (一一) 太宰帥缺員の時は大貳が帥の事を行ふ故、大貳を帥ともいふ也とぞ  
 (一二) 取敢ず御目に懸りて御話も承りたしと思ひしに  
 (一三) 素通りする

しも、戀しく思出で聞え給ひて、「恩賜の御衣は今こよにあり」と誦じつよ入り給ひぬ。御衣はまことに身放たず、傍に置き給へり。  
 憂しとのみひとへに物はおもほえてひだりみぎにもぬると袖かな  
 その頃大貳は上りける。嚴しう類ひろく、女がちにて所せかりければ、北の方  
 は船にてのほる。浦つたひに遣遙しつよくるに、外より面白きわたりなれば心と  
 まるに、大將斯くておはすと聞けば、あいなう好いたる若き女たちは、船の内さ  
 へ恥かしう、心懸想せらる。まして五節の君は、綱手ひき過ぐるも口をしきに、琴  
 の聲風につきて遙に聞ゆるに、所さま人の御ほど、物の音の心ほそさ取り集め、  
 心あるかぎり皆泣きにけり。帥御消息きこえたり。  
 大貳いと遙なるほどより罷り上りては、まづいつしかと侍ひて都の御物語も、と  
 こそ思ひ給へ侍りつれ、思の外に斯くておはしましける御宿を、罷り過ぎ侍  
 る、辱く悲しうも侍るかな。あひ知りて侍る人々、然るべきこれかれまで

(一) 御伺ひ申さぬは残念  
 (二) やがて又わざ／＼と上すべし  
 (三) 筑前守は源が目をかけてマリス人なれば  
 (四) 筑前守の心  
 (五) 他人の手前もあれば他聞を憚りて  
 (六) 大貳への返事も  
 (七) 源の御様子  
 (八) 便をもとめて源に  
 (九) 君が琴の音に心ひかれて暫て去るに思ひず踏踏する我心を君は知り給はし  
 (一〇) 立去るに思ひぬなちば寄らずに行く筈はな

來向ひてあまた侍れば、所狭きを思ひ給へ憚り侍る事ども侍りて、え侍らはぬこと。殊更に参り侍らむ。  
 など聞えたり。子の筑前守ぞ参れる。この殿の、藏人になし願み給ひし人なれば、  
 いと悲し、いみじと思へども、又見る人々のあれば、聞をおもひて、暫しもえ  
 立ちとどまらず、酒都離れて後、昔親しかりし人々、あひ見る事難うのみなりに  
 たるに、かくわざと立ちより物したる事と宣ふ。御返もさやうになむ。守泣く泣  
 くかへりて、おはする御有様語るに、帥よりはじめ、迎の人々、まがくしう泣  
 き満ちたり。五節はとかくして聞えたり。  
 五節琴の音にひきとめらるゝ綱手なはたゆたふこよる君知るらめや  
 すき／＼しさも、人な咎めそ。  
 と聞えたり。ほよゑみて見給ふ、いと恥かしけなり。  
 源心ありてひくての綱のためはばち過ぎましや須磨の浦なみ



(一) 我も斯る處に源師の生活をせんとは思はざりし、思ひきや都の別荘へて登の繩たぎ進りせんとは

(二) 昔公の左遷の途大明星の驛にて源長に「驛長勿驚」の句を賜ひし故事

(三) 此歌を賜りたる五節は、此處比處に逗留もせん程に感動したり

(四) 源の人々源氏を戀ふ

(五) 藤壺

(六) 實は源の子なる事を

(七) 源の

(八) 退去の當座は

(九) 源が訪問客と詩を題

(一〇) 源が

(一一) 弘徽殿

(一二) 弘徽殿の罵る詞、帝の咎を受けたる人は

(一三) 飲食物を悉に取る

(一四) 秦の趙高が權威に誇りて、鹿をさしてわざと馬なりといひし故事

(一五) 源に詔ふ、此處の文聞き難し、誤あるべし

(一六) 面白からぬ批難

いさりせむとは思はざりしはや。  
 驛の長に句詩とらする人もありけるを、まして落ちとまりぬべくなむ覺えける。  
 都には、月日過ぐるまよに、帝をはじめ奉りて、戀ひ聞ゆる折節多かり。春宮は、まして常に思し出でつよ、忍びて泣き給ふを、見奉る御乳母、まして命婦の君は、いみじう哀に見奉る。入道の宮は、春宮の御事をゆしうのみ思しよに、大將も斯くさすらひ給ひぬるを、いみじう思し歎かる。御兄弟の御子たち、むつまじう聞え給ひし上達部など、初つかたは訪ひ聞え給ふなどありき。哀なる文を作りかはし、それにつけても世の中のみめでられ給へば、後の宮聞召して、いみじく宣ひけり。弘徽殿の勸事なる人は、心にまかせて此世のあちはひをだに知る事難うこそあなれ。面白き家居して、世の中を誹りもどきて、かの鹿を馬と言ひけむ人の、僻めるやうに追従するなど、あしき事ども聞えければ、煩はしと





(一) 紫上  
 (二) 源に仕へし中将中務等  
 (三) 紫方に移りし初は、紫上を其程の人でもあるまいと思ひしが  
 (四) 暇を取る侍女なし  
 (五) 身分よき侍女には紫が顔を見せる  
 (六) 多くの女の中で紫を源が特に愛するもの  
 (七) 須磨の寂しき生活  
 (八) 紫を呼ばずには居ぬ様に源が  
 (九) 紫まで伴ひ来る事は出来ぬ、打具しては下とを將したる身  
 (一〇) 貴人の身として斯る下賤の者に立交るを自ら勿體なく思ふ

て、絶えて消息聞え給ふ人なし、二條院の姫君は、程經るまよに思し慰むをりなし。東の對に侍ひし人々も、皆渡り参りしはじめは、なかさしもあらむと思ひしかど、見奉り馴るまよに懐かしうをかしき御有様、まめやかなる御心ばへも、思ひやり深う哀なれば、まかで散るもなし。なべてならぬ際の人々には、ほの見えなどし給ふ。そこらの中に勝れたる御心ざしも、理なりけりと見奉る。かの須磨には、久しうなるまよに、え念じ過すまじう覺え給へど、我身だにあさましき宿世と覺ゆる住居に、いかでかは打具しては、つきなからむさまを思ひ返し給ふ。所につけては萬の事さまかはり、見給へ知らぬ下人のうへをも、見給ひならはぬ御心地に、めざましうかたじけなう、自らおほさる。煙のいと近く時々立來るを、これや海士の鹽焼くならむと思しわたるは、おはします後の山に、柴といふものふすぶるなりけり。珍らかにて、  
 山がつのいほりに焚けるしばくもこととひこなむ戀ふる里人

(一) 惟光  
 (二) 良清惟光歌や笛をやめて感涙に咽べり  
 (三) 漢の時王昭君を胡國に嫁せしめたる故事  
 (四) 王昭君の夢は我にも増したりしならん  
 (五) 王昭君の如く遠國に遣りたらば如何ならん  
 (六) 其標を場合が有るべきものと思はれて  
 (七) 胡國胡角一聲霜聲  
 (八) 漢宮萬里月前關  
 (九) 王昭君を詠める詩の句  
 (一〇) 天迢迢玄臺雲將鬢  
 (一一) 唯是西行不左遷  
 (一二) 管公の詩句  
 (一三) 隻鷗を離れたる我は此末何處をまごつくらん  
 (一四) 行き處の定りたる月の見さ目も恥かし  
 (一五) 千鳥の友阿比文すを聞きて力強く感ずる也

冬になりて雪ふり荒れたる頃、空の氣色もことに凄く眺め給ひて、琴を弾きすさび給ひて、良清に歌うたはせ、大輔横笛吹きて遊び給ふ。心とどめて哀なる手など弾き給へるに、ことものの聲どもはやめて、涙をのびあへり。昔胡の國に遣しけむ女を思しやりて、ましていかばかりなりけむ、この世にわが思ひ聞ゆる人などをさやうに放ちやりたらむこと、など思ふも、あらむ事のやうにゆとしくて、「霜の後の夢」と誦じ給ふ。月いとあかき入りて、はかなき旅のおまし所は、奥まで限なし。床の上に夜深き空も見ゆ。入方の月すごく見ゆるに、「たゞこれ西に行くなり」と、ひとりごち給ひて、  
 いづかたの雲路にわれも迷ひなむ月の見らむこともはづかし  
 とひとりごち給ひて、例のまどろまれぬ曉の空に、千鳥いとあはれに鳴く。  
 友千鳥もろごゑに鳴くあかつきはひとりねざめの床もたのものし  
 まだ起きたる人もなければ、かへすくひとりごちて臥し給へり 夜深く御手水



(一) 従者等の心に  
 (二) 思はれるので  
 (三) 従者等が一すても私宅に歸らぬ  
 (四) 源氏に近き處なれば  
 (五) 若紫の養、源氏が北山に行きし處にて良清が噂したる明石入道の領、明石上と名づく  
 (六) 良清への手紙、申上げたき事あり  
 (七) とても承知せぬその爲にたまじ懸り合ひてす  
 (八) 入道は非常な氣位高き人、土地の人は國守をのみ尋び居るを然様は思はず、播磨守の子の良清をも相手にせず、來り居しに、源氏須磨に來り居れりと聞きて  
 (九) 朝廷に罪を得て  
 (一〇) 吾朝の源氏に嫁すべき宿縁ある故斯かる不慮の事も起れる也  
 (一一) 源氏に推を  
 (一二) 見つともない  
 (一三) 臘月夜を迄犯して

まゐりて、御念誦などし給ふも、珍らしき事のやうに、めでたくのみおほえければ、え見奉り捨てず、家にあからさまにもえ出でざりけり。  
 明石の浦はたゞ這ひ渡る程なれば、良清の朝臣、かの入道の女を思ひ出でて、文など遣りけれど返事もせず。父の入道ぞ、聞ゆべきことなむ。白地に對面もがな」と言ひけれど、うけひかざらむものゆゑ、行きかゝりて、空しくかへらむ後手もをこなるべし、と屈しいたうて往かず。世に知らず心だかう思へるに、國の内は、守のゆかりのみこそは、畏きことにすめれど、僻める心は更にさも思はで、年月を經けるに、この君かくておはすと聞きて、母君に語らふやう、入道桐壺の更衣の御腹の、源氏の光君こそ、公の御かしこまりにて、須磨の浦にもおし給ふなれ。あこの宿世にて、覺えぬ事のあるなり。いかでかよる序に、この君に奉らむ」といふ。母、「あなかたはや、京の人の語るを聞けば、やむことなき御妻ども、いと多く持給ひて、その餘に、忍びく、帝の御妻をさへ過ち給ひて、斯くも騒がれ給

(一) 川舎娘  
 (二) 貴様に分るものか  
 (三) 源氏における交度をせよ  
 (四) 序を以て源を招待せん  
 (五) 善い氣になつて言ふ  
 (六) 領を入道が  
 (七) さきが貴人でも、初めて領をやるに何も罪人を相手にする事はない  
 (八) それでも源の氣に入りにすればよけれど、氣に入らざるはなし  
 (九) 怪我にも領を源に杯とはけしからぬ話也  
 (一〇) 入道がぶつゝいふ  
 (一一) 一體源を如何なる人と思ふぞ  
 (一二) 源の亡き母は  
 (一三) 勝れた領といふ評判取りて  
 (一四) 桐壺帝  
 (一五) 源が生存せるは  
 (一六) 氣位高く持つべき  
 (一七) 源が領を棄つる事はあるまじ

ふなる人は、まさにかく怪しき山賤を、心とどめ給ひてむや」といふ。腹立ちて、入道「得知り給はじ。思ふ心ことなり。さる心をし給へ。序して此處にもおはしませむ」と、心をやりていふも、頑しく見ゆ。まばゆきまでしつらひかしづきけり。母君、「なごて、めでたくとも、物のはじめに、罪にあたりて流されおはしたらむ人をしも思ひかけむ。さても心をとどめ給ふべくはこそあらめ。戯れにてもあるまじき事なり」といふを、いといたくつぶやく。入道罪にあたることは、唐土にも我が朝にも、斯く世に勝れ、何事にも人に殊になりぬる人の、必ずあることなり。いかに物し給ふ君ぞ。故母御息所は、己が叔父に物し給ひし、按察大納言の御女なり。いとかうさくなる名をとりて、宮仕に出し給へりしに、國王勝れて時めかし給ふ事ならび無かりける程に、人のそねみ多くて亡せ給ひにしかと、この君のとまり給へる、いとめでたし。斯く、女は心を高くつかふべきものなり。己かよる田舎人なりとて、思し捨てじ」など言ひ居たり。この女勝れたる容貌ならねど、な



- (一)上品にて物のわかつて居る點は
- (二)明石上が巳の身分卑きを辨へ知りて
- (三)明石上の心
- (四)身分相應の夫を持つ事はいやなり
- (五)父母に死なれたら
- (六)極めて手厚く
- (七)攝津の住吉神社
- (八)御利益を人達が當に當にして居たり
- 頭中將源氏の譚居を訪ふ

- (九)源の心
- (一〇)花宴巻にありし事
- (一一)桐壺
- (一二)朱雀

つかしうあてはかに、心ばせある様などぞ、けにやむことなき人に劣るまじかりける。身の有様を、口惜しきものに思ひ知りて、高き人は我を何の數にもおほさじ、程につけたる世をば更に見じ、命長くて、思ふ人々に後れなば、尼にもなりなむ、海の底にも入りなむ、などぞ思ひける。父君、所せく思ひかしづきて、年に二度住吉に詣でさせけり。神の御しるしをぞ、人知れずたのみ思ひける。須磨には、年かへりて日長く徒然なるに、植ゑし若木の櫻ほのかに咲きそめて空の氣色うらよかなるに、よろづの事思し出でられて、うち泣き給ふ折々おほかり、二月廿日あまり、いに、年、京を別れし時、心苦しかりし人々の御有様などいとこひしく、南殿の櫻は盛になりぬらむ、一年の花の宴に、院の御けしき、内裏の上のいと清らになまめいて、我がつくれる句を誦じ給ひしも、思ひ出できえ給ふ。

源いつとなく大宮人のこひしきに櫻かざしよ今日も來にけり

- (一)頭中將
- (二)參議
- (三)世間人望あれど
- (四)源を
- (五)源を訪ひたる事が問題になりて答められても仕方がない
- (六)須磨へ
- (七)源も中將も齊しく
- (八)頭中將の感
- (九)疎末ながら
- (一〇)薄紅に黄を帯びたる
- (一一)石はじきの遊
- (一二)田舎細工
- (一三)數珠などあるによりて佛の勸怠らぬ様子可知る也
- (一四)さくめたる食物杯
- (一五)貝類
- (一六)苦しき身の位言

いと徒然なるに、大殿の三位中將は、今は宰相になりて、人柄のいとよければ時世のおほえ重くて物し給へど、世の中いと哀にあぢきなく、物の折ごとに戀しく覺え給へば、事のきこえありて罪にあたるとも如何はせむ、と思しなりて、にまうで給ふ。うち見るより、珍らしく嬉しきにも、ひとつ涙ぞこほれける。ひ給へるさま、言はむ方なく唐めきたり、所のさま繪に畫きたらむ様なるに、竹編める垣しわたして、石の階、松の柱、疎かなるものから、珍らかにをかし、山賤めきて、ゆるし色の黄がちなるに、青鈍の狩衣指貫うちやつれて、殊更に田舎びてもてなし給へるしも、いみじう見るに笑まれて清らなり。取り遣ひ給へる調度も、かりそめにしなして、御座所もあらはに見入れらる。碁雙六の盤、調度、彈棊の具など、田舎わざにしなして、念珠の具、行ひ勤め給ひけりと見えたり。物參れるなど、殊更所につけ、興ありてしなしたり。海士ども漁して、かひつ物持て參れるを、召し出でて御覽す。浦に年經る様など問はせ給ふに、さまんく安け



一 取りとめなく口をたたく彼等と我と同じく苦は免れぬ哉と  
 二 賈ひたる蟹どもが  
 三 向ふに見ゆる倉の如きものの中の  
 四 備馬撃「飛鳥井に宿りはすべしかげもよし御もひも寒しみまくさもし」  
 五 夕  
 六 頭中將が  
 七 源が  
 八 此所「書き記さず」  
 九 詩  
 一〇 頭中將が捨鉢なる覺悟はしても、矢張世間の聞えを懼りて  
 一一 さまじ訪ひ来て却て恐の種  
 一二 酒  
 一三 白樂天元嶺に別るる詩の句「醉愁瀧淚春盃裏、吟苦支、願願獨前」  
 一四 只當時逢ひたる別

なき身のうれへを申す。そこはかとなくさへづるも、心の行方は同じ事なるかなと、哀に見給ふ。御衣どもかづけさせ給ふを、生けるかひありと思へり。御馬ども近う立てて、見やりなる倉か何ぞなる、稻ども取り出でて飼ふなど、めづらしう見給ふ。「あすか井」少し謠ひて、月頃の御物語、泣きみ笑ひみ、若君の、何とも世を思さでものし給ふ悲しさを、大臣の旦暮につけて思し歎く、など語り給ふに、堪へ難く思したり。盡きすべくもあらねば、なかく片端もえまねばず。終夜まどろまず 文作り明し給ふ。然言ひながらも、物の聞えをつよみて、急ぎかへり給ふ。いとなかくなり 御土器まゐりて、「醉の悲みの涙をよぐ春の盃のうち」と、諸聲に誦じ給ふ 御供の人ども皆涙をながす。己がじし、僅なる別惜むべかめり。朝ほらけの空に、雁連れてわたる。あるじの君、  
 頭ふる里をいづれの春か行きて見むうらやましきは歸るかりがね  
 宰相更に立ち出でむ心地せて。

一 厭々ながら此浦を離れ行く我は、悲に心亂れて都に歸る道も分らぬ  
 二 頭中將が携へ來れる土産物  
 三 罪人よりの贈物たるは思々しく思はんが  
 四 文選「胡馬嘶北風、越鳥依南枝」故郷を忘れぬ意  
 五 名笛を贈りたる位の事にて他に人目につく様の事はせず、此笛は源より贈れるか頭中將より贈れるか曖昧なれど頭中將よりなるべし  
 六 此處に何時までも遙はれぬといふ事はあるまじ  
 七 君も知れや我が白を  
 八 歸られぬ事はあらじと心強くは思へど  
 九 古人の例を見ても斯くなりては再び世に立つ事難き例なれば

頭中將あかなくに雁の常世を立ちわかれ花のみやこに道やまどはむさるべき都のつとなど、由ある様にてあり。主人の君、かく忝き御送にとて、  
 黑駒奉り給ふ。画のよしう思されぬべけれど、風にあたりては、嘶えぬべければ「など申し給ふ。世に有難けなる御馬のさまなり。「形見に忍び給へ」とて、いみじき笛の名ありけるなどばかり、人咎めつべきことは、互にえし給はず 日やうやうさしあがりて、心あわたしければ、願のみしつと出で給ふを、見送り給ふけしき、いとなかくなり。頭中將「いつまた對面給はらむとすらむ。さりともかくてやは」と申し給ふに、あるじ、  
 「雲ちかく飛びかふ鶴もそらに見よわれは春日のくもりなき身ぞ  
 かつは頼まれながら、斯くなりぬる人は、昔のかしこき人だに、はかなくしう世に又まじらふ事難く侍りければ、何か、都のさかひをまた見むとなむ思ひ侍らぬ」  
 など宣ふ。宰相



(一) 我は君なくして便なき  
都に君を戀ひつゝ閑泣き  
秘す  
(二) 思ふとていとこそ  
人になれざらめ然ならひ  
てぞ見ねば戀しき「此の  
とこそ」をあやまりて引  
きたる歟  
三月上巳源氏海に鼓  
す  
(三) 三月上巳の節  
(四) 源の如き思ある身  
(五) 衝立の如き物  
(六) 折々他所より此處に  
頭ひ来る  
七 我も流され人なれば  
我身を人形に比べられて  
(八) 見も知らざりし此海  
邊に流れ來たる我が戀は  
多端なり、ひとかた「一  
方、人形  
(九) 晴々しき場所に出て  
一入言はん方なく優美に  
(一〇) 果も無きに  
(一一) 我はこれといふ罪  
もなき身なれば

「たづかなき雲井にひとりねをぞなく翹ならべし友を戀ひつゝ  
(一) かつかなき雲井にひとりねをぞなく翹ならべし友を戀ひつゝ  
かたじけなく馴れ聞え侍りて、いとしもと悔しう思ひ給へらるゝ折多くなど、し  
(二) めやかにあらで歸り給ひぬる名残、いとぞ悲しうながめ暮し給ふ。  
三月の朔日に出で來たる巳の日、「今日なむ、かく思ふことある人は、御禊し給ふ  
べき」と、なまさかしき人の聞ゆれば、海面もゆかしくて出で給ふ。いと疎に、軟  
障ばかりを引き廻らして、この國に通ひける陰陽師召して、祓せさせ給ふ。船に  
ことごとくしき人形載せて流すを見給ふにも、よそへられて、  
(三) 源 知らざりし大海の原に流れ來てひとかたにやはものは悲しき  
(四) とて居給へるさま、然る晴に出でて、言ふよしなく見え給ふ。海の面はうらく  
(五) と風きわたりに、行方も知らぬに、來しかた行くさき思しつゞけられて、  
源 八百よろづ神もあはれと思ふらむ犯せる罪のそれとなければ  
(六) と宣ふに、俄に風吹き出でて、空もかき昏れぬ。御祓もしはてず、立ち騒ぎたり。  
(七)





- (一) 伊雨をいふ
- (二) 雨降ちんとは思ひ懸けざりしに
- (三) 白浪の満ちたる形容
- (四) 迎るゝ歸り着きて
- (五) 人々の詞、こんな目には逢つた事がない
- (六) 前から催して吹くものぢや
- (七) 雨の當る所は物を突き通しそふ勢で
- (八) 源氏
- (九) 海に留れかねぬ
- (一〇) つなみ
- (一一) 形の随に見えぬ
- (一二) 此宮は内裏の意なるを源は龍宮の意に解釋せる也
- (一三) 源が夢に見て目さめて

眩笠雨とか降りきて、いとあわたどしければ、皆歸り給はむとするに、笠も取りあへず。さる心もなきに、よろづ吹きちらし、またなき風なり。波いと厳しう立ち來て、人々の足をそらなり。海の面は袈を張りたらむ様に光満ちて、雷鳴りひらめく。落ちかよる心地して、辛うじてたどりきて、「斯かる目は見ずもあるかな。風などは吹けど、氣色づきてこそあれ。あさましう珍らかなり」と感ふに、なほ止まず鳴りみちて、雨の脚あたる所通りぬべく、はらめき落つ。斯くて世は盡きぬるにやと、心ほそく思ひ感ふに、君はのどやかに經うち誦じておはす。暮れぬれば雷少し鳴り止みて、風ぞ夜もふく。多く立てつる願の力なるべし。「今しばし斯くだにあらば、浪に引かれて入りぬべかりけり。高潮といふものになむ、とりあへず人損はるとは聞けど、いと斯かることは、まだ知らず」といひあへり。曉がた皆うち休みたり。君もいさゝか寝入り給へれば、その様とも見えぬ人來て、怪訝など、宮より召しあるには夢り給はぬ」とて、たどり歩くと見るに、お

- (一) 四は
- (二) 物に感動する質で
- (三) 我に執心かけたるなちん
- (四) うるさく

どろきて、さは海の中の龍王の、いといたう物めでするものにて、見入れたるなりけり、と思すに、いとものむつかしう、この住居堪へがたく思しなりぬ。



明石

〇 風雨歇まず。紫上の使須磨に来る。 〇 立願。源氏の寓居に移置  
 〇 源氏夢に桐壺帝の諭を蒙る。 〇 明石入道の迎への船。迎へられ  
 て源氏明石に移る。 〇 明石入道の濱の館。 〇 源氏より船の方々へ  
 文を遣はる。 〇 入道娘の事を言出し得ずして氣をまむ。源氏漸く入道  
 に親しむ。 〇 月夜入道源氏の前に夢を語りて氣をまむ。源氏終に御を  
 源氏に奉らん事を約す。 〇 源氏と明石上(入道の館)と文の贈答。源氏  
 上を慰ふ。 〇 朱雀帝の夢。眼病。二條太政大臣薨去。帝源氏を召  
 還さんとす。 〇 明石上の自軍。源氏明石上の岡邊の館を訪ふ。 〇  
 源氏明石上の事を紫上に報ず。紫上を憐りて明石上を訪ふこと紫から  
 ず。明石入試父子の痛心。 〇 源氏召還の宣旨。源氏入道等の悲喜。  
 明石上懐胎。 〇 源氏明石上に別を惜む。 〇 上京の首途。入道の斡旋。  
 明石上の離愁。 〇 著京。繼大納言に任ぜらる。 〇 参内。冷泉及藤壺を訪ふ。  
 明石への書簡。

〇 風雨歇まず  
 (一) 心丈夫に思つても居  
 ちれず  
 (二) 源の心  
 (三) 天變あればとて

なほ雨風やます、雷鳴しづまらで日頃になりぬ。いと物わびしき事数知らず、來し  
 かた行くさき悲しき御有様に、心強うしもえ思しなさず、如何にせまし、斯かり

明石

五〇三



(一) 關京を公許されてて  
なれば恥の上塗ならん  
(二) 隠れようかしら  
(三) 波風に怕れて隠れや  
り杯と

(四) 初め見たる如き物  
(五) つき隔よ

(六) 此儘身の破滅になる  
のかしらと「はふらかし  
つる」は「はふらかしは  
つる」の誤なるべし

(七) 法外に

(八) 使が濡れくさりて來  
れり

(九) 途中で通りすがひて

(一〇) 使者の男をいよ

(一一) 體なく

(一二) 自分のいぐぢなく  
なりし心

(一三) 紫の

とて都に歸らむことも、まだ世に許されもなくては、人笑はれなる事こそまさら  
め、猶これより深き山をもとめてや跡絶えなまし、とおほすにも、波風に騒がれ  
てな、人の言ひ傳へむこと、後の世までも、いと輕々しき名をや流しはてむ  
と思し亂る。御夢にも、たど同じ様なる物のみ來つゝ、まつはし聞ゆと見給ふ。雲  
間もなく明け暮るゝ日數にそへて、京の方もいと覺束なく、斯くながら身をは  
ふらかしつるにやと、心ほそう思せど、頭さし出づべくもあらぬ空の亂に、出で  
立ちまゐる人もなし。二條院よりぞ、あながちにあやしき姿にて、そほち參れる。  
道かひにてだに、人か何ぞとだに御覽じわくべくもあらず、まづ追ひ拂ひつべき  
賤夫の、哀に睦まじう思さるゝも、我ながらかたじけなく、屈しにける心の程思  
ひ知らる。御文には、  
紫あさましく小歌なき頃の氣色に、いとと空さへ閉づる心地して、ながめやる  
方なくなむ。





(一) 涙は海の水の量も増る位に、涙の熱をさよ

(二) 玉の誓

(三) 仁王經を讀誦して七難即滅七福即生を祈る法會

(四) 往來絶えて

(五) 氣にかかりて

(六) 恋

(七) つらそうな容貌を見

源氏の寓居に落置

うら風やいかに吹くらむ思ひやる袖うちぬらし波間なき頃  
哀に悲しきことも書き集め給へり。ひき開くるよりいとど汀まさりぬべく、  
かきくらす心地し給ふ。使者「京にもこの雨風いと怪しき物のさとしなりとて、  
王會など行はるべしとなむ聞え侍りし。内裏に参り給ふ上達部などもすべて道  
とちて、政も絶えてなむ侍る」など、はかなくしうもあらず、頑しう語りなせ  
ど、京の方のことと思せば、いぶかしうて、御前に召し出でて問はせ給ふ。使者た  
だ例の雨の小歌なく降りて、風も時々吹き出でつよ、日頃になり侍るを、例なら  
ぬことに驚き侍るなり。いとかく地の底通るばかりの氷降り、雷のしづまらぬ  
ことは侍らざりき」など、いみじき様に驚き懼ちて居る顔のいと辛きにも、心細さ  
まさりける。

斯くしつと世は盡きぬべきにや、と思さるゝに、その又の日の曉より風いみじ  
う吹き、潮高う満ちて、浪の音荒きこと、巖も山も残るまじき氣色なり。雷の鳴

(一) 皆分別を失へり

(二) 従者等の言

(三) 源氏

(四) 我は其程の罪を犯したる事なければ、此處に命を失ふ筈なしと

(五) 住吉に鎮座して國土を守り給ふ神ならば

(六) 従者等自分の命の惜きは勿論なれども、其は姑く措きて

(七) 源が貴き身を以て

(八) 例なき死様をすべきを悲みて

(九) 奮發して

(一〇) 正氣のある人は

(一一) 慮きて

(一二) 源の身の上をい、以下従者等の祈りの詞

(一三) 源の慈悲

(一四) 大層なる

(一五) 留れ

(一六) 判断し給へ

り閃くさま、更にはむ方なくて、落ちかよりぬと覺ゆるに、ある限さかしき人  
なし。「我はいかなる罪を犯して、かく悲しき目を見るらむ。父母にもあひ見ず、悲  
しき妻子の顔をも見て、死ぬべきことと歎く。君は御心をしづめて、何ばかりの  
過失にてか此の渚に命をば極めむと、強う思しなせど、いと物騒がしければ、いろ  
いろの幣帛捧げさせ給ひて、源住吉の神近き境をしづめ守り給へ、まことに跡を  
垂れ給ふ神ならば助け給へ」と、多くの大願を立て給ふ。おのく自らの命をばさ  
るものにて、かよる御身の、またなき例に沈み給ひぬべきことの、いみじう悲し  
きに、心を起して、少し物覺ゆるかぎりには、身に代へてこの御身一つを救ひ奉  
らむととよみて、諸聲に佛神を念じ奉る。「帝王の深き宮に養はれ給ひて、いろ  
いろの樂に驕り給ひしかど、深き御うつくしみ、大八洲に普く沈める輩を  
こそ多く浮べ給ひしか。今何の報にか、こよら横ざまなる波風にはおほほれ給は  
む。天地ことわり給へ、罪なくて罪にあたり、官位を取られ、家を離れ、雲を



(一) 現世にて犯せる罪の報か

(二) 源の居間に續きたる

(三) 居合せたる人皆肝を消して悉然たり

(四) 炊事場

(五) 源を

(六) 上下の人々差別なく

(七) 亂りがはしく

(八) 源の居處

(九) 鬼に角夜明けてからの事にせんとてぐづして居るに

去りて、且暮安き空なく歎き給ふに、かく悲しきめをさへ見、命盡きなむとするは、前の世の報か、この世の犯か、神佛明にましまさば、このうれへ息め給へ」と、御社の方に向きて、さまざまの願を立て、又海の中の龍王、萬の神たちに願たてさせ給ふに、いよく鳴り轟きて、おはしますに續きたる廊に落ちかよりぬ。炎燃えあがりて、廊は焼けぬ。心魂なくて、ある限感ふ。後の方なる大炊殿と申しき屋に移し奉りて、上下となく立ち込みて、いとらうがはしく泣きとよむ聲、雷にも劣らず。空は墨をすりたる様にて、日も暮れにけり。やうく風なほり、雨の脚しめり、星の光も見ゆるに、この御座所のいと珍らなる方も、疎ましげに、そこの人の踏み轟かし惑へるに、御簾なども皆吹き散らしてけり。夜をあかしてこそはとたどりあへるに、君は御念誦し給ひて、思しめぐらすに、いと心あわたし。月さし出でて、潮の近く満ち來けるあともあらは

(一) 此近所には

(二) 此天變の原因を辨へたる者なし

(三) 陸へ上りて

(四) 聳人等の

(五) 住吉明神の助なくば神迹に流されしならん

(六) 探みに覆みて吹ける

(七) 何といふても

(八) 源を置くは勿體なき粗末なる居處の事なれば、一寸寄り懸りて眼りたるに

(九) 在世の時の通りなる

(一〇) 居るや

に、名残なほ寄せかへる浪荒きを、柴の戸押し開けて詠めおはします。近き世界に、物の心を知り、來し方行くさきの事うち覺え、とやかくやはかくしう悟る人もなし。あやしき海士どもなどの、貴き人おはする所にて、集り参りて、聞きもし知り給はぬ事どもを囀りあへるも、いと珍かなれど、え追ひも拂はず。此の風今暫し歇まざらましかば、潮のほりて残る所なからまし。神の助け疎ならざりけり」といふを聞き給ふも、いと心細しといへばおろかなり。

源海にます神のたすけにかよらずば潮の八百會にさすらへなまし

終日にいりもみつる風のさわぎに、さこそいへいたう困じ給ひにければ、心にもあらずうちまどろみ給ふ。かたじけなき御座所なれば、たど寄り居給へるに、故院のたどおはしましと様ながら立ち給ひて、桐壺など斯くあやしき所には物するぞ」とて、御手を取りて引き立て給ふ。桐壺住吉の神の導き給ふまよに、はや船出して、この浦を去りね」と宣はす。いと嬉しくて、源、畏き御影に別れ奉りに



(一)今の厄難は  
 (二)死後其罪を償ふ爲に忙しくて後替の事はかまはざりしが  
 (三)汝が

(四)源が

(五)桐壺の佛残れる心地して

(六)目先にもちつきて

(七)天を翔りて来れると

(八)比天變が却て仕合であつたと

(九)あつけなき

しこなた、様々悲しき事のみ多く侍れば、今はこの渚に身をや捨て侍りなまし」と聞え給へば、桐壺いとあるまじき事。これは唯いさよかなるものの報なり。我は、位にありし時過つ事なかりしかど、おのづから犯ありければ、その罪を終ふる程いとまなくて、この世を顧みざりつれど、いみじき憂に沈むを見るに、堪へ難くて、海に入り、渚にのほり、いたく困じにたれど、かゝる序に内裏に奏すべき事あるによりなむ、急ぎ上りぬる」とて、立去り給ひぬ。飽かず悲しくて、御供に参りなむと泣き入り給ひて、見上げ給へれば、人もなくて、月の顔のみきらきらとして、夢の心地もせず、御けはひとまれる心地して、空の雲あはれにたなびけり。年頃夢の中にも見奉らで戀しう覺束なき御様を、ほのかなれど、さだかに見奉りつるのみ、面影に覺え給ひて、我がかくかなしみを極め、命盡きなむとしつるを、助けに翔り給へると哀に思すに、能くぞかゝる騒もありけると、名残たのもしう、嬉しう覺え給ふ事限なし。胸つとふたがりて、なかくなる御心惑

(一)現在の愁をも忘れて  
 (二)胸がふさがるので  
 (三)再び桐壺が見ゆるか

(四)前橋摩守入道、即ち明石入道

(五)良清

(六)事情を申し上げん

(七)源に相談する詞

(八)播磨にての知人にて

(九)入道の御の事

(一〇)格別便りもせずし

(一一)不審がる

(一二)源は夢の告に思ひ合する所あれば

ひに、現の悲しきことも打忘れて、夢にも御答を今少し聞えずなりぬる事といふせさに、又や見え給ふと、ことさらに寢入り給へど、更に御目もあはで、曉方になりにけり。

渚に小やかなる船寄せて、人二三人ばかり、この旅の御宿をさして來。何人ならむと問へば、明石の浦より、さきのかみ新發意の、御船装ひて参れるなり。入道源

少納言侍ひ給はば、對面して事の心とり申さむ」といふ。良清驚きて、良清入道

はかの國の得意にて、年頃あひ語らひ侍りつれど、私にいさよか相怨むる事侍り

て、ことなる消息をだに通はさで、久しうなり侍りぬるを、波のまぎれに、如何

なる事かあらむ」とおほめく。君の御夢なども思し合する事もありて、源早逢、

と宣へば、船に往きて逢ひたり。さばかり烈しかりつる波風に、いつの間にか船

出しつらむと、心得がたく思へり。入道去ぬる朔日の日の夢に、様異なるもの

告げ知らする事侍りしかば、信じ難き事と思ひ給へしかど、十三日にあらたなる



(一) 外國にて多かりし故

(三) 瀛方にも夢の告など若しありはせざりしかと思ひて御尋ね申上ぐる  
(四) 夢にも現にも色々々天の響の如き事を過去未來に考へ合せて  
(五) 此響は眞に神の助の機なるに、人の辨を怖れて之に背かば、向一層人の嘲を招くかも知れぬ  
(六) 人間の心にさへ背きにくきに、況や神意には背き難し  
(七) 経験ある年長者又け我より地位人望勝れたる人には隨ひて其仕向に付すべきもの也

驗見せむ、船を装ひ設けて、必ず、雨風やまばこの浦に寄せよ、と、重ねて示すことこの侍りしかば、試に船のよそひを設けて待ち侍りしに、厳しき雨風、雷の驚かし侍りつれば、他の朝にも、夢を信じて國を助くる類、多う侍りけるを、用るさせ給はぬまでも、このいましめの日を過ぎさ、この由を告げ申し侍らむとて、船出し侍りつるに、怪しき風細う吹きて、この浦に著き侍ること、まことに神のしるべ違はずなむ。こよにも若し知ろしめす事や侍りつらむとてなむ。いとも憚り多く侍れど、この由申し給へ」といふ。良清忍びやかに傳へ申す。君は思しまはすに、夢現さま、静ならず、さとしの様なる事どもを、來し方行く末思し合せて、世の人の聞き傳へむ後の誹謗も安からざるべきを憚りて、まことの神の助にもあらむを、背くものならば、又これより勝りて、人笑はれなる目をや見む。現の人の心だになほ苦し。はかなき事をもかつ見つよ。我より齡まさり、も少しは位高く、時世のよせ今ひとときはまさる人には、靡き隨ひて、その心むけをたどる





(一) 老に「不遇有咎」  
 (二) 已に命限りの危難を  
 ち犯し、類なきひどい目  
 にも遇ひたる上は  
 (三) 今後の名譽をかばひ  
 立した處が役にも立たじ

(四) 「波にのみ濡れつる  
 ものを吹く風の便り感し  
 きあまの釣船」  
 (五) 明石に  
 (六) 入道が  
 (七) 源を我船に載せよ  
 (八) 源の配近者四五人計  
 御供にて乗船す  
 (九) 不思議なる胸臆  
 (一〇) 元來近き距離なれ  
 ば

明石入道の瀆の館

べきものなり、退きて咎なしとこそ、昔の賢しき人も言ひ置きけれ、けにかく命  
 (一) をきはめ、世に又なき目の限を見盡しつ、更に後のあとの名をはぶくととも、た  
 (二) けき事もあらじ、夢の中にも父帝の御教ありつれば、また何事をか疑はむ、と思  
 (三) して、御かへり宣ふ、眞知らぬ世界に、珍らしき憂のかぎり見つれど、都の方よ  
 りとて、言問ひおこする人もなし、たゞ行方なき空の月日の光ばかりを、故郷の  
 友とながめ侍るに、うれしき釣船をなむ、かの浦に静やかに隠らふべき限侍りな  
 (四) むや」と宣ふ、限なく喜び、かしくまり申す、ともあれかくもあれ、夜の明けは  
 (五) てぬ前に御船に奉れ、とて、例の親しきかぎり、四五人ばかりして奉りぬ、例の  
 (六) 風出で来て、飛ぶやうに明石につき給ひぬ、たゞ這ひわたる程は片時の間といへ  
 (七) ど、なほ怪しきまで見ゆる風の心なり、  
 (八) 濱の様、けにいと心異なり、人繁う見ゆるのみなむ、御心に背きける、入道の領  
 (九) じ占めたる所々、海の面にも山がくれにも、時々につけて、興を採すべき渚の筈

(一) 念佛三昧  
 (二) 現世の生活の料に米  
 を積込み、晩年を氣樂に  
 送るべき

三源が

(四) 源が乗り移る時分  
 (五) 入道が源を

六入道が

七釋古の讀き

(八) 今までの須磨の住居  
 (九) 室内の備付なども結  
 構にて

(一〇) 都の貴顯の邸宅に  
 も勝る位に

屋、行をして後の世のことを思ひすましつべき山水のつらに、いかめしき堂を立  
 てて、三昧行ひ、この世のまうけに、秋の田の實を刈り納め、残の齡積むべき稻  
 (一) の倉町どもなど、折々所につけたる見所ありてしあつめたり、高潮に懼ちて、こ  
 (二) の頃、女などは岡邊の宿に移して住ませければ、この濱の館に心安くおはします、  
 (三) 船より御車に奉り移るほど、日やうくさしあがりて、ほのかに見奉るより、老  
 (四) も忘れ齡延ぶる心地して、笑みさかえて、まづ住吉の神を、かつぐ拜み奉る、  
 (五) 月日の光を手心得奉りたる心地して、いとなみ仕う奉ること、理なり、所の様を  
 (六) ば更にもいはず、作りなしたる心ば、木立立、前裁などの有様、えもいはぬ  
 (七) 入江の水など、繪に畫かば、心のいたり少からむ繪師は、畫き及ぶまじと見ゆ  
 (八) 月頃の御住居よりは、こよなく明かになつかし、御しつらひなどえならずして、住  
 (九) ひけるさまなど、けに都のやむごとなき所々に異ならず、艶にまばゆきさまは、  
 (一〇) まさりさまにぞ見ゆる。



- 源氏より都の方々へ
- 文 源が少し落着きて都へ手紙を出す
- (一) 紫よりの便
- (二) 飛でもない使に來て
- (三) 内々にて祈禱を頼みしなるべし
- (四) 藤壺
- (五) 不思議に助かれる

- (七) 出家の希望
- (八) 須磨巻にある紫の歌
- (九) 此儘又逢はずに出家するのと思ふと、色々のつらい事はそつちのけになりて君への名残ばかり惜まれる
- (一〇) 君がすむ都を
- (一一) 心の確ならぬ中に書きたる手紙なれば
- (一二) 傍から見て居て讀んで見たい様に思はれる

少し御心しづまりては、京の御文ども聞え給ふ。參れりし使は、今はいみじき道に出で立ちて悲しき目を見る」と泣き沈みて、あの須磨にとまりたるを召して、身に餘れる物ども多く賜ひてつかはす。むつまじき御祈の師ども、さるべき所々には、この程の御有様、委しく言ひつかはすべし。入道の宮ばかりには、珍らかにて蘇れるさまなど聞え給ふ。二條院の哀なりし程の御かへりは、書きもやり給はず。打置きく押し拭ひつゝ聞え給ふ御氣色、なほ殊なり。

源かへすくいみじき目の限を見盡しはてつる有様なれど、今はと世をおもひ離るゝ心のみまさり侍れど、鏡を見てもと宣ひし面影の離るゝ世なきを、斯く覺束ながらやと、こよら悲しき様々のうればしさはさし措かれて、はるかにも思ひやるかな知らざりし浦よりをちに浦傳ひして、夢の中なる心地のみして、覺めはてぬほど、いかに僻事多からむ。そこはかとなく書き亂り給へるしもぞ、いと見まほしき側目なるを、いとこ

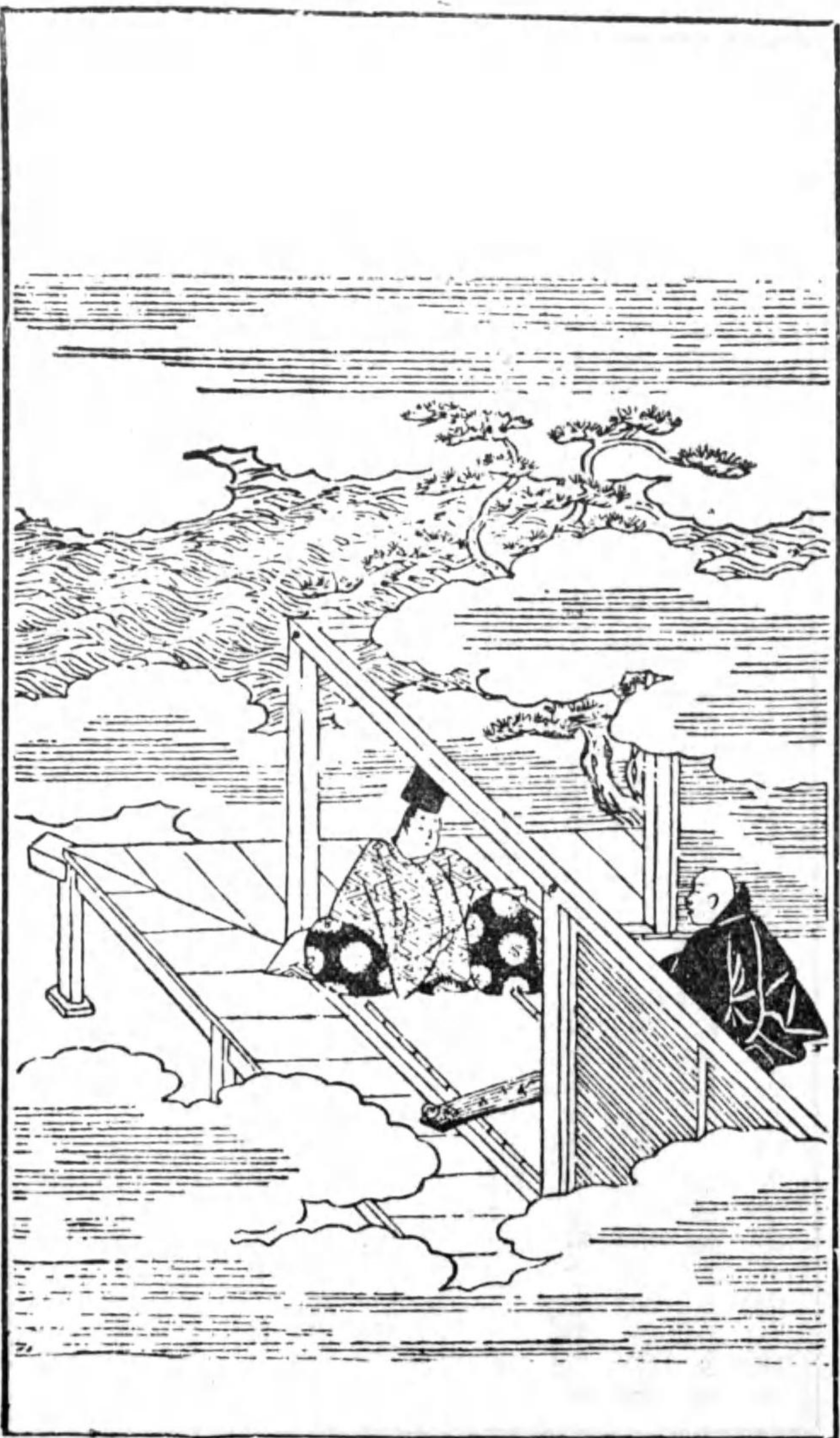
- (一) 意氣揚々たり
- (二) 明石は賑すぎるまで源が厭ひはしたれども
- (三) 入道娘の事を言出し得ずして氣を揉む
- (四) 佛道に凝り固まりては居れど
- (五) 氣抜ひにして居る
- (六) 美人と聞居たる頃なれば
- (七) 不慮に此所へ來たの
- (八) 領との宿縁にやと
- (九) 體中では佛道に心を專らせん
- (一〇) 謹愼せず女に手出しでもすると自分を口程にもないと思ふならんと
- (一一) 入道が謎をかけたも取合はず
- (一二) 領の機子を聞いて成程勝れた女ぢやわいと
- (一三) 源の所へは入道が敬意を表して容易に來ず
- (一四) 入道が源を

よなき御志の程と、人々見奉る。おのく故郷に、心細けなる言傳すべかめり。小歌なかりし空の氣色、名残なく澄みわたたりて、漁する海士どもほこらしけなり。須磨はいと心ほそくて、海士の岩屋も稀なりしを、人しけき厭ひはし給ひしかど、こよは又、様異に哀なること多くて、萬に思しなぐさまる。あるの入道、行ひ勤めたる様、いみじう思ひすましたるを、唯この女一人をもて煩ひたる氣色、いとかたはらいたきまで、時々漏らし愁へ聞ゆ。御心地にも、をかしと聞きおき給ひし人なれば、斯くおほえなくて廻りおはしたるも、然るべき契あるにやと思しながら、なほ斯う身を沈めたる程は、行より外のことは思はじ。都の人も、たどなるよりは、いひしに違ふと思さむも、心恥かしうおほさるれば、氣色だち給ふことなし。事に觸れて、心ばせ有様なべてならずもありけるかなと、ゆかしう思されぬにしもあらず。こよには畏まりて、自らもをさく參らず。物隔たりたる下の屋に侍ふ。さるは且暮見奉らまほしう、飽かず思ひ聞えて、いか



- (一) 人品よき故かして
- (二) 筆跡じみたる
- (三) 源が
- (四) 入道がぼつゝ話す
- (五) 明石に來ず入道に遇はざりしならば寂しかるべしと思ふ迄
- (六) 入道が源に
- (七) 源の
- (八) 彼程熱心なりしかども恥かしくなりて
- (九) 源の事を十分に申上げられぬを
- (一〇) 入道の妻
- (一一) 本人、源
- (一二) 一通りのよい男さ
- (一三) 見られぬ此田舎で
- (一四) 源を見て斯る男もあるものかと思ふにつけ
- (一五) 我身分を顧みて、源には及びもない事と思ひ居れり
- (一六) 源を源にと心配するを聞きて
- (一七) そんな企の九で無いよりは

で思ふ心おもをかなへむと、佛神ほとけがみをいよく念ねんじ奉たもつ。年としは六十むそばかりになりたれど、いと清きよけにあらまほしう、行なひさらほひて、人ひとの程ほどのあてはかなればにやあらむ、うちひがみほれくしき事はあれど、いにしへの事ことをも見知りて、物ものきたなからす、由よしづきたることも交まじれば、昔むかしの物語ものがたりなどせさせて聞き給ふに、少すこし徒然つれづれのまぎれなり。年頃としごろ公おほ私やくわたくし御みいとまなくて、さしも聞き置き給はぬ世よの故事ふしどもも、くづし出いでて聞きゆ。かゝる所ところをも人ひとをも見みざらましかばさうくしくや、とまで、興おもしろありと思おもす事もまじる。斯かうは馴なれ聞きゆれど、いと氣け高たかう心こころ恥はづかしき御み有あり様に、さこそ言いひしか、つよましようなりて、わが思おもふことは心の儘ままにもえうち出いで聞きえぬを、心こころもとなう口惜くちをしと、母はは君きみといひ合あはせてなげく。正ただ身みも、おしなべての人ひとだにめやすきは見みえぬ世界せかいに、世よにはかゝる人ひともおはしけりと見み奉たてまつりしにつけて、身みのほど知しられて、いと遙はるかにぞ思おもひ聞きえける。親おやたちのかく思おもひあつかふを聞きくにも、似にげなき事ことかなと思おもふに、たゞなるよりは物ものあはれなり。





● 月夜入道源氏の前は  
 琴を弾く、銀を奉る約束  
 (一) 垂清、夏冬にてかは  
 る也  
 (二) 入道が  
 (三) 出過ぎた仕方  
 (四) 入道が非常に氣位高  
 く上品なるに免じて  
 (五) 誰をあてといふ事も  
 なく懸ふる目的のなき心  
 持して  
 六「淡路にてあはと遙  
 に見し月の近き今宵は處  
 ちかかも」  
 (七) 色々の物思に加へて  
 淡路島の面白さに對する  
 感さへ、「あは」とは「彼  
 は」との義  
 (八) 感に堪へて  
 (九) 廣陵散、神曲なりと  
 いふ  
 (一〇) 領の住める家の方  
 に琴の音の聞えたる也  
 (一一) 「しはぶかひ人」  
 の誤にて、喉嚨する人、即  
 老人の義なるべしといふ

四月になりぬ。更衣の御装束、御帳の帷子など、由ある様にし出づ。よろづに仕  
 う奉り營むを、いとほしうすどろなりと思せど、人様のあくまで思ひあがりたる  
 さまのあてなるに、思しゆるして見給ふ。京よりも、うち頻りたる御訪ども、た  
 ゆみなく多かり。のどやかなる夕月夜に、海の上曇りなく見え渡れるも、住み馴  
 れ給ひし故里の池水に、思ひまがへられ給ふに、いはむ方なく戀しきこと何方と  
 もなく、行方なき心地し給ひて、たゞ目の前に見やらるよは、淡路島なりけり。  
 源「あはと遙に」など宣ひて、  
 源「あはと見る淡路の島のあはれさへ残るくまなく澄める夜の月  
 (七) 久しう手も觸れ給はぬ琴を、袋より取り出で給ひて、はかなく搔鳴し給へる御様を、  
 見奉る人も、やすからず哀に悲しう思ひあへり。廣陵といふ手を、あるかぎり弾  
 きすまし給へるに、かの岡邊の家も、松の響波の音にあひて、心ばせある若き人  
 は、身にしみて思ふべかぬめり。何とも聞きわくまじき、このもかのものしはぶ  
 (一一)

(一) 琴の音に感してぞ  
 つとして風を引く  
 (二) 一旦瀟々たる俗世界  
 を又思ひ出す  
 (三) 極樂淨土の有様源  
 の妙音によりて想像せら  
 る  
 (四) 源の心  
 (五) 肉聲  
 (六) 源が  
 (七) 帝以下總ての人に  
 (八) 老人、入道  
 (九) 源にすゝめれば  
 (一〇) 何につけても源の  
 勝れたるよと入道感心せ  
 り  
 (一一) 格別よくもなき音  
 樂でも、場合に上りてよ  
 く聞ゆるものなるに  
 (一二) 叩く如き音して啼  
 く  
 (一三) まだ宵に打來て叩  
 く水鶏かな誰が門さして  
 入れぬなるらん

るひ人どもも、すどろはしくて、濱風をひきありく。入道もえ堪へで、供養法  
 ゆみて、急ぎ参れり、入道さらに、背にし世の中も取り返し思ひ出でぬべく侍  
 る。後の世に願ひ侍る所の有様も、思ふ給へやらるよ夜の有様かな」と泣くくめ  
 で聞ゆ。我が御心にも、折々の御遊、その人かの人の琴笛もしは聲の出でし  
 時々につけて、世にめでられ給ひし有様、帝より始め奉りて、もてかしづき崇め  
 られ奉り給ひしを、人の上も、我が御身の有様も、思し出でられて、夢の心地し  
 給ふまよに、搔鳴し給へる聲も、心すごく聞ゆ。古人は涙もとどめあへず、岡邊  
 に琵琶の琴取りにやりて、入道琵琶の法師になりて、いとをかしう珍しき手  
 一つ二つ弾き出でたり。箏の御琴まりたれば、少し弾き給ふも、様々いみじう  
 のみ思ひ聞えたり。いとさしも聞えぬ物の音だに、折からこそは増るものなるを、  
 遙々と物の滞りなき海面なるに、なかく、春秋の花紅葉の盛なるよりは、唯  
 そこはかとなう繁れる蔭どもなまめかしきに、水鶏のうちたよきたるは、「誰が門  
 (一二)



(一) 非常によく出る  
 (二) 源と入道と  
 (三) 第は  
 (四) 何の考もなく  
 (五) 何の考もなく  
 (六) 源の御心持也  
 (七) 源の御心持也  
 (八) 源の御心持也  
 (九) 源の御心持也  
 (一〇) 源の御心持也  
 (一一) 源の御心持也  
 (一二) 源の御心持也  
 (一三) 源の御心持也  
 (一四) 源の御心持也  
 (一五) 源の御心持也  
 (一六) 源の御心持也  
 (一七) 源の御心持也  
 (一八) 源の御心持也  
 (一九) 源の御心持也  
 (二〇) 源の御心持也

さして」と哀におほゆ。音もいとになう出づる琴どもを、いと懐しう弾き鳴したるも、御心とまりて、源「これは、女の懐しきさまにて、しどけなく弾きたるこそをかしけれ」と、大かたに宣ふを、入道はあいなくうち笑みて、入道「遊ばすより懐しき様なるは、いづこのか侍らむ。なにがし延喜の御手より弾き傳へたること、三代になむなり侍りぬるを、斯う拙き身にて、この世のことは捨て忘れ侍りぬるを、物の切にいぶせきをりくは、かき鳴し侍りぬるを、怪しうまねぶもの侍るこそ、自然にかの前大王の御手に通ひて侍れ、山伏のひが耳に、松風を聞きわたし侍るにやあらむ。いかで、これ忍びて聞き召させてしがな」と聞ゆるまよに、うち戦きて涙おとすべかめり。君「源を琴とも聞き給ふまじかりけるあたりに、妬きわざかな」とておしやり給ふ。源「怪しう昔より、箏は女なむ弾きとるものなりける。嵯峨の御傳にて、女五の宮、さる世の中の上手に物し給ひけるを、その御筋にて、取り立てて傳ふる人なし。すべてたゞ今世に名を取れる人々、かきなでの

(一) 入道の家にそつくり  
 (二) どうかして聞きたいものぞや  
 (三) 白樂天徳意行の故事、白樂天陽江に客を送りて長安の名妓の落ぶれて茶商人の妻となれるに遇ひ、昔習ひたる琵琶を弾かせ聞きて大に感傷せりといふ趣  
 (四) 手に入れる人  
 (五) 私の懐は  
 (六) どう習つたのか  
 (七) 田舎に置くのは  
 (八) 風流がり  
 (九) 熱心に  
 (一〇) 左手の音  
 (一一) 備馬琴「伊勢海」の句  
 (一二) 源も  
 (一三) 入道が  
 (一四) 強ひつけ

心やりばかりにのみあるを、こよにかう弾き込め給へりける、いと興ありけることかな。いかでかは聞くべき」と宣ふ。入道「聞き召さむには何の憚かは侍らむ、御前に召しても、商人の中にてだにこそ、ふることも聞きはやす人は侍りけれ。琵琶なむまことの手を弾きしづむる人、いにしへも難う侍りしを、をさく、滞ることとなう、なつかしき手など筋殊になむ。いかでたどるにか侍らむ。荒き浪の聲にまじるは、悲しうも思ひ給へられながら、かきつむる物なけかしさ、紛るゝ折々も侍る」など、すきるたれば、をかしとおほして、箏の琴とりかへて給はせたり。けにいとすぐして掻い弾きたり。今の世に聞えぬ筋ひきつけて、手づかひいといたう唐めき、ゆの音ふかう澄したり。伊勢の海ならねど、「清きなきさに貝やひろはむ」など、聲よき人に諭はせて、我も時々拍子とりて、聲打添へ給ふを、琴弾きさしつよめで聞ゆ。御菓子など珍らしき様に参らせ、人々に酒強ひそしなどして、おのづから物忘れもしぬべき夜のさまなり。いたく更け行くまよに、濱風涼しう



一入道が  
 二「ほつ」と話して  
 三源の心  
 四申上げにくき  
 五思もよらぬ田舎に  
 六入道自身  
 七源の  
 八私思よ仔細ありて  
 九一晝夜六回の佛前の  
 動、晨朝日中日没初夜中  
 夜後夜  
 一〇自己の極樂往生の  
 願はさて置き  
 一一領を出世させ給へ  
 とのみ願へり  
 一二私に  
 一三私が  
 一四子孫が段々賤しく  
 なり行かば終には何にな  
 るなると  
 一五此のにつきては出  
 生當時より信ずる所あり

て、月も入方になるまよにすみまさりて、静なるほどに、御物語のこりなく聞え  
 て、この浦に住み始めし程の心づかひ、後の世をつとむる様、かきくづし聞えて、  
 この女のありさま、問はずがたりに聞ゆ。をかしきものの、さすがに哀と聞き給  
 ふ節々もあり。入道いととり申し難き事なれど、我君、斯うおほえなき世界に、假  
 にても移ろひおはしましたるは、若し、年頃法師の祈り申し侍る神佛の憐みお  
 はしまして、暫しの程御心をも惱まし奉るにや、となむ思ひ給ふる。その故は、  
 住吉の神を頼み始め奉りて、この十八年になり侍りぬ。女の童の幼う侍りし  
 より、思ふ心侍りて、年ごとの春秋毎に、かの御社に参ることなむ侍る。晝夜の  
 六時のつとめに、みづからの蓮の上の願をばさるものにて、唯この人を、高き本  
 意かなへ給へとなむ念じ侍る。前の世の契、拙くてこそ、かく口惜しき山賤とな  
 り侍りけめ、親大臣の位を保ち給へりき。自らかく田舎の民となりて侍り。つぎ  
 つぎのみ劣りまからば、何の身にかなりはべらむ、と悲しく思ひ侍るを、  
 二五これ

一身分相當に  
 二國守などの申込を謝  
 絶したる由、若葉巻の良  
 滑の端に見えたり  
 三私存生中は兎も角も  
 して世話もすべし  
 四領の縁付かぬ中に入  
 道が死にたらば  
 五言ひ付け置けり  
 六口實似も出来ぬ事  
 七恰も物思多き折柄故  
 八冤罪  
 九如何なる因果なちん  
 と  
 一〇聞いて思合すれば  
 一一合點し居たる事を  
 一二佛前の動  
 一三いくぢなくなれり  
 一四明石上の事は端に  
 聞き居たれども  
 一五無用の人、源自身  
 一六厭ふべきものとし  
 て相手にせぬならんと尻  
 込みして居しに  
 一七領に引合せてく  
 れるといふのか

は生れし時より頼む所なむ侍る。如何にして都の貴き人に奉らむと思ふ心深き  
 により、程々につけて、あまたの人のそねみを負ひ、身のため辛きめを見る折々  
 も多くはべれど、更に苦と思ひ給へず、命の限は狭き袖にもはぐくみ侍りなむ  
 かなながら見棄て侍りなば、波の中にもまじり失せぬ、となむおきて侍る」など、  
 すべてまねぶべくもあらぬ事どもを、うち泣きく聞ゆ。君も物をさまふと思し  
 續くる折からは、うち涙ぐみつと聞しめす。横さまの罪にあたりて、思ひかけ  
 ぬ世界に漂ふも、何の罪にかと覺束なく思ひつるを、今宵の御物語に聞きあはす  
 れば、けに淺からぬ前の世の契にこそはと哀になむ。などかは、斯く定かに思ひ  
 知り給ひけることを、今までは告げ給はざりつらむ。都離れし時より、世の常な  
 きもあぢきなう、行より外のことなくて月日を経るに、心も皆くづほれにけり  
 かよる人もし給ふとはほの聞きながら、いたづら人をば、ゆよしきものにこそ  
 思ひ捨て給ふらめ、と思ひ屈しつるを、さらば導き給ふべきにこそあなれ。心  
 二四  
 二五



(一) 明石の浦に常思ひ明  
 才隔座の寂しきは君にも  
 御承知なりや  
 (二) 銀の身の上を心配し  
 来れる氣苦勞を察し給へ  
 (三) 住馴れたる君は我上  
 りは寂しきも少かるべし  
 (四) 我は旅客の身なれば  
 悲は一入なり  
 (五) 形容に詞なき程の美  
 しき  
 (六) 入道が源に  
 (七) 記者の書き方も手  
 なれば入道の痴頑なる  
 心柄は一層著しく見ゆる  
 なるん  
 (八) 源氏と明石上(入道  
 の領)と文の贈答  
 (九) 入道は此一夕の閑談  
 に、年來の望が先づく  
 叶へる心地して  
 (十) 胸がすいた様に思ひ  
 居たるに  
 (十一) 明石上へ源が  
 (十二) 田舎領を相手にす  
 るは、ちと氣がひける機  
 なれども  
 (十三) 人知れぬ所に案外  
 立派な女もあるものぢや  
 と  
 (十四) 朝鮮産の  
 (十五) 青色の下に白色の  
 紙を重ねたるをいふ

ほそき獨寢のなぐさめにも「など宜ふを、限なく嬉しと思へり。  
 入道、ひとりねは君も知りぬやつれぐと思ひあかしの浦淋しさを  
 まして年月思ひ給へわたるいぶせさを、おしはからせ給へ」と聞ゆるけはひ、う  
 ち戦きたれど、さすがに故なからず、<sup>(三)</sup>「されど浦なれ給ひつらむ人は」とて、  
 源旅衣うらがなしきにあかしかね草のまくらはゆめもむすばず  
<sup>(四)</sup>とうち亂れ給へる御様は、いとぞ愛敬つき、いふよしなき御けはひなる。數知ら  
 ぬ事ども聞え盡したれど、うるさしや、<sup>(五)</sup>僻事どもに書きなしたれば、いとど、嗚  
 呼にかたくなしき入道の、心ばへも顯れぬべかめり。  
<sup>(六)</sup>思ふ事かつくかなひぬる心地して、すどしう思ひ居たるに、又の日の晝つ方  
<sup>(八)</sup>岡邊に御文つかはす。心恥かしきさまなめめるも、なかく斯かる物の限にぞ思  
<sup>(九)</sup>の外なる事もこもるべかめると、心づかひし給ひて、<sup>(三)</sup>高麗の胡桃色の紙に、え  
 ならず引きつくりひて、

(一) 今迄遊にのみ聞きて  
 懸ひ居たるが、入道の言  
 を力にして今初めてと  
 づるなり  
 (二) 思ふには忍ぶる事ぞ  
 負ひにける色には出でし  
 と思ひしものを  
 (三) 領への源の手紙を  
 (四) 使の餘りに欺待され  
 て恥かしき程に馳走す  
 (五) 源の返事に手間がか  
 かる  
 (六) 入道が  
 (七) 源の心  
 (八) 柳返事を書くとして  
 (九) 自他の身分を思へば  
 餘りの段違なるに恥ぢて  
 (一〇) 勿體なき印は、田  
 舎者には御受も申上げか  
 ねたるにや  
 (一一) 源は拜見もしかね  
 たる故、恐れながら代り  
 て御返事申上げ  
 (一二) 君の眺むる空を我  
 も眺むるは、君と我と同  
 じ思なればならん  
 (一三) 手紙にすきくし  
 やとある通り、成程氣取  
 り居るわい

源をちこちも知らぬ雲井にながめわびかすめし宿の梢をぞとふ  
<sup>(一)</sup>思ふには、  
 とばかりやありけむ。入道も、人知れず待ち聞ゆとて、かの家に來居たりけるも  
 著ければ、<sup>(二)</sup>御使いとまばゆきまで酔はす。御かへりいとひさし。<sup>(五)</sup>内に入りてそよ  
 のかせど、女は更に聞かず。いと恥かしけなる御文の様に、さし出でむ手つきも  
 恥かしうつとましよう、人の御ほど我身のほど、思ふにこよなくて、心地あしとて  
 寄り臥しぬ、言ひわびて入道ぞ書く。  
 入道いともかしこきは、田舎びて侍る袂に、つよみあまりぬるにや、<sup>(三)</sup>更に見給へ  
 も及び侍らぬかしこさになむ。さるは、  
 ながむらむ同じ雲井をながむるは思ひもおなじ思ひなるらむ  
<sup>(二)</sup>となむ見給ふる。いとすきくしや。  
 と聞えたり。陸奥國紙に、いたう古めきたれど、書きさま由ばみたり。<sup>(三)</sup>實にも好



- (一) 女の寝などをくれたり、海邊の事故に海をかく
- (二) 代筆では承知せぬ
- (三) 尋ねてくれる人なき故心一つに物を思ふ

- (四) 明石上の心
- (五) 身分が不釣合で
- (六) 人がましく文をつけられたので、却て口惜しくて返事を書かうともせず

- (七) 香を焚きしめたる
- (八) 見ぬ顔にあこがれる程の我ながらねば、思ひ悩み給ふと言はるる君の心が疑はるる
- (九) 貴人めきたり
- (一〇) 女道楽に馴れし京にての生活が思ひ出され
- (一一) 再々手紙を遺るの

きたるかなと、目ざましう見給ふ。御使に、なべてならぬ玉もなとかづけたり。またの日、宣旨書は、見知らずなむ」とて、

「いぶせくも心にものをなやむかなやよいかにと問ふ人もなみ言ひ難み」と、この度はいといたうなよびたる薄様に、いと美しげに書き給へり。

若き人のめでざらむも、いとあまりうもれいたからむ、めでたしとは見れど、なすらひならぬ身のほどの、いみじうかひなければ、なかく、世にあるものと尋ね知り給ふにつけて、涙ぐまれて、更に例の動なきを、責めて言はれて、淺からずしめたる紫の紙に、墨つき濃く薄く紛らはして、

明石思ふらむ心のほどややよいかにまだ見ぬ人の聞きかなやまむ

手のさま書きたる様など、やむごとなき人にいたう劣るまじう上手めきたり。京のこと覚えて、をかしと見給へど、うちしきりて遣さむも、人目つよまじければ、二三日隔てつよ、徒然なる夕暮、も少しは物哀なる曙などやうに紛はして、をりく

- (一) 明石も我と同じく寝を感じ居るならんと思ふ頃を見計らひて
- (二) 直に相當に返事する
- (三) 直接に氣位の高い所を是非見てやりたし
- (四) 役持物の機に言ひたる口
- (五) 年來執心なる良清の眼前で見せつけて鼻をあかせるも氣の置に思はれ
- (六) 女から持懸けて来た機に本望違ひんと
- (七) 氣を持たせる機に構へ居れば
- (八) 睨めくら
- (九) 須磨の關を越えて都に又遠くなりては
- (一〇) 源の心
- (一一) ありぬやと試みかてらありぬやと試みかてら遠く離しき
- (一二) 雲を
- (一三) 田舎に何時返居るものか
- (一四) 今になりて外聞懸き事も出来ぬ
- (一五) 朱雀帝の夢、帝源氏を召還さんとす
- (一六) 朝廷に天の旨と思はるる聖事多く
- (一七) 朱雀が言聞かせる

人も同じ心に見知りぬべき程推量りて、書き交し給ふに、似けなからず。心深く思ひあがりたる氣色も見ではやまじ、と思すものから、良清が領じていひし氣色も目ざましう、年頃心づけてあらむを、目の前に思ひ違へむもいとほしう、思し廻らされて、人進み参らば然る方にも紛はしてむと思せど、女はた、中々やむごとなき際の人よりも痛うおもひあがりて、妬けにもてなし聞えたれば、心比べにてぞ過ぎける。京の事を、かく關隔たりては、愈覺束なく思ひ聞え給ひて、如何にせまし、戯れ憎くもある哉、忍びてや迎へ奉りてまし、と思し弱る折々あれど、然りともし斯くてやは年を重ねむ、今更に入わろき事をやは、と思ししづめたり。

その年、おほやけに、物のさとし頻りて、物さわがしき事多かり。三月十三日、雷鳴りひらめき、雨風さわがしき夜、帝の御夢に、院の帝、御前の御階の下にたせ給ひて、御氣色いと悪しうて、睨み聞えさせ給ふを、畏まりておはします。



(一) 朱雀が弘徽殿に  
 (二) 思ひたる事は妻に見ゆるものなり  
 (三) 妻に桐壺が睨みし時目を見合せたる故に朱雀が眼病にかかりて  
 (四) 朱雀も弘徽殿も  
 (五) 弘徽殿の父二條太政大臣  
 (六) 太政大臣は死しても憎しからぬ高勳なれど  
 (七) 何やかやと事件の引續く爲に  
 (八) 弘徽殿  
 (九) 今頭の位を復しては輕卒といふ批難を世間から受くべし

えさせ給ふ事ども多かり。源氏の御事どもなりけむかし。いとど恐ろしう、いとほしと思ひて、后に聞えさせ給ひければ、后雨など降り、空亂れたる夜は、思ひなしたる事はさぞ侍る。輕々しきやうに、思し驚くまじき事と聞え給ふ。睨み給ひしに見合せたまふと見しけにや、御目煩ひ給ひて、堪へがたう惱み給ふ。御つししみ、内裏にも宮にも限なくせさせ給ふ。太政大臣亡せ給ひぬ。理の御齡なれど、次々におのづから騒しき事あるに、大宮もそこはかとなう煩ひ給ひて、程程れば弱り給ふやうなる。内裏に思し歎く事様々なり。豈なほこの源氏の君、まことに犯す事なきにて斯く沈むならば、必ずこの報ありなむとなむ覺え給ふ。今はなほ本の位をも賜ひてむ」と、度々思し宜ふを、弘徽殿、世のもどきあはくしき様なるべし。罪に懼ちて都を去りし人を、三年をだに過さず許されむことは、世の人もいかゞ言ひ傳へ侍らむ」など、后固う諫め給ふに、思しはどかる程に、月日重りて、御惱どもさままゝに重り増らせ給ふ。

(一〇) 朱雀が  
 (一一) 朱雀弘徽殿の





● 明石上の自置、源氏  
 明石上を訪ふ  
 (一) 風の音も秋は一入寂  
 しき故  
 (二) 眞底から  
 (三) 明石を我方へ上らせ  
 (四) 源の方から行く事は  
 出来ぬ事の様だと思へるに  
 (五) 明石も亦進みて行か  
 んとは思はず  
 (六) 明石の心  
 (七) 極楽しき身分の  
 (八) 心易だての言餘に隨  
 へて輕卒に肌を許す事もす  
 れど  
 (九) なまじ源に願かば甚  
 しき心配の種を設くべし  
 (一〇) 過分の望を懐ける  
 兩川も我生先のある間に  
 尋常にもならぬ事を當に  
 將來を樂にもして居れど  
 源との縁が不結果ならば  
 却て心配なるべし  
 (一一) 源が  
 (一二) 容易ならぬ幸なれ  
 (一三) 源の噂を  
 (一四) 不慮に源が此處に  
 來られし故  
 (一五) 比類なきもの  
 (一六) 源の生活状態を親  
 しく見聞して  
 (一七) 我を人がましく思  
 ひて尋ね下さる事は我分  
 に過きたる光榮

明石には、例の、秋は濱風の異なるに、獨寝もまめやかに物わびしうて、入道に  
 も折々語らばせ給ふ。調とかう紛らはして、こち参らせよと宣ひて、渡り給はむ  
 ことをばあるまじう思したるを、正身はた更に思ひ立つべくもあらず。と口惜  
 しききはの田舎人こそ、假に下りたる人の打解言につきて、さやうに輕らかに語  
 らふわざをもすなれ、人數にも思されざらむものゆゑ、我はいみじき物思をや添  
 へむ、かく及びなき心を思へる親達も、世ごもりて過す年月こそ、あいなのだのみ  
 に行末心にくと思ふらめ、なかくなる心をや盡さむ、と思ひて、唯この浦にお  
 はせむ程、かよる御文ばかりを聞えかはさむこそおろかならね、年頃音にのみ聞  
 きて、何時かは然る人の御有様をほのかにも見奉らむなど、遙に思ひ聞えしを、  
 かく思ひかけざりし御住居にて、まほならねどほのかにも見奉り、世になきも  
 のと聞き傳へし御琴の音をも風につけて聞き、旦暮の御有様覺束なからで、斯く  
 まで世にあるものと思し尋ぬるなどこそ、かよる海士の中に朽ちぬる身に餘る事  
 (一七)



明石



- (一) 源に近づく事は
- (二) 無暗に御目をか
- (三) 源に近くは構はれな
- (四) 危く
- (五) いくち光源氏でも
- (六) 源の御簡や御の運命
- (七) 二の足を踏んで
- (八) 御の琴が聞きたい
- (九) 同じ聞くならは今
- (一〇) 入道が吉日を候び
- (一一) 若しまづ行つて
- (一二) 一人て氣をもみて
- (一三) 源の準備を立派に調
- (一四) あたら夜の花と
- (一五) 風流を氣取るわい
- (一六) 立派に用意したれ
- (一七) 思ふ人と一緒に見
- (一八) 雲上

なれ、など思ふにいよく恥かして、つゆも氣近き事は思ひよらず。親達は、許  
 多の年頃の祈の叶ふべきを思ひながら、ゆくりかに見せ奉りて、思しかすまへ  
 ざらむ時いかなる歎をかせむ、と思ひやるに、ゆよしくて、めでたき人と聞ゆと  
 も、つらういみじうもあるべきを、目に見えぬ佛神を頼み奉りて、人の御心を  
 も宿世をも知らで、など打返し思ひ亂れたり。君は、「この頃の波の音に、かの物  
 の音を聞かばや。然らずばかひなくこそ」など常は宣ふ。忍びてよろしき日見せ  
 て、母君のとかく思ひ煩ふを聞き入れず、弟子どもなどにだに知らせず。心一つ  
 に起ち居かどやくばかりしつらひて、十三日の月の花やかにさし出でたるに、唯  
 入道「あたら夜の」と聞えたり。君はすきの様やと思せど、御直衣奉り引きつろ  
 ひて、夜ふかして出で給ふ。御車は二なくつくりたれど、所せしとて御馬にて出  
 で給ふ。惟光などばかりを侍はせ給ふ。やと遠く入る所なりけり。道のほども、四  
 方の浦々見渡し給ひて、思ふどち見まほしき入江の月かけにも、まづ戀しき人の  
 (一七) 思ふ人と一緒に見

- (一) 此處通り越して紫の
- (二) 暫時の間でもわが戀
- (三) 隣りの家の様子
- (四) 凝りたる所多く
- (五) 入道の家は
- (六) 隣りの家は
- (七) 機々物思をするなら
- (八) 常念佛堂
- (九) 機々の虫の音す
- (一〇) 源が行き着きて寂
- (一一) 娘に逢ふ前に源が
- (一二) 明石上の心、直接
- (一三) 残念で
- (一四) 源の心、馬鹿にお
- (一五) 立派な身分の女で
- (一六) 是程迄に攻寄せれば一
- (一七) ももなく騒ぎ来るが今
- (一八) 此娘が耐く手ごは
- (一九) 此娘が耐く手ごは
- (二〇) 此娘が耐く手ごは
- (二一) 此娘が耐く手ごは
- (二二) 此娘が耐く手ごは
- (二三) 此娘が耐く手ごは
- (二四) 此娘が耐く手ごは
- (二五) 此娘が耐く手ごは
- (二六) 此娘が耐く手ごは
- (二七) 此娘が耐く手ごは
- (二八) 此娘が耐く手ごは

御事を思ひ出で聞え給ふに、やがて馬引き過ぎて赴きぬべく思す。  
 源「秋の夜のつきけの駒よわがこふる雲井にかけれときのまも見む  
 とうちひとりごたれ給ふ。造れるさま木深く、いたき所まさりて、見所ある住居  
 なり。海の面はいかめしう面白く、これは心ほそく住みたる様、こよに居て思ひ  
 残す事はあらかしと、住む人の心思しやらるゝに物哀なり。三昧堂近くて、鐘  
 の聲松の風に響きあひて、物悲しう、岩に生ひたる松の根ざしも、心ばへある様  
 なり。前裁どもに蟲の聲をつくしたり。こよかしこの有様など御覽す。女すませ  
 たる方は、心殊にみがきて、月入れたる槇の戸口、氣色ばかり押開けたり。うち  
 やすらひ何かと宣ふにも、かうまでは見え奉らじと深く思ふに、物なげかしうて、  
 打解けぬ心さまを、こよなうも人めいたるかな、さしもあるまじき際の人だに、斯  
 ばかり言ひ寄りぬれば、心強うしもあらずならひたりしを、いと斯くやつれたる  
 に侮らはしきにや、と妬う様々に思し惱めり。情なうおし立たむも、ことの様に  
 (一七) 思ふ人と一緒に見



(一) 外聞隠し  
 (二) 前のあたりに夜のの  
 歌の詞を受けてげにとい  
 へる也  
 (三) 源と明石との間に凡  
 帳を隔て居る  
 (四) 几帳より垂れたる紐  
 が、何ぞの拍子に琴に引  
 きかゝりたる也  
 (五) 明石が今迄打解けて  
 琴強き居たる  
 (六) 今迄隠居する琴まで  
 今夜は開かせぬのか  
 (七) 何時も夢見て居る我  
 は、どれが夢と分別が附  
 かぬ故に、事が出来ぬ  
 (八) 似たり  
 (九) 明石は今夜源の来る  
 を知らず打解けて  
 (一〇) 飛でもなき始末に  
 なつて来たので  
 (一一) 明石が  
 (一二) どう縮りをしたの  
 か容易にあかぬ  
 (一三) 源も強ひて入らん  
 とせぬ様子  
 (一四) そうして許も居ら  
 ぬを、源が明石上に違  
 ひたるを推測させし省筆  
 (一五) 明石の人柄  
 (一六) 丈高く  
 (一七) 無理に拵へた様な  
 (一八) 源の心  
 (一九) 今夜の始末を源が

違へり、心くらべに負けむこそ人わろけれ、など亂れ怨み給ふさま、實に物おも  
 ひ知らむ人にこそ見せまほしけれ。近き几帳の紐に、箏の琴のひき鳴されたるも、  
 けはひしどけなく、打解けながら掻きまきぐりける程見えてをかしければ、源、  
 の聞きならしたる琴をさへや」など、よろづに宣ふ。  
 源むつごとを語りあはせむ人もがなうき世の夢もなかばさむやと  
 明明けぬ夜にやがてまどへる心にはいづれをゆめとわきて語らむ  
 ほのかなるけはひ、伊勢の御息所にいとよう覺えたり。何心もなく打解けて居た  
 りけるを、斯う物覺えぬに、いとわりなくて、近かりける曹司の中に入りて、  
 かで堅めけるにかいと強きを、強ひてもおし立ち給はぬ様なり。されど然のみも  
 いかでかはあらむ。人様いとあてにそびえて、心恥かしきはひぞしたる。斯う  
 あながちなりける契を思すにも、淺からずあはれなり。御志の近増りするなる  
 べし。常に厭はしき夜の長さも、疾く明けぬる心地すれば、人に知られじと思す

● 源氏紫上を憶りて明  
 石上を訪ふこと案からず  
 (一) 源から明石へ  
 (二) 女の方でも  
 (三) 隠して  
 (四) 大にてもなしたきを  
 世間をかねてもてなさぬ  
 故  
 (五) 源が明石上へ通ふ  
 (六) 距離  
 (七) 源が  
 (八) 異してもうあきらめ  
 たりと明石上が歎く  
 (九) 佛の來迎よりも源の  
 來るをのみ待つ  
 (一〇) 入道が折角捨てた  
 煩惱を又起すも氣の毒  
 (一一) 源の心、案に明石  
 上の一件を隠して居て跡  
 て聞かれては  
 (一二) 案には特別深いと  
 見える  
 (一三) 前に女の事に就い  
 ては案に憐かれた時  
 (一四) あの機になぞ感さ  
 せたのであらう  
 (一五) 明石上の

も、心あわたしうて、こまかに語らひ置きて出で給ひぬ。  
 御文いと忍びてぞ今日はある。あいなき御心の鬼なりや。こよにも、かゝる事い  
 かで漏さじとつとみて、御使ことごとくしくももてなさぬを、胸いたく思へり。か  
 くて後は、忍びつと時々おはす。程も少し離れたるに、おのづから、物いひさが  
 なき海士の子もや立ち交らむと、思し憚る程を、さればよと思ひ歎きたるを、け  
 に如何ならむと、入道も極樂の願をば忘れて、たゞこの御氣色を待つことにはす。  
 今更に心を亂るも、いといとほしけなり。二條の君の、風のつてにも漏り聞き給  
 はむ事は、戯れにても、心の隔ありけると思ひ疎まれ奉らむは、心苦しう恥かし  
 う思さるよも、あながちなる御志の程なりかし。かゝる方の事をば、さすがに  
 心とどめて怨み給へりし折々、などてあやなきさび事につけても、さ思はれ奉  
 りけむなど、とりかへさまほし。人の有様を見給ふにつけても、戀しさの慰む  
 かなければ、例よりも御文こまやかに書き給ひて、奥に、



- (一)ふとした女狂の聲
- (二)此處にて或女に逢へり
- (三)問はれぬに此方から打明けるので
- (四)忘れじと誓ひし事をあやまたは三笠の山の神もことわれ
- (五)出来心にて當所の女にも逢へども、先づ戀しく思出すは其方の事のみ
- (六)紫の返事
- (七)黙しては居られぬ
- (八)從來の源の舉動に照して
- (九)其方では其様な御樂があるのに、我は眞正直に君を信じて居た事哉、まつ、君をおきて仇し心をわが持たば末の松山根も越えたり
- (一〇)體なる言分なから
- (一一)明石の所へ行かず
- (一二)明石が若しや棄てればせぬかと心配した通りなるに
- (一三)明石の心

頭まことや、我ながら心よりほかなるなほざりごとにて、疎まれ奉りしふしぶしを、思ひ出づるさへ胸痛きに、又怪しう物はかなき夢をこそ見侍りしか。斯う聞ゆる問はずがたり、隔なき心のほどは思し合せよ。誓ひしことも、など書きて、

何事につけても、

しほくと先ぞ泣かよかりそめのみるめは螢のすさびなれども

御かへり何心なくらうたけに書きて、

忍びかねたる御夢がたりにつけても、思ひ合せらるよこと多かるに、

うらなくもおもひけるかな契りしをまつより浪は越えじものごと

おいらかなるものから唯ならずかすめ給へるを、いと哀にうちおき難く見給ひて名残久しう忍びの旅寝もし給はず。女、思ひしものしるきに、今ぞまことに身も投けつべき心地する。行末みじかけなる親ばかりを頼もしきものにて、いつの世に

- (一)無事
- (二)男を待てば斯うも苦勞のあるものか
- (三)櫻かな態度で
- (四)源の明石に對する情は次第に増すのであるが
- (五)離れ居る紫の心配して居るのが氣の毒さに
- (六)紫に贈りて
- (七)必ず感動すべき
- (八)源の心と紫の心と自然に相通するの
- (九)紫上
- 源氏召還の宣旨
- (一〇)朱雀病氣
- (一一)櫻鬮の事杯につき

人並々になるべき身とは思はざりしかど、唯そこはかとなくて過しつる年月は、何事をか心をも悩ましけむ、斯ういみじう物思はしき世にこそありけれど、かねて推し量り思ひしよりも、萬に悲しけれど、なだらかにもてなして、憎からぬさまに見え奉る。哀とは月日にそへて思し増せど、やむことなき方の、覺束なくて年月を過し給ふが、たゞならずうち思ひおこせ給ふらむが、いと心苦しければ、一人臥しがちにて過し給ふ。繪をさまざま、畫き集めて、思ふことどもを書きつけ、返事聞くべき様にしなし給へり。見む人の心にしみぬべき物の様なり。いかでか空に通ふ御心あらむ、二條の君も、物哀に慰む方なく覺え給ふをりく、同じやうに繪をかき集め給ひつと、やがてわが御有様を、日記のやうに書き給へり。いかなるべき御有様どもにかあらむ。

年かはりぬ。内裏に御藥の事ありて、世の中さまぐにのよしる。當帝の御子は、右大臣の御女、承香殿の女御の御腹に、男御子生れ給へる、二つになり給へばい



- (一) 冷泉
- (二) 冷泉即位と假定して
- (三) 惜むべく然る可らざる事
- (四) 弘徽殿の反對
- (五) 源の答を
- (六) 源名還の勅旨
- (七) 終には斯くあるべき事と
- (八) 我身の行末はどうなるのであらう
- (九) 結構な事とは思へど
- (一〇) 源が毎夜かきさず明石へ通ふ
- (一一) 明石懐胎の様子
- (一二) 近々別れればなほぬと思ふ故、情の深くなるのであらうか

といはけなし 春宮にこそは譲り聞え給はめ。おほやけの御後見をし、世をまつりごつべき人を思しめぐらすに、この源氏のかく沈み給ふ事、いとあたらしうあるまじきことなれば、遂に後の御いさめをも背きて、許され給ふべき定出で來ぬ。去年より、后も御物怪に悩み給ひ、さまざまの物のさとし頻り、さわがしきを、いみじき御つよしみどもをし給ふしるしにや、よろしうおはしましける御目のなやみさへ、この頃重くならせたまひて、物心細く思されければ、七月廿餘日の程に、又重ねて京へ歸り給ふべき宣旨下る。つひの事と思ひしかど、世の常なきにつけても、如何になりはつべきにか、と歎き給ふを、斯う俄なれば、嬉しきにつけても、又この浦を今はと思ひ離れむ事を思し歎くに、入道、然るべき事と思ひながら、うち聞くより胸塞がりて覺ゆれど、思ひのごと榮え給はどこそは、我が思ひの叶ふにはあらめ、など思ひなほす。その頃は、夜がれなく語り給ふ。六月ばかりより、心苦しき氣色ありて悩みけり。かく別れ給ふべき程なれば、あやにく

- (一) 源が前々よりも深く明石に惚れ込みて
- (二) 女故に
- (三) 退去の當時は
- (四) 何時か再び歸るべしと、一方には自ら慰むる所ありき
- (五) 二度と來る者はないなる、折からの時節まで哀なる、秋の半なれば
- (六) 源の心
- (七) なせやう思はぬ事の爲に身、清しむるならん
- (八) 明石との關係を知れる惟光
- (九) 苦情をいふ
- (一〇) 源が明石との關係を隠して目立たぬ様に通ひてすまして居たのに
- (一一) 別れ際になりて却て熱情的で明石に餘計な慰ませんと
- (一二) 良清が初めて北山にて源に囁せし事を人々が語り合ふ
- (一三) 源氏明石上に別を惜む
- (一四) 源の出發が
- (一五) 源が明石へ
- (一六) 今迄確には見ぬ明石の容貌を今夜よく見て

なるにやありけむ、ありしよりも哀に思して、怪しう物思ふべき身にもありけるかなと思し亂る。女は更にもいはす思ひ沈みたり。いと理なり。思の外に悲しき道に出で立ち給ひしかど、遂には行きめぐり來なむと、かつはおほし慰めき。この度は嬉しき方の御出立の、又やは願みるべきと思すに哀なり。侍ふ人々、程々につけては喜び思ひ、京よりも御迎に人々参り、心地よけなるを、あるじの入道源にくれて、月も立ちぬ。程さへ哀なる空の氣色に、なぞや心づから、今も昔も、すどろなる事にて身をはふらかすらむ、と様々に思し亂る。心を知れる人は、「あなにく、例の御癖ぞ」と見奉りむつかるめり。月頃は、つゆ人に氣色見せず、時々かいまぎれなどし給へるつれなきを、この頃あやにくに、なかくの人の心づくしにとつきじろふ。少納言のしるべして聞え出でし、初の事など囁きあへるを、たどならず思へり。

明後日ばかりになりて、例のやうにいたうも深さで、渡り給へり。さやかに



(一) 然るべく計らひて明石を都へ引取らんと  
 (二) 其趣に話して  
 (三) 佛の勸

(四) 女の身にしては後の事などは思はず、目前のお情だけを有難く思つて満足もすべきであると思はれるが  
 (五) 源に惚れ込むにつけても自分の身分を考へるにつけても、明石の歎は盡きず  
 (六) 物の哀を集めたる  
 (七) 君を思ふ心はかはらじ

(八) 私風情の思ひても、效なき事なれば今更つたらぬ恨は申さじ、かきつめて一擧集めて、かひ一貝、效、うちみ一恨み、浦見  
 (九) 心淡からぬ機に

だ見給はぬ容貌など、いと由々しう氣高き様して、目ざましうもありけるかなと、見捨て難く口惜しう思さる。然るべき様に迎へむと思しなりぬ。さやうにぞ語らひ慰め給ふ。男の御容貌有様、はた更にもいはず、年頃の御行にいたく面瘦せ給へるしも、言ふかたなくめでたき御有様に、心苦しげなる氣色にうち涙ぐみつゝ、哀に深く契り給へるは、たどかばかりを幸福にても、なか止まざらむとまで見ゆめれど、めでたきにしも、我身のほどを思ふにもつきせや。浪の聲、秋の風には猶ひどき異なり。鹽焼く煙かすかにたなびきて、とりあつめたる所のさまなり。

源このたびは立ちわかるとも、藻鹽やくけぶりは同じかたになびかむと宣へば、

明かきつめて海士の焼く藻の思ひにも今はかひなきうらみだにせじ。哀にうち泣きて、言寡なるものから、然るべき節の御答など、淺からず聞ゆ。この

(一) 明石が源に

(二) 源が

(三) 感動して只居られず  
 (四) 露中に差入れて明石に強けと勸めたり  
 (五) 明石  
 (六) 明石が筆を  
 (七) 明石の琴に對する源の心中の批評  
 (八) 藤壺の琴のよいといふは  
 (九) 明石の琴は  
 (一〇) 源の耳にすれ珍らしく面白く思はるる手  
 (一一) 人にじれつたく思はせる位に強きかけてやめて  
 (一二) 源が  
 (一三) 源が  
 (一四) 再び合奏する時の来る迄記念に置いて行くべし

常にゆかしがり給ふ物の音など、更に聞かせ奉らざりつるを、いみじう恨み給ふ。明「さらば、形見にも忍ぶばかりのひとことをだに」と宣ひて、京よりもておはしたりし、琴の御琴取りにつかはして、心ごとなるしらべをほのかに掻き鳴し給へる。深き夜のすめるには譬へむ方なし。入道もえ堪へで、自ら筆の琴取りてさし入れたり。自らも、いとど涙さへそよのかされて留むべき方なきに、誘はるよなるべし、忍びやかに調べたる程、いと上衆めたり。入道の宮の御琴の音を、只今の又なきものに思ひ聞えたるは、今めかしうあなめでたと、聞く人の心行きて、容貌さへ思ひやらるよことは、けにいと限なき御琴の音なり。これは飽くまで弾きすまし、心にくよ妬き音ぞまされる、この御心にだに始めて哀になつかしう、まだ耳なれ給はぬ手など、心やましき程にひきさしつゝ、飽かず思さるよにも、月頃など強ひても聞き馴さどりつらむと、悔しうおほさる。心のかぎり、行くさきの契をのみし給ふ。源、またかきあはすまでの形見に」と宣ふ。女



(一)よい加減な氣安めを  
當にして何時迄心配する  
事やち、こと一言、琴

(二)記念に留置く琴の調  
の變らぬ如く我と君との  
心も變らじ、中の緒とは  
琴の六より十までの緒を  
いふなるべしとぞ

(三)約束し

(四)明石が愁めるも

(五)上京の首途、明石上  
の離愁

(六)見計らひて

(七)住荒したる此故郷を  
棄てて君と共に都に行き  
たし

(八)足かけ三年也

(九)今立去ると思へば  
名残惜きも尤

明なほざりに頼めおくめる一事をつきせぬ音にやかけて忍ばむ  
言ふともなき口ずさびを怨み給ひて、

源逢ふまでのかたみに契る中の緒のしらべはことに變らざらなむ  
この音違はぬさきに必ず逢見む、とたのめ給ふめり。されど唯、別れむ程のわり  
なさを思ひむせびたるも、いと理なり。

立ち給ふ曉は、夜深う出で給ひて、御迎の人々もさわがしければ、心もそらなれ  
ど、人間をはからひて、

源うちすてて立つも悲しき浦なみのなごりいかにと思ひやるかな  
御かへり、

明年經つる苦屋も荒れて憂きなみの歸るかたにや身をたぐへまし  
とうち思ひけるまよなるを見給ふに、忍び給へど、ほろくとこほれぬ。心知ら  
ぬ人々は、なほ斯かる御住居なれど、年頃といふばかり馴れ給へるを、今はと思

すはさもある事ぞかし、など見奉る。良清などは、疎ならず思すなめりかしと  
憎くぞ思ふ。嬉しきにも、けに今日を限にこの渚を別るよこそ、など哀がりて、  
口々しほたれ言ひあへる事どもあめり。されど何かはとてなむ。入道今日の御  
まうけ、いと厳しう仕うまつれり。人々下のしなまで、旅の装束めづらしき様  
り。いつの間にかしあへけむ、と見えたり。御よそひは言ふべくもあらず、御衣  
櫃あまた掛けさぶらはす。まことの都の土産にしつべき御贈物など、故つきて思  
ひよらぬ限なし。今日奉るべき狩の御装束に、

明寄る浪にたちかさねたる旅ごろもしほどけしとや人のいとほむ  
とあるを御覽じつけて、騒がしけれど

源かたみにぞ換ふべかりける逢ふ事の日数へだてむ中のころもを  
とて、源志あるを」とて、奉り換ふ。御身になれたるどもを遣す。けに今ひとへ  
思ばれ給ふべき事を添ふるかたみなめり。えならぬ御衣に匂の移りたるを、

(一)明石上を

(二)故郷へ歸る感しきに  
ついで

(三)何も一々其を書き必  
要なしとて省けり

(四)饒別の細路走  
なる旅装を調へて贈れり

(五)下々の者にまて立派  
なる旅装を調へて贈れり

(六)間に合ふ様に何時捨  
へたるならん

(七)源の旅装を贈りたる  
は勿論

(八)幾荷も荷はせて供せ  
ます

(九)趣ある様に拵へて行  
届かぬ所なし

(一〇)源の今日の着料の  
る衣裳なれば、腰氣づき  
て着心地悪しと細難なさ  
るかも知れぬ

(一一)「ごた」の最中な  
れど返歌す

(一二)暫時別るべきなれ  
ば形見に衣を取換へよう

(一三)折角の志だから

(一四)着て居た衣を遣る

(一五)暮はるべき材料を  
又「添へたる」譯也

(一六)明石もいかにか身  
に染みて思はざらん



- (一) 御送申さぬが縁念
- (二) ヲモをかく

が人の心にもしめざらむ。入道「今はと世を離れ侍りにし身なれども、今日の御送に仕う奉らぬ事」など申して、かひをつくるもいとほしながら、若き人は笑ひぬべし。

入道「世をうみにこよらしほじむ身となりてなほ此岸をえこそ離れね

- (三) 世を厭ひて此浦に還世はしたれども、まだ煩惱を絶ちて解脱の彼岸に到着する事が出来ぬ、うみへ帰らぬ
- (四) 子放の闇には
- (五) 國境迄も送り奉らん
- (六) 領を思ひ出したらば御便を賜はれ
- (七) 申上
- (八) 源が
- (九) 明石上は腰胎までして居るなれば、直に迎へ取るべし

心のやみはいとど感ひぬべく侍れば、境まで聞こへて、入道「すきくしき様なれど、思し出でさせ給ふを侍らば」など、御氣色たまはる、いみじう物を哀れ思ひ捨て、所々うち赤み給へる御まみのわたりなど、言はむ方なく見え給ふ。思ひ捨て難き筋もあめれば、今いと疾く見なほし給ひてむ。たゞこの住處こそ見捨てがたけれ。いかどすべき」とて、

- (一〇) 住馴れし浦を立去る此秋の思は
- (一一) 入道が
- (一二) 入道が
- (一三) 明石上の思は
- (一四) 囁を人に見せまいと

源みやこ出でし春のなけきにおとらめや年ふるうらをわかれぬる秋とておし拭ひ給へるに、いとど物覚えすしほたれまさる。起居もあさましようよろほふ。正身の心地は譬ふべき方なくて、斯うしも人に見えじと思ひしづむれど、身





(一) 我身分の賤しきが根本の煩にて  
 (二) 是非もなき事なれど  
 (三) 源が我を置去りにする恨  
 (四) 源の佛が目先にあら  
 (五) 唯涙にくれて居るの  
 (六) 一體何故斯く心配を  
 (七) 求める様な事を仕出した  
 (八) のであらう  
 (九) 問違つた入道の言に  
 (一〇) 従つたのが悪かつた  
 (一一) ヤカましい  
 (一二) 源が明石を愛難い事  
 (一三) 情もあるかと(懐胎の事)  
 (一四) 先にも了簡があらう  
 (一五) 〇明石に對していふ  
 (一六) 入道の了簡を批  
 (一七) 難しあひつゝ  
 (一八) 〇何時明石上を思通  
 (一九) りに縁附り得るかと  
 (二〇) 待通して源を得て大願  
 (二一) 成欲と喜びしに  
 (二二) 三綾附早々  
 (二三) 四入道が  
 (二四) 五いよゝゝ驚駭して  
 (二五) 六ちやんと  
 (二六) 七佛を拜み居たり  
 (二七) 八批難されて  
 (二八) 九歩みつゝ經を讀む  
 (二九) 〇時は  
 (三〇) 突當てて怪我して

の憂きをもとにて、わりなきことなれど、  
 (一) うち棄て給へる恨のやる方なきに、  
 (二) 面影そひて忘れがたきに、  
 (三) たけきこととは、  
 (四) たゞ涙に沈めり。母君も慰めわびて、  
 (五) 母「何に斯く心づくしなる事を思ひ初めけむ。すべてひがくしき人に従ひける  
 (六) 心のおこたりぞ」といふ。入道「あなかまや。思しすつまじき事も物し給ふめれば、  
 (七) さりとも思す所あらむ。思ひ慰めて、御湯などをだにまるれ。あなゆよしや」とて  
 (八) 片隅に寄り居たり。乳母母君など、ひがめる心を言せ合せつゝ、「いつしかいかで  
 (九) 思ふさまにて見奉らむと、年月をたのみ過し、今や思ひかなふとこそ頼み聞え  
 (一〇) つれ、心苦しきことをも、物の初に見るかな」と歎くを見るにも、いとほしけれ  
 (一一) ば、いととぼけられて、晝は日一日寢をのみ寝くらし、夜はすくよかに起き居て、  
 (一二) 珠數の行方も知らずなりにけりとて、手をおし摺りて仰ぎ居たり。弟子どもにあ  
 (一三) ばめられて、月夜に出でて行道するものは、遣水に倒れ入りにけり。よしある岩  
 (一四) の片側に、腰もつきそこなひて、病み臥したる程になむ。少し物まぎれける。

● 着京、夢内  
 (一) 波は古より波の場所也  
 (二) 〇やがて後に出直して  
 (三) 参詣し、願はどきもすべ  
 (四) き由  
 (五) 〇今度は俄の旅にて面  
 (六) 倒なれば  
 (七) 〇都に住吉に  
 (八) 〇都に住吉に  
 (九) 〇都に住吉に  
 (一〇) 〇都に住吉に  
 (一一) 〇都に住吉に  
 (一二) 〇都に住吉に  
 (一三) 〇都に住吉に  
 (一四) 〇都に住吉に  
 (一五) 〇都に住吉に  
 (一六) 〇都に住吉に  
 (一七) 〇都に住吉に  
 (一八) 〇都に住吉に  
 (一九) 〇都に住吉に  
 (二〇) 〇都に住吉に  
 (二一) 〇都に住吉に  
 (二二) 〇都に住吉に  
 (二三) 〇都に住吉に  
 (二四) 〇都に住吉に  
 (二五) 〇都に住吉に  
 (二六) 〇都に住吉に  
 (二七) 〇都に住吉に  
 (二八) 〇都に住吉に  
 (二九) 〇都に住吉に  
 (三〇) 〇都に住吉に

君は、難波の方にわたりて、御祓し給ひて、住吉にも、たひらかにて、色々の願  
 (一) はたし申すべきよし、御使して申させ給ふ。俄に所せうて、みづからはこの度は  
 (二) え詣で給はず、異なる御道遙などなくて、急ぎ入り給ひぬ。二條院におはしまし  
 (三) つきて、都の人も御供の人も、夢の心地して行きあひ、喜び泣きもゆよしきまで  
 (四) 立ち騒ぎたり。女君もかひなきものに思し捨てつる命、嬉しう思さるらむかし。い  
 (五) と美しけにねびとよのほりて、御物思ひの程に、所狭かりし御髪少しへがれた  
 (六) るしも、いみじうめでたきを、今はかくて見るべきぞかしと、御心落ちるにつけ  
 (七) ては、又かの飽かず別れし人の思へりしさま、心苦しう思しやらる。なほ世と共  
 (八) に、かゝる方にて御心のいとまぞなきや。その人の事どもなと聞え出で給へり。  
 (九) 思し出でたる御氣色浅からず見ゆるを、たゞならずや見奉り給ふらむ。わざとな  
 (一〇) らず「身をば思はず」などほのめかし給ふぞ、をかしうらうたく思ひ聞え給ふ。か  
 (一一) つ見るにだに飽かぬ御様を、いかで隔てつる年月ぞと、あさましきまで思はずに、



- (一) 今更自身を須磨へ退去させ世間が恨めし
- (二) 風外の
- (三) 源にまきぞへの人々
- (四) 世間廣くなる
- (五) 源が
- (六) 宮中の人々の感、源の容姿は益々よくなりて、能住居をし来りし機には見えぬ
- (七) 老いばれたる女等
- (八) 服装に格別注意して源に對面す

- (九) ぼつくと
- (一〇) 朱雀が
- (一一) 源の奏樂

とりかへし世の中もいと恨めしうなむ。程もなく、本の御位あらたまりて、數よりほかの權大納言になり給ふ。つぎくの人も、然るべき限は、もとの官かへし賜はり、世に許さるよほど、枯れたりし木の春にあへる心地して、いとめでたけなり。召ありて、内裏に参り給ふ。御前に侍ひ給ふに、ねびまさりて、いかでさる物むつかしき住居に年経給ひつらむ、と見奉る。女房などの、院の御時より侍ひて、老いしらへるどもは、悲しくて、今更に泣き騒ぎめで聞ゆ。上も恥かしうさへ思されて、御よそひなど、殊に引きつくろひて出でおはします。御心地例ならず、日頃經させ給ひければ、いたう衰へさせ給へるを、昨日今日ぞ少しよろしう思されける。御物語しめやかにありて、夜に入りぬ。十五夜の月おもしろう靜なるに、昔の事かきくづし思し出でられて、しほたれさせ給ふ。物心細く思さるよなるべし。朱雀あそびなどもせず、昔聞きし物の音なども聞かで、久しうなりにけるかな」と宣はするに、

- (一) 我は須磨浦に極く三年を經たり伊弉册二神經子を生む伊弉册三歳にして足立たず、伊弉册神代紀に見えたり
- (二) 二神が子を生む前に宮柱を通りて行過ひし故事の如く、分れても斯く龍の恨は忘れてくれよ
- (三) 朱雀の標子
- (四) 源が桐壺の追福に法華八講を行ふべき用意す
- (五) 源が
- (六) 非常に成人して
- (七) 冷泉が源を
- (八) 冷泉の學問
- (九) 王子として恥しからず
- (一〇) 藤壺
- (一一) 少し落附いてから對面したる其時にも
- (一二) 送の人の歸るに托して
- (一三) 歌につまけて見るべし、よる一寄る、夜
- (一四) 君が歎きつゝ夜を明す息が朝露と立昇る程物思にしみ居るかしとと思ひ遣る

源わたつ海に沈みうらぶれひるのこの足たよざりし年は經にけりと聞え給へば、いとあはれに心はづかしう思されて、朱宮ばしらめぐりあひける時しあれば別れし春のうらみのこすないとなまめかしき御有様なり。院の御ために、御八講行はるべき事、まづ急がせ給ふ。春宮を見奉り給ふに、こよなくおよすけさせ給ひて、珍らしう思し悦び給へるを、限なく哀と見奉り給ふ。御才もこよなく勝らせ給ひて、世を保たせ給はむに憚あるまじく、かしこう見えさせ給ふ。入道の宮にも、御心少ししづめて、御對面のほどにも、哀なる事どもあらむかし。誠やかな明石には、返る波につけて御文遣はす。引き隠して細やかに書き給ふめり。源波のよるくゝいかに、歎きつゝあかしのうらに朝ぎりのたつやと人をおもひやるかな



(一)大貳の朝、須磨にて  
 源に歌を贈りし女  
 (二)源が許されし故、退  
 去中に人知れず寄せたる  
 同情が役に立たずなり拍  
 子鼓の形になりて  
 (三)使に次の歌を持たせ  
 やり、難よりとも言はず  
 只目くばせしたるのみに  
 て置いて来させたり  
 (四)須磨にて御尋ね申せ  
 し以來、今迄君を思ひ續  
 けし泣の涙をも目につけ  
 たり  
 (五)手が非常に上つたわ  
 いと  
 (六)五節と見極めて  
 (七)須磨にて訪はれて以  
 來、なまじ訪ひくれたる  
 君を却て恨めしく思ふ  
 (八)五節には一旦深く恨  
 れ込めたる事なれば、歌  
 を贈られて驚かしけれど  
 (九)恨み  
 (一〇)なまじ都に歸りて  
 居ながら無沙汰なれば

かの帥の女の五節、あいなく人知れぬ物思ひさめぬる心地して、まくなぎつくら  
 せてさし置かせけり。  
 五節須磨の浦にこころをよせし船人のやがて朽たせるそてを見せばや  
 手などこよなくまさりにけりと、見おほせ給ひてつかはす。  
 源かへりてはかごとやせまし寄せたりし名残に袖のひがたかりしを  
 飽かずをかしと思しよ名残なれば、驚かされ給ひていとと思し出づれど、この頃  
 はさやうの御舉動更につよみ給ふめり、花散里などにも、たと御消息ばかりにて  
 覺束なく、なかく恨めしけなりとなむ

滯標

● 源氏朝聖帝の爲に法華八講を行ふ。弘徽殿大后病重し。● 朱雀  
 帝位の志。臘月夜に對する愚痴。● 冷泉元服やがて即位。● 源氏内  
 大臣に前右大臣(榮上の父)攝政に任せらる。● 源氏方一門。榮華。二條院  
 改築。● 明石上、明石姫君を生む。● 源氏相人の言を回想す。乳母を擇び  
 て明石に下す。入道父子の喜。● 源氏明石姫君の事を紫上にかす。  
 ● 明石姫君五十日の祝に便を明石に遣る。● 源氏花散里を訪ふ。● 源  
 氏住吉參詣。明石上同時に參詣して、遙に源氏の行装の盛なるを見て驚  
 懼に堪へず。● 六條御息所母子と京。御息所重病。源氏見舞に行き  
 て秋好(源の前齋宮)を托せらる。● 六條御息所逝去。源氏、秋好の世話  
 をやく。● 朱雀秋好の意あり。源氏は秋好を冷泉に奉らんとしして願  
 望に謀る。● 露臺の賛同。

● 法華八講、弘徽殿大  
 后重病  
 (一)須磨にて源が夢に桐  
 齋を見し事  
 (二)桐齋が夢に源に告げ  
 て罪を贖ふに暇なしと言  
 ひし事  
 (三)已に都に歸りたれば  
 (四)追善供養の用意  
 (五)法華八講

さやかに見え給ひし夢の後、院の帝の御ことを心につけ聞え給ひて、いかで彼の  
 沈み給ふらむ罪救ひ奉ることをせむと、思し歎きけるを、かく歸り給ひては、そ  
 の御いそぎし給ふ。神無月に御八講し給ふ。世の人靡き仕う奉ること、昔の様な



(一) 弘徽殿  
 (二) 終に源を懸倒し得ざるが残念と不快に思へど  
 (三) 源を大事にせよとの  
 (四) 源を待たせし其報あ  
 (五) 源を待たせし其報あ  
 (六) 朱雀の眼病も直りた  
 (七) 朱雀の心、我は最早  
 (八) 死期近きにあはるべく  
 (九) 朱雀に呼ばれて  
 (一〇) 政事上の相談も打あ  
 (一一) 宿志の通なれば  
 (一二) 眞底から  
 (一三) 朱雀帝位の志、願  
 (一四) 月夜に對する愚痴  
 (一五) 行する時期が源位の後  
 (一六) 心を細かるを朱雀が  
 (一七) 二二 臘の父太政大臣  
 (一八) 重體になりたるに  
 (一九) 四 我餘命幾許もなき  
 (二〇) 五 今迄と打て變りて  
 (二一) 見すばらしき様にて其方  
 (二二) 六 其方は我を源より  
 (二三) 安く見て居れど我は其方  
 (二四) 事のみ氣にかゝる  
 (二五) 七 臘の望通り再び源  
 (二六) 源が大事にする事は自分  
 (二七) 程には行くまい

り。大后なほ御惱重くおはします中にも、遂にこの人をえ消たすなりぬることと  
 (一) 心病みおほしけれど、帝は院の御遺言を思ひ聞え給ふ。物の報ありぬべくおほし  
 (二) けるを、なほし立て給ひて、御心地すどしくなむ思しける。時々おこり惱ませ給  
 (三) ひし御目もさわやぎ給ひぬれど、おほかた世にえ長くあるまじう、心細きことと  
 (四) のみ、久しからぬ事を思しつゝ、常に召ありて、源氏の君は参り給ふ。世の中の  
 (五) 事なども、隔なく宣はせなどしつゝ、御本意の様なれば、大方の世の人も、あい  
 (六) なく嬉しきことに喜び聞えける。  
 (七) 下り居なむの御心づかひ近くなりぬるにも、尙侍の心ほそけに世をおもひ歎き  
 (八) 給へる、いと哀に思されけり。朱雀大臣亡せ給ひ、大宮も頼もしけなくのみなり  
 (九) 給へるに、我が世ののこり少き心地するになむ、いといとほしう名残なき様にて  
 (一〇) とまり給はむとすらむ。昔より人には思ひおとし給へれど、みづからの志のま  
 (一一) れなき習に、たゞ御事のみなむ哀に覺えける。立ちまさる人、また御本意ありて  
 (一二) (二七)

(一) 朱雀の心  
 (二) なぞ其方には子が無  
 (三) 源の子は直に生むな  
 (四) らんと思ふも残念  
 (五) 源の子ならはまさか  
 (六) 皇太子にも立てらるまじ  
 (七) 臘が  
 (八) 朱雀の  
 (九) 臘に對する臘は次第  
 (一〇) に加はるにつけて  
 (一一) 臘は好男子なれど、  
 (一二) 臘を餘り大事がらざりし  
 (一三) 様子などが分り來て  
 (一四) 臘の心  
 (一五) 我無分別なる娘心  
 (一六) からあの様な辱を出來し  
 (一七) 源氏に迄累を及ぼしたる  
 (一八) はつまらぬ譯なりしと  
 (一九) ● 冷泉元服、やがて即  
 (二〇) 位、源氏方一門の榮華  
 (二一) (二二) 年輩よりは大柄で

見給ふとも 疎ならぬ志はしも、なすらはさらむと思ふさへこそ心苦しけれ」と  
 (一) て、打泣き給ひぬ。女君顔はいとあざやかにほひて、こほるとばかりの愛敬に  
 (二) て、涙もこぼれぬるを、よろづの罪忘れて、哀にらうたしと御覽せらる。朱雀な  
 (三) どか、御子をだに持給へるまじき、口惜しうもあるかな。契深き人のためには、今  
 (四) 見出で給ひてむと思ふも口惜しや。限あれば、たゞ人にてぞ見給はむかし」など、  
 (五) 行末の事をさへ宣はするに、いと恥かしうも悲しうも覺え給ふ。御容貌などなま  
 (六) めかしう清らにて、限なき御志の、年月に添ふやうにもてなさせ給ふに、めで  
 (七) たき人なれど、さしも思へらざりし氣色心ばへなど、物思ひ知られ給ふまよに、な  
 (八) どて我心の若くいはいけなきに任せて、さる驢をさへ引き出でて、我名をば更にも  
 (九) いはす。人の御爲さへなど思し出づるに、いと憂き御身なり。  
 (一〇) 明くる年の二月に、春宮の御元服のことあり。十一になり給へど、程よりおほき  
 (一一) に大人しう清らにて、たゞ源氏の大納言の御顔を、二つにうつしたらむ様に見え  
 (一二) (二二)



(一) 源と冷泉と  
 (二) 藤原は穴へも入りた  
 い心地でひや〜して居  
 る  
 (三) 朱雀も冷泉を  
 (四) 弘徽殿  
 (五) 位を去りては生甲斐  
 なき様なれども、せめて  
 は願ひなりて末長く生き  
 て居たしと思ひての事也  
 (六) 春宮  
 (七) 承香殿女御の腹、朱  
 雀の實子、後に今上  
 (八) 朱雀時代に變りて  
 (九) 左右大臣は一人宛と  
 定りて今關員なく、源を  
 容るべき餘地なき故、員  
 外の官たる内大臣になれ  
 るなり  
 (一〇) 養上の父前右大臣  
 (一一) 今は一層老害して  
 役に立たぬ  
 (一二) 以下前右大臣の就  
 任を強ふる理由、外國に  
 て時變に遭ひて隱遁した  
 る人も治世に出て仕へた  
 る例あり、之を眞の聖賢  
 すと  
 (一三) 漢文帝の時商山の  
 四時といふ四老人の出て  
 仕へたる事

給ふ。いとまばゆきまで光りあひ給へるを、世人めでたきものに聞ゆれど、母宮  
 はいみじうかたはらいたき事に、あいなく御心を盡し給ふ。内裏にもめでたしと  
 見奉り給ひて、世の中譲り聞え給ふべきことなど、懐しう聞え知らせ給ふ。同  
 じ月の廿餘日、御國護のこと俄なれば、大后思しあわてたり。朱雀かひなき様な  
 がらも、心のどかに御覽せらるべき事を思ふなりとぞ、聞え慰め給ひける。坊に  
 は承香殿の御子居給ひぬ。世の中あらたまりて、引きかへ今めかしき事ども多  
 かり。源氏の大納言、内大臣になり給ひぬ。數定まきて、くつろぐ所もなかりけ  
 れば、加はり給ふなりけり。やがて世の政をし給ふべきなれど、馬さやうの事  
 繁き職には堪へずなむとて、致仕の大臣、攝政し給ふべきよし、譲り聞え給ふを、  
 前右大臣病によりて、位をもかへし奉りてしを、いよく老のつもり添ひて、さ  
 かしき事侍らじ」と、うけひき申し給はず。他の國にも、事移り世の定まらぬ折は  
 深き山に跡を絶えたる人だにも、をさまれる世には、白髪をも恥ぢず、出で仕へ  
 (一四) 源氏物語

(一) 再び就任するは差支  
 なしと公私の職一決す  
 (二) 強ひて辭し得ず  
 (三) 弘徽殿隱遁時代は世  
 の中面白からぬにより  
 (四) 無勢力なりしを  
 (五) 頭中將  
 (六) 頭中將の子、左大臣  
 の四君腹  
 (七) 冷泉の妃にせんと  
 (八) 頭中將の子、後に紅  
 梅右大臣といふ  
 (九) 五位を賜はりて  
 (一〇) 頭中將は妻妾ども  
 の腹に子供多く  
 (一一) 夕霧  
 (一二) 養殿上とて、子供  
 けて出仕する也  
 (一三) 養上  
 (一四) 養上の父母  
 (一五) 養上の死後も只源  
 のお蔭で餘榮ありて  
 (一六) 年來の不遇は影も  
 なきまで  
 (一七) 源の太政大臣一變  
 に對する情は昔に變らざ

けるをこそ、まことの聖にはしけれ。病に沈みて返し申し給ひける位を、世の中  
 かはりてまた改め給はむに、更に咎あるまじう、公私定めらる。さる例もあり  
 ければ、すまひはて給はで、太政大臣になり給ふ。御年も六十三にぞなり給ふ。  
 世の中すさまじきにより、かつは籠り居給ひしを、とりかへし花やぎ給へば、御  
 子どもなど、沈むやうに物し給へるを、皆浮び給ふ。とりわきて宰相中將、權  
 中納言になり給ふ。かの四の君の御腹の姫君十二になり給ふを、内裏に參らせむ  
 とかしづき給ふ。かの高砂謠ひし君も、かうぶりせさせて、いと思ふ様なり。腹  
 腹に御子どもいと數多つきくに生ひ出でつよ、賑はしけなるを、源氏の大臣は  
 羨み給ふ。大殿腹の若君は、人より殊に美しくて、内裏春宮の殿上し給ふ。故姫  
 君の亡せ給ひにしなけきを、宮大臣また更にあらためて思し歎く。されどおはせ  
 ぬ名残も、たゞこの大臣の御光に、萬もてなされ給ひて、年頃思し沈みつる名残  
 なきまで榮え給ふ。なほ昔に御心ばへかはらず、折ふしごとくに渡り給ひなどしつ  
 (一七) 源氏物語



- (一) 便宜を興ふる様に源が心掛くる故
- (二) 辛抱して源の歸るを待ち居たる人々
- (三) 年來の體を散ずる位に目をかけて遣らんと
- (四) 二條院の侍女 共に源の内々の妾
- (五) 目をかけてやる
- (六) 出あるき
- (七) 桐壺より讓御の邸
- (八) 氣の毒なる女等

- (九) 明石上明石姫君を生む乳母を明石に下す
- (一〇) 明石上の懷胎の様子如何と
- (一一) 出産は今頃の筈
- (一二) 平産あり
- (一三) 男子は既にあり
- (一四) 女子が珍らしき也
- (一五) 眞淺からず
- (一六) 都て生まれればよかつたと

つ 若君の御乳母たち、さらぬ人々も、年頃の程まかで散らざりけるは、皆然るべき事に觸れつよ、よすがつけむ事を思しおきつるに、幸福人多くなりぬべし。二條院にも、同じごと待ち聞えける人を哀なるものに思して、年頃の胸あくばかりと思せば、中將中務やうの人々には、程々につけつよ情を見え給ふに、御暇なく、外ありきもし給はず。二條院の東なる宮、院の御處分なりしを、二なく改め作らせ給ふ。花散里など様の心苦しき人々住ませむなど、思しあてて繕はせ給ふ。

まことや、かの明石に心苦しけなりしことは如何に、と思し忘るゝ時なければ、公私いそがしき紛に、え思すまよにも訪ひ給はざりけり。三月朔日のほど、この頃やと思しやるに、人知れず哀にて、御使あり。疾く歸り参りて、使者十六日になむ、女にて平かにもものし給ふ」と告げ聞ゆ。珍らしき様にてさへあなるを思すに、おろかならず。などで、京に迎へてかゝる事をもせさせざりけむと、口惜





(一) 皇に配當して人の吉凶禍福を卜ふ術、宿曜家が源の身に占ひし事若葉の巻にあり  
 (二) 源の子は劣りて  
 (三) 中の子母其々異なる中の子母其々異なる  
 (四) 源は帝位に上り國政を視るべき相ありと多數の相人等が言ひし事ありしを、年來けなして追ぎ來りしが  
 (五) 冷泉の即位を本望なりと願はる  
 (六) 自身帝位に上らんとは初から思はず  
 (七) 源の心、桐壺が皇子の中に勝れて我を愛せられながら平人にせられしを思へば、我は帝位に是なき身なり  
 (八) 帝位に上れる冷泉を源の子と人は知らねど  
 (九) 今後の事につきての相人の諛言を思へば  
 (一〇) 明石上も免れぬ宿縁なればこそ頑固なる入道も及ばぬ高き望を懷きしならん  
 (一一) 其ならば、將來皇后に生れたるは勿體なき事也

しう思さる。宿曜に御子三人、帝、后、必す竝びて生れ給ふべし、中のおとりは、太政大臣にて位を極むべしと、勸へ申したり、中のおとりばらに、女は出で給ふべしとありし事、さして叶ふなめりと、おほかた上なき位にのほり、世をまつりごち給ふべき事、さばかり賢かりし數多の相人どもの聞え集めたるを、年頃は世の煩はしさに皆思し消ちつるを、當帝の斯く位にかなひ給ひぬる事を、思ひのごと嬉しとおほす。みづからはもて離れ給へる筋は、更にあるまじきことと思す。あまたの御子達の中に、勝れてらうたきものに思したりしかど、たゞ人に思しおきてける御心を思ふに、宿世遠かりけり、内裏の斯くておはしますを顯に人の知ることならねど、相人の言空しからずと、御心のうちに思しけり。いま行末のあらましごとを思すに、住吉の神のしるべ、まことにかの人も世になべてならぬ宿世にて、ひがくしき親も、及びなき心をつかふにやありけむ、さるにては、かしくき筋にもなるべき人の、怪しき世界に生れたらむは、いとほしくかたじけな

(一) も少し過ぎて  
 (二) 田舎ではよき乳母もあらじと察して  
 (三) 桐壺に仕へし宣旨と  
 (四) 宣旨の儀  
 (五) 夫のるくに構はぬなるべし  
 (六) 事情を知りて成機會に源に話したる人  
 (七) 乳母に召抱へたき趣  
 (八) 宣旨の儀は  
 (九) 前後の分別もせず  
 (一〇) 源の所縁といふに認め込みて  
 (一一) 宣旨の儀の身上を  
 (一二) 明石へ遣はす  
 (一三) 宣旨の儀の所へ源が其人柄を見に  
 (一四) 源は承諾はしなが  
 (一五) 源の自ら來れるが有難くて  
 (一六) 萬事仰の通  
 (一七) 出發を  
 (一八) 片田舎へ故を遣るの  
 (一九) 是は思ふ仔細ありての事也  
 (二〇) 源自身も、思ひも上らぬ住居をしたる例を思ひて暫く辛抱せよ

くもあるべきかな、この程過して迎へてむ、と思して、東の院急ぎ遣らすべきよし催し仰せ給ふ。さる所にはかぐしき人もありがたからむを思して、故院に侍ひし宣旨の女、宮内卿の宰相にて亡くなりし人の子なりしを、母なども亡せて、幽なる世に經けるが、はかなき様にて子産みたりと聞し召しつけたるを、知るたよりありて事の序にまねび聞えける人召して、さるべきさまに宣ひ契る。だ若くて、何心もなき人にて、且暮人知れぬあばらやに眺むる心細さなれば、深うも思ひたどらず、この御あたりのことを偏にめでたう思ひ聞えて、參るべきよし申させたり。いとあはれに且は思して、いだしたて給ふ。物のついでに、いみじう忍び紛れておはしまいたり。さは聞えながら如何にせましと思ひ亂れけるを、いとかたじけなきに、よろづ思ひ慰めて、眞たゞ宣はせむまゝに」と聞ゆ。よろしき日なりければ、急がし立て給ひて、眞怪しう思遣なきやうなれど、思ふ様ことなる事にてなむ。自らも、覺えぬ住居にむすほはれたりし例を思ひよそへて、暫



(一) 宣旨の候は内裏にも奉公せし事あれば源も時見し事ありしが

(二) 家

(三) どうして此様を處に居られたらう

(四) 棄て置かれず

(五) 田舎へ遣りたくなく

(六) 宣旨の候の心

(七) 今迄親しくなくとも別れはつら

(八) 跡について行きたい

(九) 私への別れを惜むに

略して、實は明石上の處へも出なされたいのであ

らう

(一〇) 出来過ぎて居る

(一一) 乳母が出發の際、

京を離るゝ迄は車にて行

けり

(一二) 源の親しき人

(一三) 赤兒の守刀

(一四) 明石へ持たせやる手紙にも大事にせよと

(一五) 生兒を授手元引取りて有つるは何時の事ならん待遠し、岩とは生兒を祝ひていへり、君が代は天の羽衣袴に來て舞つとも麗きぬ麗なるらん

(一六) 乳母が

(一七) 都の方に

(一八) 明石上母子を大事に思ふ

(一九) 乳母の心、源の心に大事に思はるゝも尤

(二〇) 斯る田舎へ下りて

(二一) 乳母が生兒を

(二二) 明石上

(二三) 源の仕向きの態なるに上りて

しは念じ給へ」など、事の有様委しう語らひ給ふ。上の宮仕時々せしかば、見給ふ折もありしを、いたう衰へにけり。家のさまも言ひ知らず荒れ惑ひて、さすがに大なる所の、木立など疎ましけに、いかで過しつらむと見ゆ。人様若やかにをか

しければ、御覽じ放たれず。とかく戯れ宣ひて、御取りかへしつべき心地こそす

れ。いかに」と宣ふにつけても、けに同じうは御身近くも仕う奉り馴れば憂き身も

慰みなまし、と見奉る。

「かねてより隔てぬ中とならばねど別はをしきものにぞありける

慕ひやせまし」と宣へば、うち笑ひて、

乳母うちつけのわかれを惜むかごとにて思はむかたに慕ひやはせぬ

馴れて聞ゆるをいたしと思す。

車にてぞ京のほどは行き離れける。いと親しき人さし添へて、ゆめ漏すまじく口

がため給ひてつかはす。御はかし、然るべき物など、所狭きまで思しやらぬ隈な

し。乳母にも、ありがたう細やかなる御いたはりの程淺からず。入道の思ひかし

づき思ふらむ有様、思遣るもほよるまれ給ふこと多く、また哀に心苦しくも、唯

この事の御心にかよるも淺からぬにこそは。御文にも、おろかにもてなし給ふま

じと返すぐいませ給へり。

源いつしかも袖うちかけむをとめ子が世をへてなでむ岩のおひさき

津の國までは舟にて、それより彼方は馬にて急ぎつきぬ。入道待ちとり、喜びか

しこまり聞ゆる事限なし。そなたに向きて拜み聞えて、ありがたき御心ばへを思

ふに、いよくいたはしう、怖ろしきまで思ふ。兒のいとゆよしきまで美しくお

はする事、たぐひなし。けにかしこき御心にかしづき聞えむと思したるは宜なり

けり、と見奉るに、あやしき道に出で立ちて、夢の心地しつる歎もさめにけり

いと美しくうらうたく覺えて、あつかひ聞ゆ。子持の君も、月頃物をのみ思ひ沈み

て、いとよわれる心地に、生きたらむとも覺えざりつるを、この御心おきての、

(一) 源の心付け

(二) 源が

(三) 明石の生兒の事

(四) 明石へ持たせやる手紙にも大事にせよと

(五) 生兒を授手元引取りて有つるは何時の事ならん待遠し、岩とは生兒を祝ひていへり、君が代は天の羽衣袴に來て舞つとも麗きぬ麗なるらん

(六) 乳母が

(七) 都の方に

(八) 明石上母子を大事に思ふ

(九) 乳母の心、源の心に大事に思はるゝも尤

(一〇) 斯る田舎へ下りて

(一一) 乳母が生兒を

(一二) 明石上

(一三) 源の仕向きの態なるに上りて

(一四) 明石へ持たせやる手紙にも大事にせよと

(一五) 生兒を授手元引取りて有つるは何時の事ならん待遠し、岩とは生兒を祝ひていへり、君が代は天の羽衣袴に來て舞つとも麗きぬ麗なるらん

(一六) 乳母が

(一七) 都の方に

(一八) 明石上母子を大事に思ふ

(一九) 乳母の心、源の心に大事に思はるゝも尤

(二〇) 斯る田舎へ下りて

(二一) 乳母が生兒を

(二二) 明石上

(二三) 源の仕向きの態なるに上りて



- (一) 使を慰にもてなす
- (二) 使が早く歸らんと
- (三) 手紙に書き續けて
- (四) 私一人では元の世話が行届かぬ故、君の十分なる御養育を望み奉る
- (五) 源が此返事を見て明石の事が氣にかかり
- (六) 源氏明石姫君の事を案上に明す
- (七) 實には今迄別段改めて話しもせぬ故、跡で知れてはなほぬと思ひて
- (八) 明石で斯様々々
- (九) 物は甘く行かぬものぢや
- (一〇) 出来ればよいと思ふ其方の腹には出来ず
- (一一) 女に女兒なれば餘計に氣障り也
- (一二) 標はずとも上げれどそもなほぬ
- (一三) 常に情氣を戒められねばならぬ様な私の性質が我ながら嫌になる
- (一四) 誰がさせるのか知らぬが、我が思ひもよらぬ事を
- (一五) 源が思ひもよらぬ事を當推量して情氣する

少し物思ひ慰めらるゝにぞ、頭もたけて、御使にも二なき様の志をつくす。疾く参りなむと急ぎ苦しければ、思ふ事ども少し聞えつどけて、  
 明石上ひとりしてなづるは袖の程なきに覆ふばかりの蔭をしごまつ  
 と聞えたり。あやしきまで御心にかより、ゆかしう思さる。  
 女君には、言にあらはしてをさく、聞え給はぬを、聞き合せ給ふ事もこそと思して、  
 尋ね知らでもありぬべき事なれど、然は得棄つまじきわざなりけり。呼びにやりて見せ奉らむ。憎み給ふなよ」と聞え給へば、面うちあかみて、  
 尋ね知らでもありぬべき事なれど、然は得棄つまじきわざなりけり。呼ばいつ習ふべきにか」と怒じ給へば、いと能くうち笑みて、  
 思はずにぞ見え給ふや。人の心より外なる思ひやりごととして、物怨

- (一) 紫の心
- (二) 互の心中
- (三) 明石上の事も源が一時の慰に過ぎぬと考へて情氣の角も折れる
- (四) 明石上
- (五) 尋ねるは
- (六) 餘り早く話したる
- (七) 勸進へすべければ
- (八) 明石上の
- (九) 明石上が詠みし歌
- (一〇) 確には見ざれど
- (一一) 紫の心、我は別離を愁む外他意なかりしに源は一時の慰にもせよ愛を別ちたりと
- (一二) 源に標はず側を向きて
- (一三) 源の明石にての「煙は同じ方に歸かん」の歌を語られたれば其詞をとりてよめり、思ふ方に歸くといふ其仲睦しき烟にはあちねど、我こそ烟となりて先に消えて仕舞ひたし

じなどし給ふよ。思へば悲し」とて、果々は涙ぐみ給ふ。年頃飽かず戀しと思ひ聞え給ひし御心の中ども、折々の御文の通ひなど思し出づるには、萬の事すさびにこそあれと、思ひ消たれ給ふ。この人をかうまで思ひやり言とふは、なほ思ふ様の侍るぞ。まだきに聞えば、またひが心得給ふべければ」と宣ひさして、  
 からのをかしかりしも、所がらにや、珍しう覺えきかし」など語り聞え給ふ。哀なりし夕の煙、いひし事など、まほならねど其の夜の容貌ほの見し、琴の音のなまめきたりしも、すべて心とまれる様に宣ひ出づるにも、  
 我は我とうちそむきながめて、哀なりし世の有様かな」と、獨言のやうにうち歎きて、  
 思ふどち靡くかたにはあらずとも我ぞけふりにさきだちなまし  
 何とかや。こころ憂や。



- (一) 我が田舎迄経過りて苦勞するも誰故ぞ、皆其方故では無いか
- (二) どうかして我志を見せたい
- (三) 長い間には自ら分る事なれど、其迄命が續けばよいが
- (四) 畢竟其方を思ふ故
- (五) 紫に強けと
- (六) 明石が琴の上手なりとよものが癪に障るのか
- (七) 紫の性質、大機にて優しけれど
- (八) 明石姫君五十日の祝
- (九) 源が
- (一〇) 源の心
- (一一) 都にての事なれば
- (一二) あんな田舎に
- (一三) 生れた事よ
- (一四) 生児が
- (一五) 女なる故源が非常に大事にして
- (一六) 源の心、我が須臾に著醜したるも此子の生るべき爲なりしならんと思ふ
- (一七) 明石への
- (一八) 五十日の祝の當日

誰により世をうみやまに行きめぐり絶えぬ涙にうきしづむ身ぞ  
 (一) いでや、いかでか見え奉らむ。命こそかなひ難かきべいものなめれ。はかなき  
 (二) 事にて人に心おかれじと思ふも、たゞひとつ故ぞや」とて、箏の御琴引き寄せて、か  
 (三) き合せささび給ひて、そのかし聞え給へど、かの勝れたりけむもねたきにや、手  
 (四) も觸れ給はず。いとおほどかに、美しうたをやぎ給へるものから、さすがに執念  
 (五) き所つきて、物怨じし給へるが、なかく愛敬づきて腹だちなし給ふを、せかし  
 (六) う見所ありと思す。  
 (七) 五月五日ぞ、五十日には當るらむ、と人知れず數へ給ひて、ゆかしう哀におほし  
 (八) る。何事も、如何にかひある様にもてなし、嬉しからまし、口惜しのわざや、然  
 (九) る所にしも、心苦しきさまにて、出で來たるよ、と思す。男君ならましかば、斯  
 (一〇) うしも御心にかへ給ふまじきを、かたじけなういとほしう、わが御宿世もこの御  
 (一一) 事につけてぞかたはなりける、と思さる。御使出し立て給ふ。御必すその日違へ  
 (一二) (一七) (一八)

- (一) 源の心づりやる事
- (二) 實用向の
- (三) 何時も變化なき田舎  
ては今日の祝日にも何を  
して平時と區別するな  
ん、あやめ一區別、實  
源の事を心配して居る
- (四) ぼんやりする程其方  
の事を心配して居る
- (五) 都に上れ
- (六) 来ても氣遣を事は決  
してあるまじ
- (七) 生甲斐あるを喜ぶ癖  
し泣するがひつくるは  
べそかく事、源の都上り  
に入道かひつくりし事前  
にあり
- (八) 五十日の祝の用意
- (九) 闇夜の錦にて榮なく  
終るべかりし也
- (一〇) 宣旨の煩
- (一一) 明石上の氣立に惚  
れて力にして
- (一二) 此乳母に劣らぬ侍  
女を縁を求めて抱へては  
あれど老罷れたる奉公人  
の行處なきが來居る位で  
母は遙に上品で氣位も高  
し
- (一三) 其に比すれば、乳  
母は遙に上品で氣位も高  
し
- (一四) 實のある世間咄
- (一五) 源氏

す罷り著け」と宣へば、五日に行きつきぬ。思しやることも、有難うめでたき様  
 (一) て、まめくしき御とぶらひもあり。  
 (二) 海松や時ぞともなきかけに居て何のあやめもいかにわくらむ  
 (三) 心のあくがるよまでなむ。なほ斯くてはえ過すまじきを、思ひ立ち給ひね。  
 (四) りとも後めたきことはよも。  
 (五) と書い給へり。入道例の喜び泣きして居たり。かよるをりは、生けるかひもつく  
 (六) り出でたる、理なりと見ゆ。こよにも、よろづ所狭きまで思ひ設けたりければ、こ  
 (七) の御使なくば、闇の夜にてこそ暮れぬべかりけれ。乳母も、この女君の哀に思ふ  
 (八) やうなるをかたらひ人にて、世の慰にしけり。をさく劣らぬ人も、類に觸れ  
 (九) て迎へ取りてあらずれど、こよなく衰へたる宮仕人などの、巖の中尋ぬるが、落  
 (一〇) ちとまれるなどこそあれ、これはこよなうこめき思ひあがれり。聞き所ある世の  
 (一一) 物語などして、大臣の君の御有様、世にかしづかれ給へる御覺の程も、女心地に  
 (一二) (一三) (一四) (一五)



(一) 此程源に心配する  
 児を設けた我身もえらい  
 ものぢやと明石上も思ふ  
 機になれり  
 (二) 明石上と乳母と  
 (三) 乳母  
 (四) 他人は  
 (五) 運懸きは自分計  
 (六) 源の手紙の中に  
 (七) 片田舎に寝む我なれ  
 ば今日の歌にも訪来る人  
 もなし、いかに如何に  
 五十日に  
 (八) 御慰問を力に僅に履  
 きゆく命  
 (九) 吾兒の爲安心のなる  
 機を御計ありたし  
 (一〇) 源が明石上の返事  
 を  
 (一一) 雲上  
 (一二) 熊野の浦上りを  
 ちて漕ぐ船の我をば餘所  
 に隔てつる哉  
 (一三) 其機に腹立つのか  
 (一四) 是は只是だけの事  
 (一五) 須磨や明石の  
 (一六) 聞流しにする事が  
 出来ぬのか

任せて限なく語りつくせば、けにかく思し出づばかりの名残とどめたる身もいと  
 たけく、やうく思ひなりけり。御文諸共に見て心のうちに、あはれ人は、斯う  
 こそ思の外にめでたき宿世はありけれ、うきものは我身にこそありけれ、と思ひ  
 つどけれけれど、「乳母の事はいかに」など、細やかに訪はせ給へるもかたじけなく、  
 何事も慰めけり。御返には、

明石かすならぬ島がくれに鳴く鶴をけふもいかにと訪ふ人ぞなき  
 萬に思ひ給へむすほほると有様を、斯くたまさかの御なくさめにかけ侍る命  
 のほどもはかなくなむ。けに後やすく思ひ給へ置くわざもかな。

と、まめやかに聞えたり。うちかへし見給ひつよ、  
 「あはれ」と長やかにひとりご  
 ち給ふを、女君後目に見おこせて、  
 「浦よりをちに漕ぐ船の」と、忍びやかにひと  
 りごちながめ給ふを、  
 「まことに斯くまでとりなし給ふよ。こは唯斯ばかりのあ  
 はれぞや。所の様などうち思ひやる時々、來しかたのこと忘れ難き獨言を、  
 よう  
 (二五)  
 (二六)





- (一) 貴人と雖も斯程には書きかねる程なるを見て
- (二) 是だから源の執心もせられるのぢやと
- (三) 花散里を訪ふ
- (四) 紫の機嫌を取る中に
- (五) 九つ無沙汰したるが
- (六) 出歩きを憚るのみならず
- (七) 花散里が無事なる女故、安心して無沙汰もして居る也
- (八) 源が察して世話するを力にて生活する
- (九) 如何に無沙汰しても口説ちしくすね恨む事はせぬ故
- (一〇) 花散里の住居は
- (一一) 姉の隠居殿
- (一二) 花散里の居間
- (一三) 言ひ盡されず
- (一四) 花散里が源に對して恥かしけれど
- (一五) 今迄居たなりにて

こそ聞き過い給はねなど、恨み聞え給ひて、上包ばかりを見せ奉らせ給ふ。手などのいと故づきて、やむごとなき人苦しげなるを、斯かればなめりと思す。斯くこの御心とり給ふ程に、花散里をかれはて給ひぬるこそいとほしけれ。公事どもしげく、所せき御身に、思し憚るに添へても、珍しく御目驚く事のなき程思ひしづめ給ふなりけり。五月雨の徒然なるころ、公私物静なるに、思し起して渡り給へり。餘所ながらも、旦暮につけてよろづに思しやり訪ひ給ふをたのみにて、過い給ふ所なれば、今めかしう心憎きさまにそばみ恨み聞え給ふべきならねば、心やすけなり。年頃にいよく荒れまさり、凄けにておはす。女御の君に御物語聞え給ひて、西の妻戸には夜ふかして立寄り給へり。月おほろにさし入て、いとど艶なる御ふるまひ、盡きもせず見え給ふ。いとどつよましけれど、端近う眺め給ひける様ながら、のどやかにて物し給ふけはひいとめやすし。水鶏のいと近う鳴きたるを、

- (一) 月を源に比したり
- (二) 末を言はずに香込んて仕舞ふ
- (三) どの女も其々捨て難き處あるかな
- (四) 人が叫けはとて、無暗に戸をあけて迎へたらば、飛んでもなき人が入らむであらう
- (五) 口では言へど
- (六) 花散里が淨氣をするかと疑ふ譯ではなし
- (七) 源の歸りを
- (八) 源が仇には思はぬ
- (九) 談別の時の源の歌
- (一〇) 別れをなせ甚しく恐みしならん
- (一一) 源が都に居ても我如き者は矢張違はれぬ悲しきは同じなるに
- (一二) 何處から取出すのか甘い事を言つて源が花散里を慰める
- (一三) 太宰大貳の娘
- (一四) 思ひて五節に逢ふ事出来ず
- (一五) 源を思ひ切り得ぬを、親が異見すれど、縁附を思ひ切り居れり
- (一六) 懼なく人を置き得る邸が出来たらば五節如き女を置いて、業等に子が出たら彼等に世話して貰はんと

水鶏だに驚かさずばいかにして荒れたる宿に月をいれまし  
いとなつかしう言ひ消ち給へるぞ、とりぐに捨てがたき世かな、斯かるこそな  
かなか身も苦しけれ、と思す。  
源「おしなべてたよく水鶏に驚かばうはの空なる月もこそいれ  
後めたう」とはなほ言に聞え給へど、あだくしき筋など、疑しき御心ばへにはあ  
らず。年頃待ち過し聞え給へるも、更におろかには覺えざりけり。「空ながめそ」  
と、たのめ聞え給ひし折の事ども、宣ひ出でて、花散などて、類あらじと、いみ  
じう物を思ひ沈みけむ。憂き身からは同じ歎かしさにこそ」と宣へるも、おいら  
かにらうたけなり。例のいづこの御言の葉にかあらむ、盡せず語らひ慰め聞え  
給ふ。かやうの序にも、かの五節をおほし忘れず、また見てしがなと、心にか  
給へれど、いと難き事にてえ紛れ給はず。女は物思ひ絶えぬを、親はよろづに思  
ひ言ふ事もあれど、世に經むことを思ひ絶えたり。心やすき殿づくりしてば、か



(一) 二條の東の院  
 (二) 分擔させて工事を急がしむ  
 (三) 臘月夜を源がまだ思ひ切れず  
 (四) 又よりを戻す氣があれど  
 (五) 却て窮屈に物足らず源が思ふ、源が朱雀と常に同居せるなるべし  
 (六) 朱雀は氣樂になりて  
 (七) 相變らずなれど  
 (八) 承香殿女御  
 (九) 従来臘月夜に壓倒せられたりしに  
 (一〇) 我子が東宮たるに  
 (一一) 東宮の方に居る  
 (一二) 源氏  
 (一三) 淑茶舎と梨壺は重隣なれば、近所の好みにて源が春宮の世話を焼く  
 (一四) 藤壺は尼なれば皇太后にする譯にもゆかざ

やうの人集へて、もし思ふ様にかしづき給ふべき人も出でものし給はば、さる人の後見にもとおほす。かの院のつくりざま、なか／＼見所多く今めいたり。由ある受領などを擇りて、あて／＼に催し給ふ。尙侍の君を、なほえ思ひはなち聞え給はず。こりすまに立ちかへる御心ばへもあれど、女は憂きに懲り給ひて、昔の様にあひしらへ聞え給はず。なか／＼所狭う。さう／＼しう世の中を思さる。

院はのどやかに思しなりて、時々につけて、をかしき御遊など、好しけにておはします。女御更衣みな例のごと侍ひ給へど、春宮の御母女御のみぞ、とり立てて時めき給ふこともなく、かんの君の御覺におしけたれ給へりしを、斯くひき違へめでたき御さいはひにて、離れ出でて宮に添ひ奉り給へる。この大臣の御宿直所は、昔の淑茶舎なり。梨壺に春宮はおはしませば、近隣の御心よせに、何事も聞え通ひて、宮をもうしろみ奉り給ふ。入道後の宮、御位をまた改め給ふべ

(一) 律神  
 (二) 藤壺附の役人任命せられたり  
 (三) 佛いじりを  
 (四) 藤壺が世に懼りて宮中に入らず冷泉をも見ざりしに、今は参内も自由なるを見て  
 (五) 弘徽殿  
 (六) 源氏  
 (七) 弘徽殿が輸入るに位よく世話を焼き  
 (八) 弘徽殿を勝れり  
 (九) 紫の父  
 (一〇) 源に對する情が冷にて  
 (一一) 源が不快に思ひて  
 (一二) 一般に對しては高遠なく情をかくれど  
 (一三) 兵部卿には  
 (一四) 葵の父と源と  
 (一五) 頭中將の娘、弘徽殿女御といふ、母左大臣四君  
 (一六) 女御として入内  
 (一七) 太政大臣骨折り  
 (一八) 紫の異腹の妹  
 (一九) 父が入内せしめん希望にて

きならねば、太上天皇になすらへて、御封賜はらせ給ひ、院司どもなりて、様殊にいづくしう、御行功徳のことを、常の御營にておはします。年頃世にはどかりて出入もかたく、見奉り給はぬを、いぶせく思しけるに、思す様にて参りまかして給ふも、いとめでたければ、太后は憂きものは世なりけりと思し歎く。大臣は事に觸れて、いと恥かしけに仕う奉り、心よせ聞え給ふも、なか／＼いとほしけなるを、世の人も安からず聞えけり。兵部卿親王、年頃の御心ばへのつらく思はずにて、唯世の聞をのみ思し憚り給ひし事を、大臣は憂きものに思しおきて、昔の様に睦び聞え給はず。なべての世には、普くめでたき御心なれど、この御あたりは、なか／＼情なきふしも打交せ給ふを、入道の宮は、いとほしう本意なき事に見奉り給ふ。世の中の事たど、半を別けて、太政大臣この大臣の御まよなり。權中納言の御女、その年の八月にまるらせ給ふ。祖父大臣居起ちて、儀式などいとあらまほし。兵部卿の宮の中の君も、さやうに心さしてかしづき給ふ



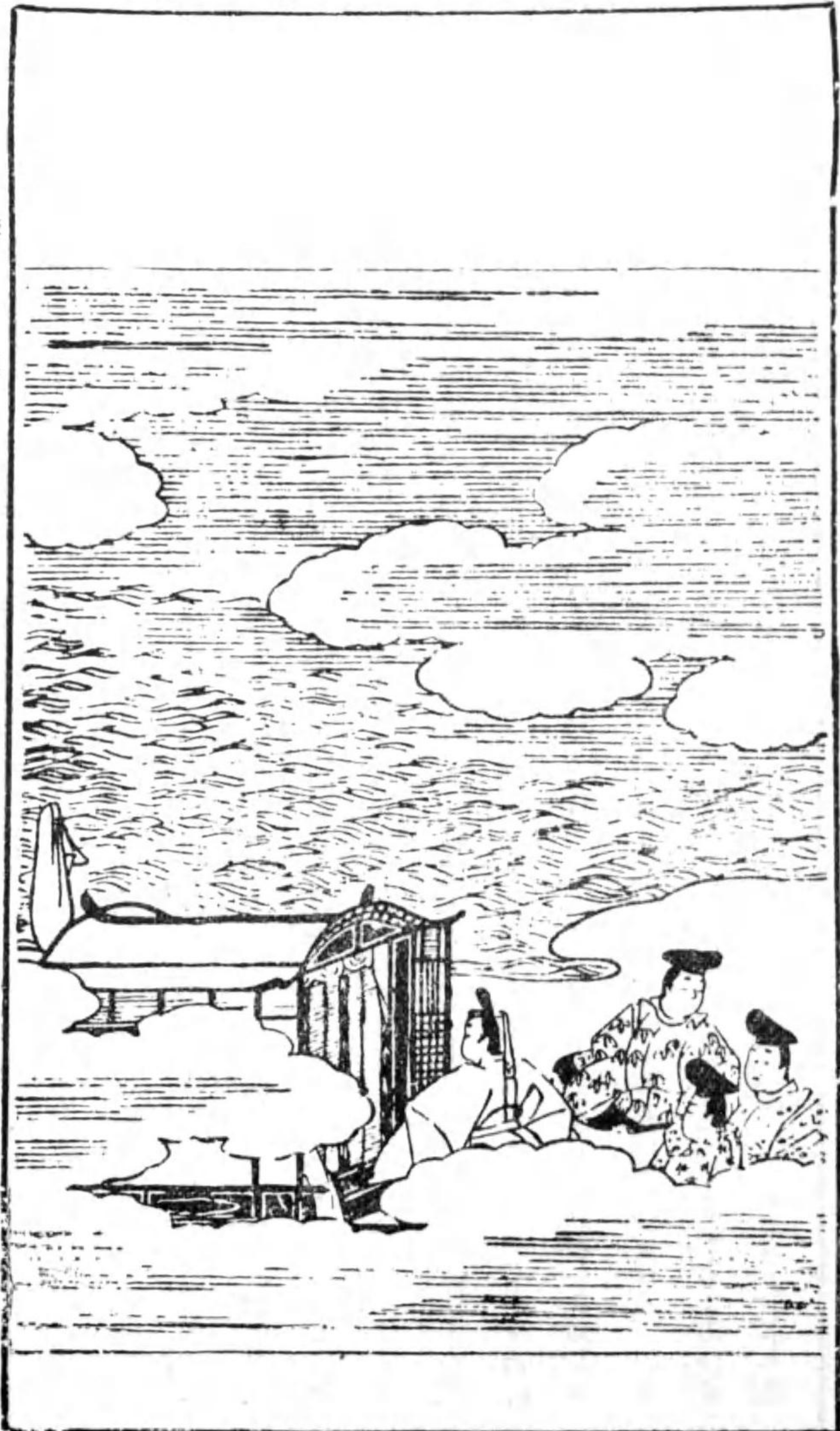
(一)源は中君の幸運をも  
望まざ取持もせず  
(二)兵部卿が困るべし

(一)源氏住吉参詣、明石  
上同時に参詣す  
(二)源が  
(三)明石上例年住吉に参  
詣せしに  
(四)院と常例の参詣と  
兼ねて住吉に参れり  
(五)大廳を以て参詣する  
源の一行

(七)つまらぬ  
(八)明石上の感  
(九)日もあるに、丁度源  
と都合ひて  
(一〇)我も萬里他人では  
無けれど  
(一一)つまらぬ下人でも  
(一二)今日のお供を光榮  
に思へるに  
(一三)我は何の因果が

名高きを、大臣は、人よりまさり給へとしも思さずなむありける。如何し給はむとすらむ。

その秋住吉に詣で給ふ。願どもはたし給ふべければ、いかめしき御ありきにて、世の中ゆすりて、上達部殿上人、我もくと仕う奉り給ふ。折しもかの明石の人年ごとの例の事にて仕う奉るを、去年今年さはる事ありて怠りけるかしこまり、取重ねて思ひ立ちけり。船にて詣でたり。岸にさし著くる程見れば、のよしりて詣で給ふ人のけはひ、渚に満ちて、いつくしき神寶をもて續けたり。樂人十列など、装束を整へ容貌を擇びたり。「誰が詣で給へるぞ」と問ふめれば、「内大臣殿の御願はたしに詣で給ふを、知らぬ人もありけり」とて、はかなき程の下司だに心地よけに打笑ふ。けにあさましう、月日もこそあれ、なかなくこの御有様を遙に見奉るに、身の程口惜しうおほゆ。流石にかけ離れ奉らぬ宿世ながら、斯く口惜しき際のものだに、物思ひなけにて、仕う奉るを色ふしに思ひたるに、何の罪深き





(一) 源の事を常に心にかけ居ながら、なほ是程の感を知らずに今日出て来しるなちん  
 (二) 黄青色の袍  
 (三) 伊豫介の弟息子、源退去の時「思へばつちし賀茂の瑞籬」の歌よみし人  
 (四) 衛府の次官  
 (五) 赤色は五位の袍  
 (六) 明石の見知れる人以前に變りて華露に  
 (七) 心配無げにて  
 (八) 源の  
 (九) 却て氣がもめて  
 (一〇) 源融の例に倣ひて  
 (一一) 童の護衛武官  
 (一二) 其童隨身が  
 (一三) 童  
 (一四) 夕霧  
 (一五) 夕霧

身にて、心にかけて覺束なう思ひ聞えつよ、斯かりける御響をも知らで立出でつらむ、など思ひ續くるに、いと悲しうて、人知れずしほたれけり。松原の深緑なる中に、花紅葉をこき散したると見ゆる、袍衣の濃き薄き數知らず。六位の中にも藏人は青色著く見えて、かの賀茂の瑞籬うらみし右近の丞も、靱負になりて、ことごとくしけなる隨身具したる藏人なり。良清も同じすけにて、人よりことに物思ひなき氣色にて、おどろくしき赤衣姿いと清けなり。すべて見し人々ひきかへ花やかに、何事思ふらむと見えてうち散りたるに、若やかなる上達部殿上人の、我もくと思ひ挑み、馬鞍などまで飾をとよのへ磨き給へるは、いみじき見物に田舎人も思へり。御車を遙に見やれば、なかく心やましくして、戀しき御影をもえ見奉らず。河原の大臣の御例をまねびて、童隨身を賜はり給ひける。いとをかしけに装束き、みづら結ひて、紫裾濃の元結なまめかしう、長姿とよのひ美しけにて十人、様殊に今めかしう見ゆ。大殿腹の若君、限なくかしづき立てて、馬

(一) 揃ふ様に調べて  
 (二) 一人々々禮をかへて  
 (三) 夕霧の櫛子及びも無く立派なるにつけても、我子の人數ならぬを恐む  
 (四) 行末の冥助を祈りて  
 (五) 攝津守  
 (六) 源の接待  
 (七) 外の大員  
 (八) 明石上は手持無沙汰なれば  
 (九) 此處ぎの中で  
 (一〇) 神も我に注意もなさるまじ  
 (一一) 中途はんばなり  
 (一二) 源は明石上の事は九ぞ知らず  
 (一三) 神事  
 (一四) 願叶はと斯くせんと言ひし願期以上の事をして  
 (一五) 惟光如き須磨迄も御伴せし人は  
 (一六) 源が一寸出た處で惟光歌を申上ぐ  
 (一七) 須磨の事を思へば今昔の感に堪へず、まつ先づ、松

添童のほど、皆作りあはせて、様を代へて装束きわけたり。雲井遙にめでたく見ゆるにつけても、若君の數ならぬさまにて物し給ふをいみじと思ふ。いよく御社の方を拜み聞ゆ。國の守参りて、御まうけ、例の大臣などの参り給ふよりは、殊に世になく仕う奉れりけむかし。いとほしたなければ、明石立ちまじり、數ならぬ身の聊の事せむに、神も見入れ數まへ給ふべきにもあらず。歸らむにも中空なり。今日は難波に船さしとめて、祓をだにせむ」とて漕ぎ渡りぬ。君は夢にも知り給はず、夜一夜いろくの事をせさせ給ふ。まことに神の喜び給ふべき事を爲盡して、來しかたの御願にもうちそへ、あり難きまで遊びのよしり明し給ふ。惟光やうの人は、心のうちに神の御徳をあはれにめでたしと思ふ。あからさまに立ち出で給へるところに侍ひて、聞え出でたり。

惟光 すみよしのまつこそものは悲しけれかみよの事をかけて思へば  
 (一七) けにと思し出でて、







- (一) 八歌ならぬ我は何事にも甲斐なき身なるに、なせ源の如き高貴の人を戀ひ初めたのであらう、なれば一何は、難波
- (二) 明石上が
- (三) 賦に用ひたる木綿につけて此歌を源に奉る
- (四) 明石上に逢ひたく
- (五) 今日悲しきは昔の落磯時代似たり、田原といふ名はあれども此歌の源を防ぐに由なし
- (六) 明石上の事が
- (七) 遊女
- (八) 源の心
- (九) 相手の人柄による事也
- (一〇) 何方でもよい事でも輕薄なものは好ましからぬに
- (一一) 遊女等が得意げに
- (一二) 明石上は源をやり過して、翌日よき日なれば
- (一三) 源の有様を見たるによりて

明石敷ならでなにはのこともかひなきになどみをつくし思ひそめけむ  
 (一) 田原島に御禊仕う奉る、祓のものにつけて奉る。日暮がたになりゆく。夕潮満ち  
 (二) 来て、入江の鶴も聲をしまぬほどの哀なる折からなればにや、人目もつよますあ  
 (三) ひ見まほしくさへ思さる。  
 (四) 源つゆけさのむかしに似たる旅衣たみの島の名にはかくれず  
 (五) 道のまよに、かひある道遙遊びのよしり給へど、御心にはなほかよりて思しやる。  
 (六) あそびどもの集ひ参れるも、上達部と聞ゆれど、若やかに事好しけなるは、皆目  
 (七) とどめ給ふべかめり。されど、いでやをかききことも物の哀も、人がらこそあ  
 (八) べけれ、なのめなる事をだに、少しあはき方によりぬるは、心とどむる便もなき  
 (九) ものをと思すに、おのが心をやりて、由めきあへるも疎ましう思しけり。  
 (一〇) かの人は過し聞えて、又の日ぞよろしかりければ、御幣奉り、程につけたる願  
 (一一) どもなど、かつく果しける。またなかく物思ひそはりて、且暮口惜しき身を  
 (一二) (一三)

- (一) 源より明石へ
- (二) 近き内に明石上を引取るべき
- (三) 明石上の心
- (四) 我を人間らしく取扱はるる様なれど
- (五) どんな物かし
- (六) 故郷を離れて取寄き所なく、細き
- (七) 手放してやるは心配
- (八) 今迄主定まらずに過
- (九) 来し今迄主定まらずに過
- (一〇) 多し上より決し兼る程
- (一一) 明石上より決し兼る程
- (一二) 源氏六條御所の病を訪ひて秋好を托せらる
- (一三) 齋宮は天子一代毎に齋宮を免られし也
- (一四) 六條上京
- (一五) 源が世話する事は
- (一六) 昔さへつれなかりしなれば、今舊情を温め
- (一七) 思ひ切居る故、御息所が
- (一八) 源から言寄るに
- (一九) 源が訪ひ行く事
- (二〇) 出分らず、又今身が重
- (二一) 源も強ひて口説き寄らば
- (二二) なつたらうと床しどるに
- (二三) 依然たるもので

思ひ歎く。今や京におはし著くらむと思ふ日數も經ず御使あり。この頃の程に迎へむことをぞ宣へる。いと頼もしげに、かすまへ宣ふめれど、いさやまた、島漕ぎ離れ、中ぞらに心ほそき事やあらむ、と思ひわづらふ。入道も、さて出し放たむはいと後めたう、さりとて、斯く埋もれて過さむを思はむも、なかく來しかたの年頃よりも、心づくしなり。萬につよましう、思ひ立ち難きことを聞ゆ。まことや、かの齋宮もかはり給ひにしかば、御息所上り給ひて後、かはらぬ様に、何事もとぶらひ聞え給ふことは、あり難きまで情を盡し給へど、昔だにつれなかりし御心ばへの、なかくならむ名残は見じ、と思ひ放ち給へれば、渡り給ひなとする事は殊になし。あながちに聞えうごかし給ひても、我心ながら知り難く、とかくかよづらはむ御歩行なども、所狭う思しなりにたれば、強ひたる様にもおはせず。齋宮をぞ如何にねびなり給ひぬらむと、ゆかしう思ひ聞え給ふ。なほ彼の六條の舊宮を、いと能く修理し繕ひたりければ、みやびかにて住み給ひけり。由



- (一) 得意らしき様子にて
- (二) 御息所が
- (三) 佛を鎌ふ神宮
- (四) 源氏
- (五) 色戀てなく何ぞの相談相手に思ひ居たるに、出家したのが残念
- (六) 御息所が
- (七) 源の心、今も御息所を疎末に思はぬ我志を當人に認めさせざる事は出来ぬかも知れぬと
- (八) 源が自身見舞ふ位氣にかけて居るのを
- (九) 吾死後源が心細がるべければ、何ぞの折には力になつて下され
- (一〇) 世話を頼むべき
- (一一) 生甲斐なき我ながら安心が出る迄、源に分別が出る迄生きて居る積であつた

づき給へること古りがたくて、よき女房など多く、好いたる人の集ひ所にて、物淋しきやうなれど、心やれるさまにて經給ふ程に、俄に重く煩ひ給ひて、物のいと心細く思されければ、罪深き所に年頃經つるも、いみじう思ひて、尼になり給ひぬ。大臣聞き給ひて、かけくしき筋にはあらねど、なほさるかたの物をも聞え合せ人に思ひ聞えつるを、斯く思しなりにけるが口惜しう覺え給へば、驚きながら渡り給へり。飽かず哀なる御とぶらひ聞え給ふ。近き御枕上に御座よそひて、脇息におしかよりて、御返など聞え給ふ。いたう弱り給へるはひなれば、絶えぬ志の程は見え奉らでやと、口惜しうていみじう泣い給ふ。かくまでも思しとどめたりけるを、女も萬に哀に思ひて、齋宮の御事をぞ聞え給ふ。御息所「心細くてとまり給はむを、必ず事に觸れて數まへ聞えたまへ。また見護る人もなく、類なき御有様になむ。かひなき身ながらも、今暫し世の中を思ひのどむる程は、とさまかうさまに物を思し知るまで、見奉らむとこそ思ひ給ひつれ」とても、消え

- (一) 御頼みなくとも構はぬ答はないが
- (二) 當然力になるべき親に頼み置いてさへ女親にき後はみじめな者
- (三) 況や他人なれば源が情人扱にするにしても面白からぬ事情生じ邪魔にされるであらう
- (四) 嫌な案じ事なれど
- (五) 必ず色戀の沙汰にならぬ機に頼む
- (六) 我が嫌な経験から見ても
- (七) 男には關係させずには置きたし
- (八) 不躰な事をいふさ
- (九) 私も近頃は其邊もよく心得て居るに、相變らずの浮氣者の様に思召すは不本意也、自然お解りになるべし
- (一〇) 透き通りて
- (一一) 若し秋好が見ゆるかと
- (一二) 薄暗き
- (一三) 御息所の機
- (一四) 髪先を剪揃へたる姿派手やかにて脇息に思れる體

入りつと泣き給ふ。源かよる御事なくてだに、思ひ放ち聞えさすべきにもあらぬを、まして心の及ばむに従ひては、何事も後見聞えむとなむ思ひ給ふる。更に後めたくな思ひ聞え給ひそなど聞え給へば、御息所「いと難きこと。まことにうち頼むべき親などにて見護る人だに、女親に離れぬるは、いと哀なることにこそ侍るめれ。まして思ほし人めかさむにつけても、味氣なき方やうちまじり、人に心も置かれ給はむ。うたてある思遣りごとなれど、かけてさやうの世づいたる筋に思し寄るな。憂き身をつみ侍るにも、女は思の外にて物思ひを添ふるものになむ侍りければ、いかで然る方をもて離れて見奉らむ。と思ひ給ふる」など聞え給へば、あいなくも宣ふかなと思せど、源年頃よろづ思ひ給へ知りたるものを、昔の好心の名残あり顔に宣ひなすも本意なくなむ。よしおのづから」とて、外は暗うなり、内は大殿油の、ほのかに物より通りて見ゆるを、もしやと覺えて、やをら御几帳のほころびより見給へば、心もとなき程の火影に、御髪いとをかしけに花や



かにそぎて、寄り居給へる。繪に畫きたらむ様して、いみじう哀なり。帳の東面に添ひ臥し給へるぞ、宮ならむかし。御几帳のしどけなく引き遣られたるより、御目とどめて見通し給へれば、頬杖つきて、いと物悲しと思いたる様なり。僅なれど、いと美しげならむと見ゆ。御髪のかよりたる程、頭つきけはひ、あてに氣高きものから、ひぢよかに愛敬づき給へるけはひ著く見え給へば、心もとなくゆかしきにも、さばかり宣ふものと思しかへす。御息所「いと苦しさ増り侍る。かたじけなきを、はや渡らせ給ひぬ」とて、人にかき臥せられ給ふ。御近く参りたるしるしに、よろしう思されば嬉しかるべきを、心苦しきわざかな。いかに思さるよ」とて、覗き給ふ氣色なれば、御息所「いと恐しげに侍るや。みだり心地のいとかく限なる折しも渡らせ給へるは、まことに淺からずなむ。思ひ侍る事を少しも聞えさせつれば、さりととも頼もしくなむ」など聞えさせ給ふ。御かよる御遺言のつらに思しけるも、いと哀になむ。故院の御子達、數多ものし給へど、親しく

- (一) 前齋宮秋好
- (二) 引退けられたる隙間
- (三) 押れ親むへの意味
- (四) 母娘が彼程氣遣に思ひ居るのれ手も出せぬと
- (五) 無禮なる故歸つて買ひたし
- (六) 快い方ならば
- (七) 恐い程に衰へたり
- (八) 死んでも安心
- (九) 我を遺言聞くべき人の一人と思はれたるも
- (一〇) 桐壺

睦び思すもをさくなきを、上の同じ御子達のうちに、數まへ聞え給ひしかば、さこそは頼み聞え侍らめ。少しおとなしき程になりぬる齡ながら、あつかふ人もなければ、さうくしきを「など聞えて、歸り給ひぬ。御とぶらひ今少したちまさりて、しばく聞え給ふ。」

七八日ありて亡せ給ひにけり。あへなう思さるよに、世もいとはかなくて、物心ほそう思されて、内裏へも参り給はず。とかくの御事などおきてさせ給ふ。又頼もしき人もことにおはせざりけり。ふるき齋宮の宮司など、仕う奉り馴れたるぞ、僅に事ども定めける。御みづからも渡り給へり。宮に御消息聞え給ふ。御何事も覺え侍らでなむ」と、女別當して聞え給へり。御聞えさせ宣ひ置きし事ども侍りしを、今は隔なきさまに思されば、嬉しくなむ」と聞え給ひて、人々召し出でて、あるべき事ども仰せ給ふ。いと頼もしげに、年頃の御心ばへ、とりかへしつべう見ゆ。いといかめしう、殿の人々數もなう仕う奉らせ給へり。哀にうちながめつよ、

- (一) 桐壺が齋宮を我子の機に思ひし故、我も齋宮を兄弟と思はん
- (二) 自分も年輩になりたれども、手にかけて育つべき目下の者のなきが寂しければ
- (三) 源が前よりは繁く見舞ふ
- (四) 御息所逝去、源氏秋好の世話をやく
- (五) 御息所が
- (六) 源があつげなく思ふ
- (七) 源が御式杯の世話をやく
- (八) 外に力になる人もなし
- (九) 源自身も
- (一〇) 齋宮が返事したり
- (一一) 御息所の遺言もあれば、今後は我を力にして買ひたし
- (一二) 萬事を指圖す
- (一三) 今までのつらさも懐滑しになりそうに見ゆ
- (一四) 源方の人々多く來て世話を
- (一五) 源も